

昭和 56 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

(発掘調査編)

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は昭和51年11月1日に発足した。それは京都市が市内の埋蔵文化財を発掘調査するために設けた機関である。元々、昭和45年度まではこのような調査は、京都府教育委員会がその調査の都度、指導者を大学その他の関係機関所属の専門家に依頼して行ってきたものであるが、京都市域分を京都市文化観光局に設置されたので市の文化財保護課に担当させることになった。従って京都市も、府教育委員会が行ってきた調査方法を取って行った。しかし、それまで調査対象として含めなかった平安京とその周辺市域内の全ての遺構をとりあげ調査する方針が立てられたこともあって、5年を過ぎると、従来の方針でまかないきれないことがわかり、その処理に当るため当研究所を発足させたのである。

ところで、埋蔵文化財の調査は、調査しただけで終わるものではない。調査の成果を報告しなければならない。始めは従来のように詳細に記したものを作成したが、調査件数は次第に数を増し、特別なもの以外は、依頼者の要望に応える程度の内容のものと限定する試みもした。この方法をとっても、結局、一件一件は覚えていても、その地域に於ける全体見通しを立てることも容易ならない状態になってきた。

そのことから、年間に地域のどのあたりでどのような成果が得られたかを知ることのできる年報を作成して、調査者自身が知識を整理すると共に、京都においてどのようなものを調査しているのかを必要とする人々に早く役立てるようにすべきだと考えついた。

ところで、京都市が現に行っている調査は、調査を必要とする箇所について、まず試掘を行って、遺構・遺物の存否を知る調査（試掘調査という）と、遺構等の性格を知るために、或る深さを掘り、遺構の広がりを求める調査（発掘調査という）と、別に、道路等で公営の事業で行われるようなものに関してはその工事について立ち会う調査（立会調査という）がある。これらの成果を一括報告すれば大部なものになるので、発掘調査、試掘、立会調査に分けて、その概要を報告することにした。ただ、この形式を取ったことは先述のように、京都市域に於ける調査の全般の状況を知るためのものであって、この報告で全部終わったわけではない。個々の重要な遺構については詳細な報告を従来通り刊行することを考えている。

いずれにせよ、調査には関係者各位の絶大な御厚意を受けて行っているもので、その都度に感謝の辞をささげ挨拶を申し上げているのであるが、これを上梓するに当たり、改めてその時にはいろいろと御世話になっていることを厚く御礼申し上げます。

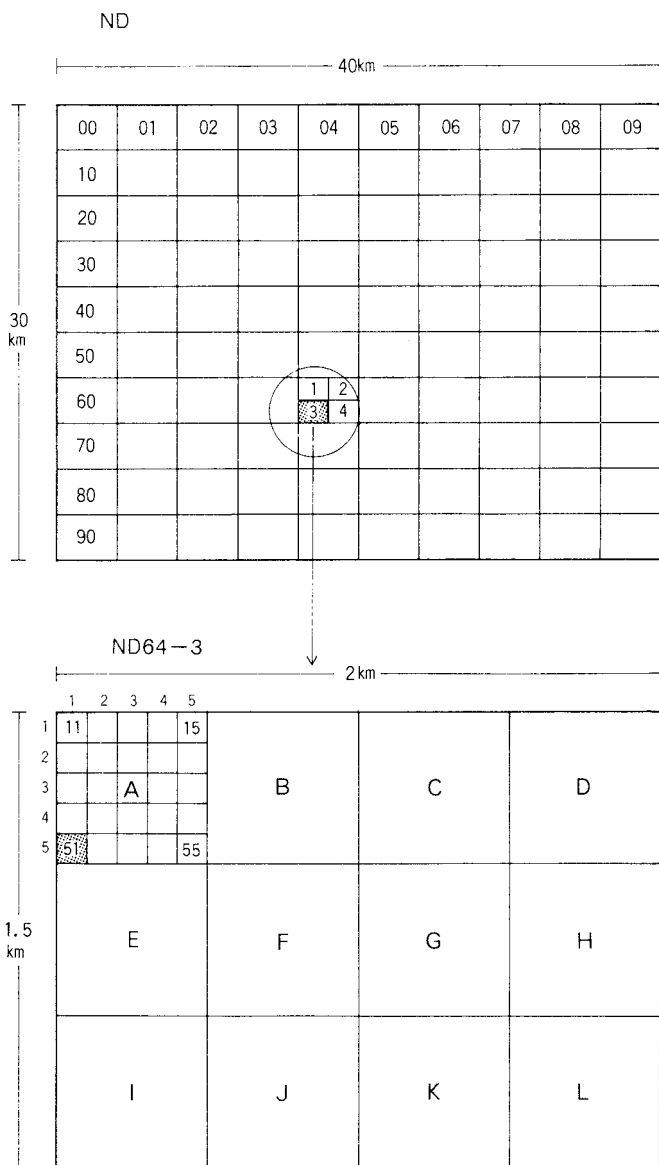
昭和58年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

- 1 本書は昭和56年度に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託契約を受け実施した埋蔵文化財調査のうち、58ヶ所で行った発掘調査の概要報告である。ただし、平安京右京七条一坊(京都市中央卸売市場第1市場施設整備工事に伴う発掘調査)については、調査継続中につき次年度に報告する。
- 2 本書で使用した方位および座標は、国土地理院「平面直角座標系VI」によった。
- 3 本書で使用した水準高は、全て京都市遺跡測量基準点によった。
- 4 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図を校正し、調整したものである。
- 5 各報告の始めに掲げた1～5は次の内容を記す。
1=調査地 2=調査年月日 3=調査面積 4=調査地点の表示および遺跡略記号
5=調査契機
- 6 調査地点の表示については次ページで説明する。
遺跡略記号は京都市を便宜上9つの大地区(HK=平安京, NG=長岡京, RH=洛北, KS=北白川, RT=洛東, FD=伏見・醍醐, TB=鳥羽, MK=南・桂, UZ=太秦)に分け、次いで遺跡名や原因者名等を2文字のアルファベットで表したものである。頭の数字は年度を示す。
- 7 遺跡表示記号は奈良国立文化財研究所の用例に従った。例: SA(柵)・SB(建物)・SD(溝)・SE(井戸)・SF(道路)・SG(池)・SK(土壌)・SX(不明遺構)
- 8 ㊦・㊧・㊨・㊩・㊪を付したものは、京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所より、昭和56年度文化庁国庫補助事業に伴う発掘調査概報が出版されている。
㊦=『平安京跡発掘調査概報』・㊧=『鳥羽離宮跡調査概報』・㊨=『中臣遺跡発掘調査概要』・㊩=『北白川廃寺跡発掘調査概要』・㊪=『中久世遺跡発掘調査概報』
- 9 個々の報告は文末に記した各担当調査員が執筆した。写真は大部分を牛島茂が撮影した。編集・実務は調査部長田辺昭三の指導のもとに丸川義広がこれを担当した。

10 調査地点の表示は、以下の原則による。



例 ND64-3 A51

1 使用した地図は、京都市都市計画局発行の1/2500 都市計画基本図(国土基本図)である。

2 図幅は東西2km, 南北1.5kmで、これを各500m四方のブロックに分割し、更に各々100m四方のブロックに細分した。

3 調査地点は国土基本図の座標系(VI), 図葉番号(ND64-3)とアルファベット(A~L), 番号(11~55)で示した。

目 次

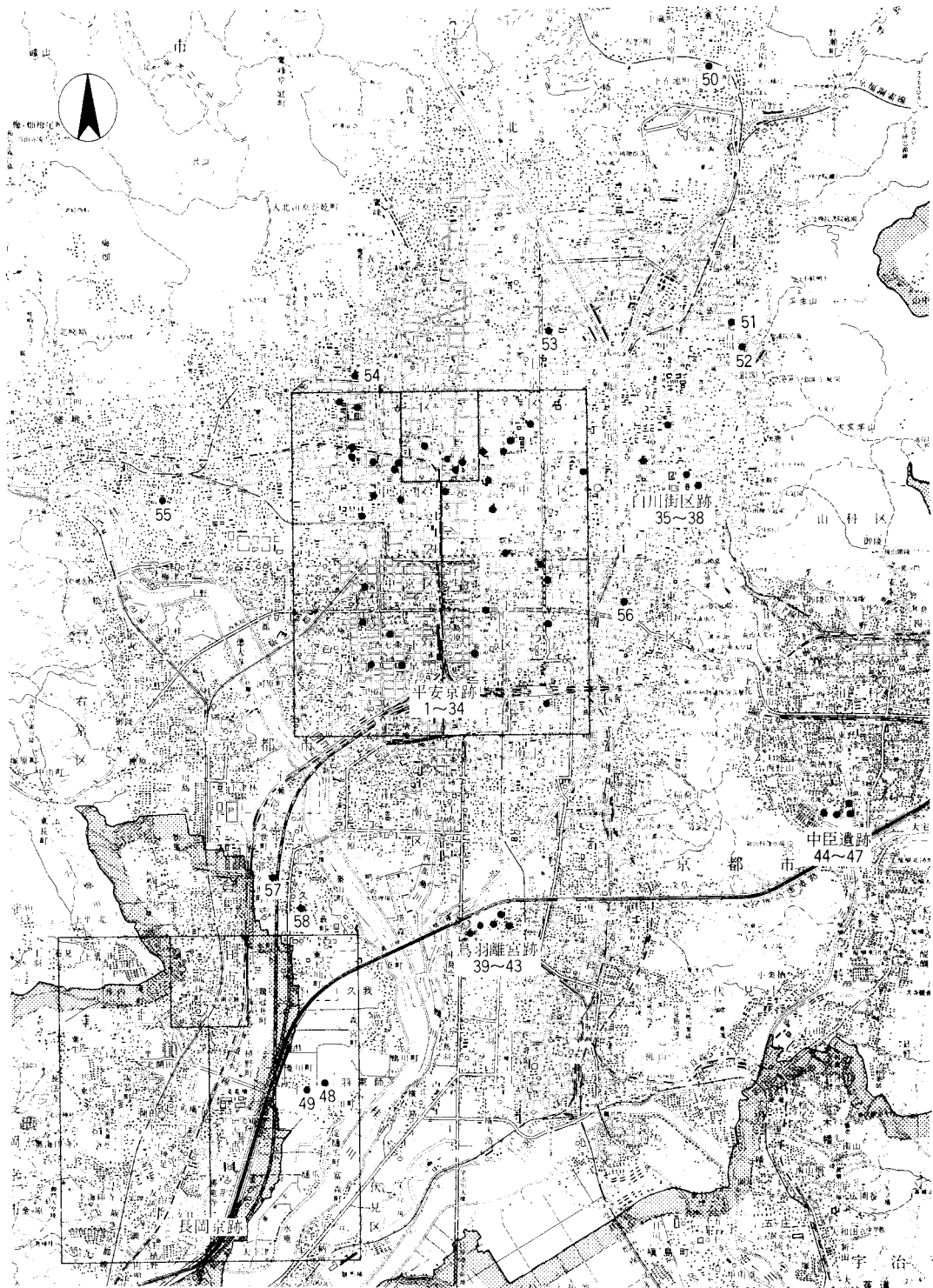
I 平安宮・京跡	1	27 右京三条二坊 (1)	37
1 豊楽院跡	1	28 右京三条二坊 (2)	39
2 朝堂院跡	2	29 右京三条三坊	41
3 民部省跡	3	30 右京五条三坊	43
4 太政官跡	4	31 右京六条三坊	45
5 左京一条二坊	5	32 右京七条二坊	47
6 左京一条三坊	6	33 右京八条二坊 (1)	48
7 左京二条二坊 (1)	8	34 右京八条二坊 (2)	50
8 左京二条二坊 (2) 高陽院跡	9		
9 左京二条二坊 (3) 史跡二条城	11	II 白河街区跡	51
10 左京二条四坊	12	35 福勝院跡	52
11 左京三条一坊	14	36 白河北殿跡	54
12 左京三条二坊	16	37 最勝寺跡	56
13 左京四条二坊	18	38 法勝寺跡	57
14 左京五条三坊 (1)	19		
15 左京五条三坊 (2)	20	III 鳥羽離宮跡	58
16 左京六条二坊	21	39 第69次調査	59
17 左京六条三坊	22	40 第70次調査	60
18 左京七条一坊	24	41 第71次調査	62
19 左京九条三坊	25	42 第72次調査	64
20 右京北辺三坊 (8)	27	43 第74次調査	66
21 右京北辺三坊 (2)	28		
22 右京一条三坊	30	IV 中臣遺跡	68
23 右京二条二坊 (1)	32	44 第45次調査	69
24 右京二条二坊 (2)	33	45 第46次調査	70
25 右京二条二坊 (3)	34	46 第48次調査	71
26 右京二条三坊	35	47 第49次調査	72

V	長岡京跡	73	52	小倉町別当町遺跡	79	
	48	左京四條四坊・五條四坊	74	53	相国寺旧境内	81
	49	左京四條二坊・三坊・四坊	75	54	北野遺跡	84
				55	嵯峨野小学校内遺跡	85
VI	その他の市内遺跡	77	56	六波羅政庁跡	87	
	50	岩倉忠在地遺跡	77	57	中久世遺跡	88
	51	北白川廃寺	78	58	大藪遺跡	90
VII	まとめ	91				
VIII	昭和56年度の活動報告	93				
	1	普及啓発事業概要	93			
	2	京都市考古資料館運営概要	94			
	3	人事異動	95			
	4	組織および役職員	95			

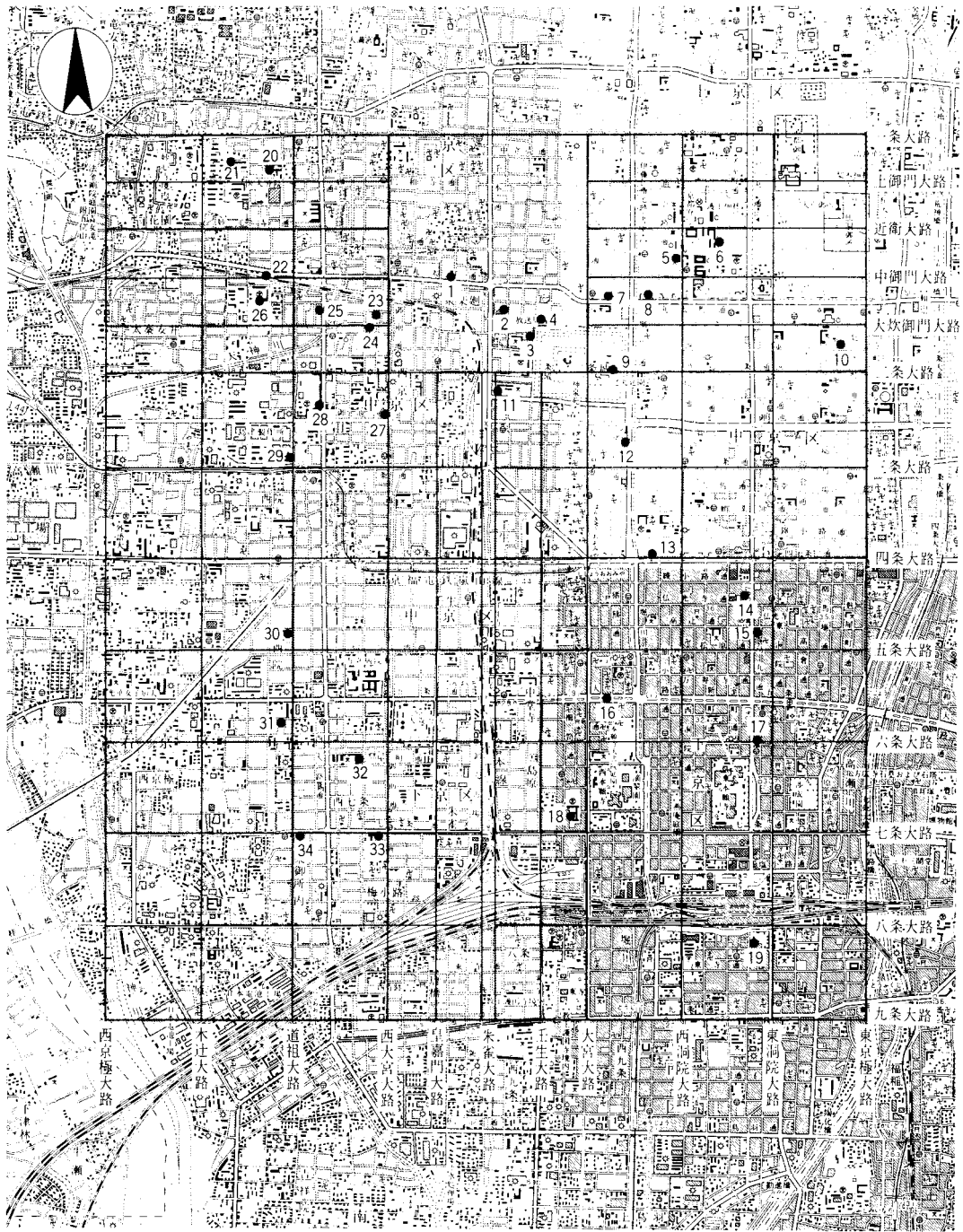
図版目次

図版1	遺跡	1	平安京左京二条二坊(2)SG1-B全景(南から)
		2	SG1-B州浜(北東から)
		3	SG1-D地業(北から)
図版2	遺跡	1	平安京左京二条二坊(3)全景(江戸時代・北から)
		2	平安京左京二条二坊(3)全景(平安時代・北から)
図版3	遺跡	1	平安京左京五条三坊(1)全景(北東から)
		2	土壙墓(東から)
		3	井戸(西から)
図版4	遺跡	1	平安京右京一条三坊全景(東から)
		2	平安京右京二条三坊全景(東から)
図版5	遺跡	1	平安京右京三条二坊(2)全景(北西から)
		2	平安京右京六条三坊全景(北から)

- 図版 6 遺跡 1 平安京右京三条三坊全景(東から)
2 S D 10I(北西から)
3 S D 10I(南東から)
- 図版 7 遺跡 1 平安京右京八条二坊(1)全景(北から)
2 平安京右京八条二坊(2)全景(北から)
- 図版 8 遺跡 1 法勝寺跡全景(古墳時代・北東から)
2 土器出土状況(南東から)
3 木器出土状況(北東から)
- 図版 9 遺跡 1 鳥羽離宮跡第71次調査全景(鳥羽離宮期・北から)
2 鳥羽離宮跡第71次調査全景(弥生時代・北から)
- 図版 10 遺跡 1 鳥羽離宮跡第72次調査全景(東から)
2 鳥羽離宮跡第74次調査S D 1(北東から)
- 図版 11 遺跡 1 中臣遺跡第46次調査西半全景(東から)
2 中臣遺跡第49次調査I区全景(東から)
- 図版 12 遺跡 1 長岡京跡K区全景(西から)
2 長岡京跡L区全景(東から)
- 図版 13 遺跡 1 長岡京跡M区全景(北から)
2 K区遺物出土状況(北西から)
3 J区竪穴住居址内遺物出土状況(北西から)
- 図版 14 遺跡 1 小倉町別当町遺跡全景(南東から)
2 嵯峨野小学校内遺跡全景(北西から)
- 図版 15 遺物 鳥羽離宮跡第71次調査出土土器
- 図版 16 遺物 法勝寺跡出土土器
- 図版 17 遺物 平安京右京二条二坊(2)出土土器
- 図版 18 遺物 平安京左京二条二坊(2)高陽院跡出土土器・硯
- 図版 19 遺物 平安京左京二条二坊(2)高陽院跡出土軒瓦
- 図版 20 遺物 長岡京跡(1～5)・鳥羽離宮跡(6)出土墨書土器・木簡



京都市内調査地位置図 (1:100000, 数字は報告番号を示す)



平安京跡内調査地位置図 (1:40000)

I 平安宮・京跡

1 豊楽院跡 ㊦

- 1 中京区聚楽廻西町 70
- 2 1981年4月30日～5月9日
- 3 30㎡
- 4 ND 64-1 J 2 1 81 HK-B R 5
- 5 店舗・住居（併用）建設



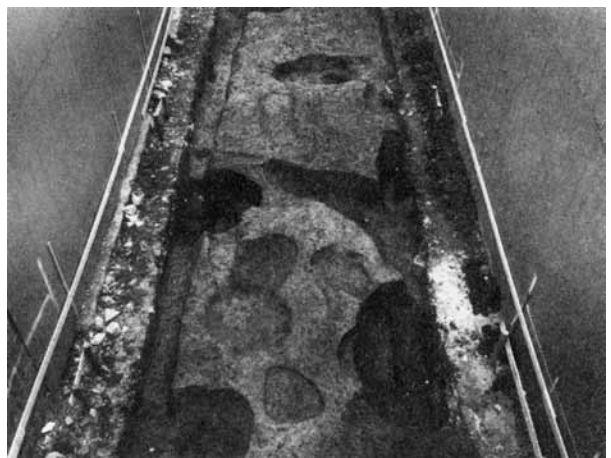
経過 「みどり」ビルの新築工事によって、地下遺構の破壊される恐れが生じた。まず、試掘調査を実施したが、その結果、地下約15cmに遺構を確認し、瓦や凝灰岩を採集したので発掘調査を実施することとなった。調査区は周辺の状況もあって、東西3m、南北10mの小規模なものにとどまった。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、上から現代層（厚さ約15cm）、暗黄灰色粘土層（厚さ約10cm）、暗黄褐色粘土層（厚さ約5cm）、黄褐色粘土層（地山）である。

暗黄灰色粘土層上面で、江戸時代の土壙を1基検出した。径約1m、深さ70cmの円形を呈する。黄褐色粘土層の上面では、平安時代の土壙を9基検出した。径0.5～1m、深さ10cm程で、円形や楕円形を呈する。埋土はいずれも茶褐色粘土層であった。

出土遺物は整理箱3箱分にとどまった。江戸時代では土壙から出土した土師器・染付・瓦がある。平安時代では、各土壙から土師器・須恵器・瓦が出土した。また、江戸時代の土壙より『小及』銘の軒丸瓦が1点出土した。

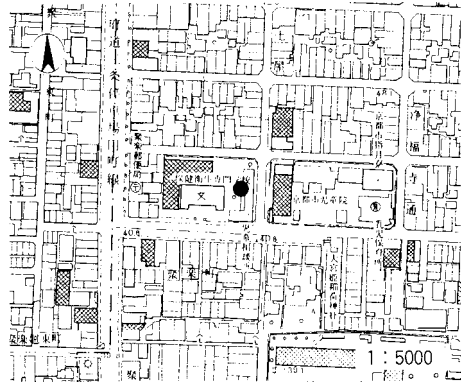
小結 今回の調査では、平安時代の土壙を検出したのみで、直接豊楽院に関する遺構は検出できずに終わった。しかし、削平の少ない北側に土壙が遺存する点を考慮すれば、周辺部では豊楽院関係の遺構の遺存する可能性も強く、今後とも引き続いての調査が必要となるう。（吉崎 伸）



全 景（北から）

2 朝堂院跡

- 1 上京区千本通二条下ル主税町 910-25
旧児童院
- 2 1982年3月6日～3月25日
- 3 313㎡
- 4 ND 64-1 J 44・54 81 HK-L F
- 5 京都市児童福祉センター建設



経過 調査地は朝堂院東回廊の推定地で、回廊基壇および基壇化粧が発見されるものと想定し、調査区を設定した。しかし、わずかに古墳時代の溝状遺構を一部に確認したにとどまり、他は全て近世以後の土取りによって削平されていた。従って古墳時代の遺構の調査に限って実施した。

遺構・遺物 攪乱および削平のため古墳時代の溝状遺構（S X 1）を検出したのみである。幅は約3m、深さ約0.5mを測る。溝内堆積土は黒褐色泥砂である。遺構の残存状況からみて、ほぼ南北に走るものと思われる。

遺構に伴って出土した遺物には古墳時代の土師器・須恵器があり、土師器は甕・高杯で、須恵器は杯身・杯蓋・甕がある。

小結 東回廊の遺構は調査地の北を走る東西道路で発見されており、道路部分の削平が少ないことが知れる。

古墳時代の溝状遺構は出土遺物から6世紀後半のものと考えられ、当調査地北東30mで発見された古墳時代の溝とは時期の異なるものである。

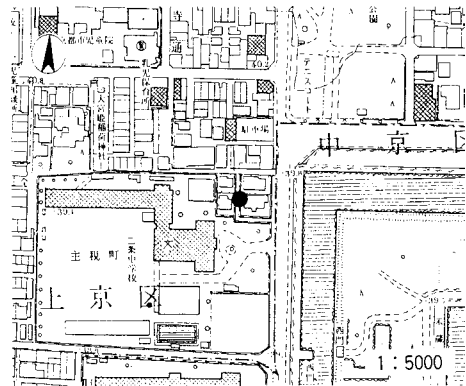
（本 弥八郎・長宗繁一）



全 景（北から）

3 民部省跡

- 1 上京区竹屋町通千本東入ル主税町 910
- 2 1981年7月6日～7月31日
- 3 224㎡
- 4 ND 64-3 B 15・C 11 81 HK-L
D
- 5 京都地方裁判所主税町宿舎建て替え



経過 調査地は二条城の北西隅に隣接する。江戸時代には二条城と並行して諸司代関係の屋敷などが建ち並び、また平安時代では平安宮民部省跡に該当する地である。

調査はまず現地地表下約50～70cmまでの現代積土層を重機によって掘り下げ、以下手掘りで調査を進めた。調査の結果、調査区の東約3/5を江戸時代の池状遺構が占め、池状遺構の西端で平安時代の土壌を発見した。

遺構・遺物 基本層序は、上から現代積土層が厚さ約50～70cm、茶灰色泥砂層が厚さ約30～40cm、茶褐色砂礫層が厚さ約20～50cm、黄褐色砂泥層が厚さ約10cmそれぞれ堆積し、黄褐色砂泥層下は地山の黄灰色砂泥層となる。

平安時代の土壌は黄灰色砂泥層上面で検出した。東は池状遺構に切られ、北は調査区外へ広がる。現存長は東西約2.5m、南北約2.7mで、検出面から深さ約1mを測る。埋土は2層に大別でき、上層では瓦・土師器を主体に黒色土器・須恵器・緑釉陶器などを包含し、下層では瓦を主体に土師器などを包含する。

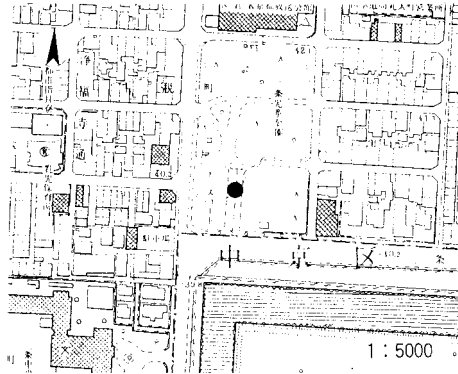
池状遺構は黄褐色砂泥層上面で検出した。東・北・南は更に調査区外へ広がる。検出面からの深さは約1.5mを測る。西肩付近および調査区東端で石の集中する部分がある。西肩部には落下した状態で、一部にタガネ痕がある。東端部には長さ10～100cmまでのものがコの字状にある。遺物は江戸時代の瓦が多量に出土した。

遺物はコンテナで85箱出土した。このうち平安時代の土壌からは48箱の遺物が出土した。内容としては瓦が最も多く、須恵器・緑釉陶器は極めて少ない。瓦では平瓦・丸瓦の他に軒平瓦・軒丸瓦が多数出土した。

小結 今回の調査成果としては、顕著な遺構は発見するに至らなかったが、遺物については土壌から平安時代前期のものを多量に発見することができた。この土壌出土土器は宮内における平安時代前期の土器様相を知る上で貴重な資料と言えよう。 (辻 裕司)

4 太政官跡

- 1 上京区都芳通美福東入ル主税町二条児童公園内
- 2 1981年9月1日～9月12日
- 3 64㎡
- 4 ND64-1K51 81HK-LE
- 5 上京区主税町二条児童公園内公設防火水槽新設工事



経過 京都市消防局が、二条児童公園内に防火水槽を建設することになった。当地は平安宮内にあり、宮関係の遺跡が想定されたため発掘調査を行うことになった。調査トレンチは一辺8mの正方形で、調査面積は64㎡である。9月2日より掘削を行い、9月12日に調査は終了した。

遺構・遺物 調査地の大部分が江戸時代の濠に当る。その他に土壇3基、柱穴2個を検出した。濠は南北方向のもので、幅4.5m、深さは検出面より1.3～1.7mである。室町時代の遺構として柱穴を1個検出した。平安時代に遡るものは検出できなかった。

遺物は整理箱に5箱分出土した。江戸時代のものには濠より出土した染付磁器・近世陶器・土師器・瓦・人形等がある。室町時代のものは包含層より、瓦を中心に土師器・陶磁器等が出土した。

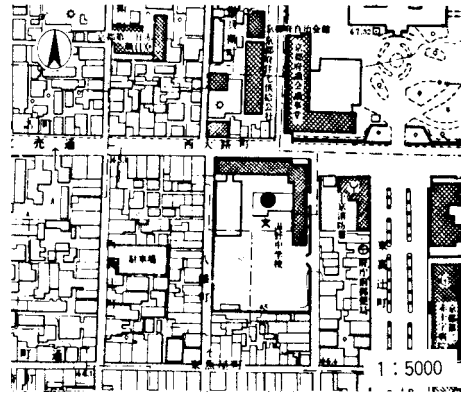
小結 当地は平安宮内の太政官と宮内省の間の道路に推定されたことから、路面の検出が予想された。調査の結果、江戸時代の濠が調査区の大半を占めるに至った。濠の方位は二条城のそれと同様であり、二条城造営後のこの地一帯の再開発に関連するものと考えられる。 (辻 純一)



全 景 (北から)

5 左京一条二坊

- 1 上京区西洞院通下立売下ル東裏辻町
402
- 2 1981年5月11日～6月4日
- 3 200㎡
- 4 ND 64-1 L 14 81 HK-MA
- 5 市立滋野中学校屋内運動場改築工事



経過 調査地は、平安時代初めの公卿貞主の邸宅跡「滋野井」の一画に推定されている。このため、これに関する遺構の存在が予想され、工事に先立ち発掘調査を実施する運びとなった。当地は、校舎建設時の整地層が約1.5mにも及ぶため、この部分を機械力で除去し、後は人力で調査を行った。

遺構・遺物 検出した主な遺構には、中世末～近世初頭の柵列・井戸・土塋等がある。柵列は調査区の東および西寄りに並行して2列検出した。西側の柵は南北7間分を検出した。東側の柵は南北9間分検出し、各柱穴には径30cm前後の石を据えているのが特徴的である。井戸は調査区の南東部で検出しており、一辺3.5mの方形を呈する。ただし、埋土中に径30～50cmの石材を多量に含むことから本来は石組井戸であったものが廃棄時に破壊されたものであると考えられる。土塋は調査区の北部で検出し、一辺2.5m、深さ50cmの方形を呈する。この土塋からは、土師器・焼締陶器・染付等が多量に出土し、良好な一括資料となった。また、緑釉陶器・灰釉陶器等の平安時代の遺物も、近世の遺構から出土している。

小結 今回の調査では、当初予想されていた「滋野井」に関する遺構は全く検出できなかった。しかし、出土遺物の中には平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器等が含まれているので、これからも「滋野井」の存在を推測することが可能であり、引き続き周辺での綿密な調査が必要である。

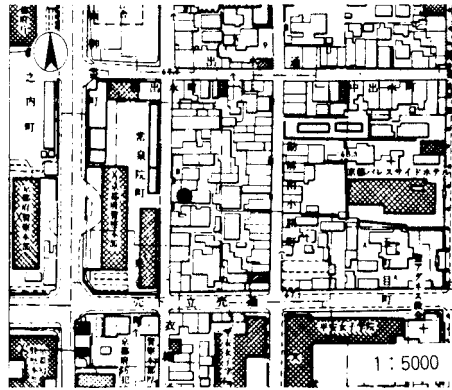
(吉崎 伸)



全 景 (西から)

6 左京一条三坊

- 1 上京区衣棚通下水ル常泉院町 133-3
- 2 1981年7月1日～7月22日
- 3 60㎡
- 4 ND 64-2 E 52 81 HK-MB
- 5 京都第二赤十字病院看護婦宿舍建設



経過 調査地は平安京左京一条三坊の六町に当る。また、調査地の北西約100mに位置する京都合同法務庁舎の建設に先立って、1975年に鳥羽離宮跡調査研究所によって発掘調査が実施され、平安時代後期から鎌倉時代にかけての建物・柵列、室町時代から桃山・江戸時代にかけての礎石を持つ建物・井戸等が検出されている。今回の調査では、まず、近現代の盛土層をパワーショベルによって除去し、以下を手掘りによって調査を進めた。

遺構・遺物 基本層序は地表下約80cmまでが現代層、以下140cmまでが江戸時代の整地層である。次に、灰褐色泥砂層（厚さ約20cm）、黒褐色泥土層（厚さ約20cm）の順に堆積し、地山の茶褐色混礫泥砂層となる。灰褐色泥砂層には平安～室町時代の遺物が含まれ、黒褐色泥土層には米粒大の土師器の細片が含まれていたが、時期は不明である。確認した遺構は黒褐色泥土層上面で検出したものである。

検出した遺構には江戸時代の土壇（SK5・7）、井戸（SE2）、室町時代の土壇（SK1・3）、溝（SD4）、ピット群がある。以下、室町時代の遺構について説明する。

SK1 幅90cm、長さ1.8m以上の矩形を呈する。南辺を攪乱墳に切られる。深さは25cmを測り、墳内にはこぶし大の礫が充填されていた。

SK3 幅1.7m、長さ不明、深さ20cmを測る。西辺を江戸時代の井戸（SE2）に切られている。この墳内からは、土師器皿（いわゆるヘソ皿）が多数出土している。

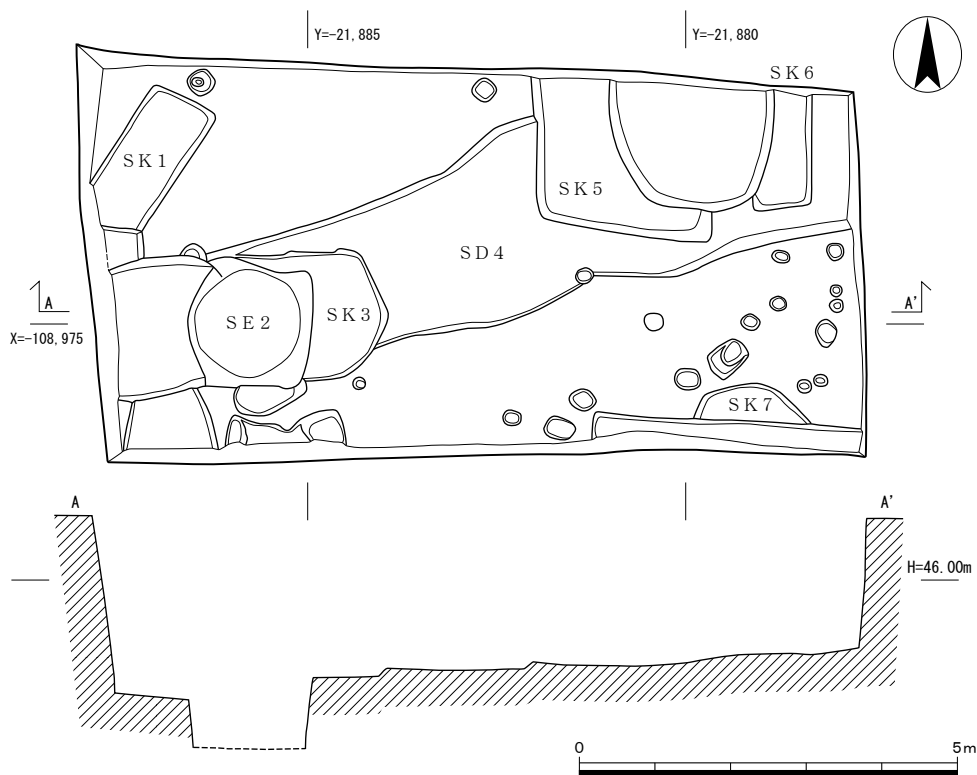
SD4 北東から南西方向に緩やかに流れる浅い溝である。幅約2m、深さは10cmを測る。埋土は緑灰色を呈する砂層であった。

ピット群 調査区の南東部分に集中して検出された。円形や楕円形を呈するが、各ピットを結びつけて建物等を復原することはできなかった。

出土遺物は、江戸時代のものとして土師器皿・塩壺・陶磁器・石臼、桃山時代のものとして金箔を施した巴文軒丸瓦がある。室町時代に属するものは大部分がヘソ皿と呼ばれる

土師器皿で、他に輸入陶磁器（青磁）がある。量的には少ないが平安時代のものとして土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。この他、古墳時代の須恵器杯蓋も少量出土している。

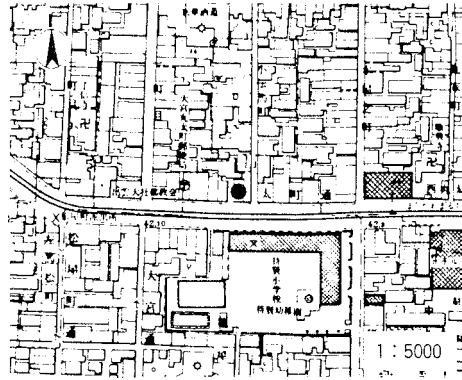
小結 調査地の周辺では平安時代・鎌倉時代の建物等の遺構が検出されており、当調査地でも関連の遺構が検出されるものと期待された。しかし、平安時代の遺物は、室町時代の遺物包含層・遺構から出土しているものの、平安時代の遺物包含層・遺構を検出することはできなかった。桃山時代の金箔を施した巴文軒丸瓦については、当調査地が織田信長の築造した旧二条城の内堀と外堀に推定される地点のほぼ中央に位置することから、旧二条城に関連した建物に使用された可能性が指摘できる。最後に、室町時代の遺構の中ではあるが、古墳時代後期の須恵器が出土しているので、今後付近の調査によって関連遺跡が発見される可能性は大きいと考えられる。 (木下保明)



遺構実測図 (1:100)

7 左京二条二坊(1) ㊦

- 1 上京区丸太町通大宮東入ル藁屋町 530
- 2 1981年3月28日～4月10日
- 3 50㎡
- 4 ND 64-1 K 45 81 HK-J O
- 5 (株)中沢紙店倉庫建設工事



経過 調査地は平安京左京二条二坊一町および春日小路に該当する。工事に先立って試掘調査を実施したところ、平安～鎌倉時代の柱穴を検出したので発掘調査を実施することとなった。調査対象面積約120㎡のうち、東西5m、南北10mのトレンチを設定した。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、上から現代盛土層、近世の暗灰色砂泥層、黒灰色砂泥層があり、この下には弥生時代の遺物包含層である暗茶褐色粘土層、黒灰色粘土層が堆積し、地山の暗黄褐色粘土層に至る。暗茶褐色粘土層の上面で、平安～鎌倉時代の土壌、柱穴を多数検出した。調査区が狭いこともあって、建物や柵列は十分に復原できなかった。弥生時代の遺構には、柱穴・炉があるが、掘立柱建物や竪穴住居址としてのまとまりは認められなかった。

出土遺物は整理箱に10箱分ある。江戸時代の遺物は、土師器・染付・瓦等である。平安～鎌倉時代の遺物には、土師器・須恵器・瓦等がある。弥生時代には、中期後半に属する壺・甕・台付無頸壺・台付鉢等がある。

小結 調査区では平安～鎌倉の多数の柱穴を検出したものの、春日小路の痕跡は検出できずに終わった。一方、下層では弥生時代中期の遺物包含層を検出し、市街地における弥生遺跡の復原に貴重な資料を提供した。(吉崎 伸)

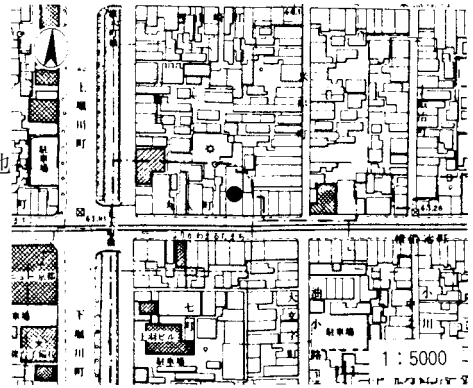


全 景 (北から)

8 左京二条二坊(2)高陽院跡 ㊦

図版1・18, 19

- 1 中京区丸太町通油小路西入ル丸太町27他
- 2 1982年2月12日～4月20日
- 3 456㎡
- 4 ND 64-1 L42 81HK-ME
- 5 高陽院ハイツ新築工事

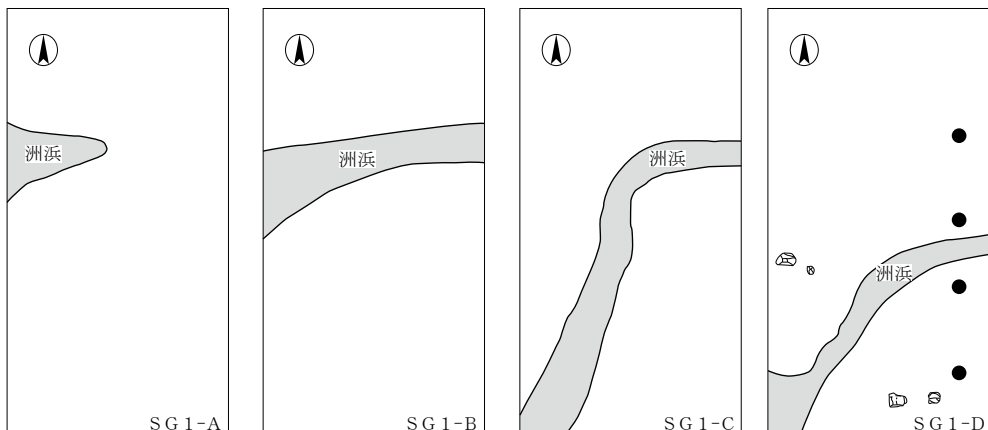


経過 調査地は平安京左京二条二坊内で、その北東部二町四方を占める高陽院推定地内の中央北西寄りに位置する。試掘調査を行った際に、多量の瓦を含む堆積層および池の州浜と思われる石敷きを検出したため、1982年2月12日より発掘調査を行った。当初、東西15m、南北20mの調査区を設定したが、後に北へ8m拡張した。

遺構 4時期にわたる池跡(SG1-A～D)とそれに伴う庭石・柱穴列など、平安時代の庭園跡と考えられる遺構を検出した。古い池より順に概略を記す。

SG1-A 今回の調査で検出した最も古い池である。SG1-B州浜の保存上全面調査はせず、調査区内の攪乱層を利用し、東西5.5m、南北10mの確認トレンチを設けた。その他はボーリング調査にとどめた。確認トレンチ南端で東西方向の州浜を検出した。池は州浜の北、東、南に広がり、州浜は西から東に池内に突き出ていることがわかった。

SG1-B SG1-Aの州浜を含めた北を砂礫などで埋め、新たにSG1-A州浜上部に西がやや南に下るように東西方向の州浜を作っている。州浜の北はその西端より北東方向に砂が広がる。州浜の規模は東端で幅約2.4m、西端で約5.6mを測る。石は隙間な



SG1の変遷模式図(1:500)

く敷かれ粘土質で貼り固めている。池底にも拳大の石が密集するが、貼り固めた痕跡はなく、性格は不明である。池は緩やかに南に下るが、肩口から最も深い部分までの比高差は約 30cm 程である。この池と S G 1 - C の間には 2 回の小改修が行われている。1 回目は砂州を構築し、2 回目は東側に比較的大きな礫を用いた州浜を作り、池を縮小している。

S G 1 - C S G 1 - B の池、州浜を埋め、南、東に縮小している。州浜は調査区中央付近から南に湾曲する。規模は幅 1 ~ 1.5 m を測り、肩口から池底まで 30 ~ 40cm の比高差を持つ傾斜をなす。池底は S G 1 - B を継承している。

S G 1 - D S G 1 - C の池全体を多量の瓦によって埋め、更に州浜の外側に土を盛り傾斜をつけている。州浜は東端中央より北西に湾曲して南西端に至る。池底は小礫を含む泥土で貼り固めている。池内外に 2 ヶ所チャート質の庭石を配している。また調査区東端付近に柱穴列（南北 1 列 3 間分）がある。柱穴の規模は径 80cm の円形で、深さは検出面より約 1.5 m を測る。柱の心々距離は、中央が 4.8 m、両端が 5.4 m である。

遺物 整理箱約 1600 箱分の遺物が出土した。これらは池中や整地層から出土したもので、特に S G 1 - D の地業より多量の瓦が出土している。整地層には火を受けた土器や焼土が多量に含まれ、火災記事との関連で注目される。

瓦埴類、軒丸瓦 69 種約 290 点、軒平瓦 116 種約 570 点を含め、整理箱約 1500 箱分出土した。そのうち約 1000 箱が S G 1 - D の地業より出土したものである。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鴟尾・埴に分類できる。奈良時代から鎌倉時代までのものがあるが、特に平安時代後期のものが多く、また地方からの搬入品も多い。

土器類 池の堆積土や改修時の整地層から、平安時代後期から、鎌倉時代にかけてのものが出土した。特に池の堆積土からは完形品が集中して出土し注目された。内容は、土師器・須恵器・無釉陶器・瓦器・灰釉・青磁・白磁等である。

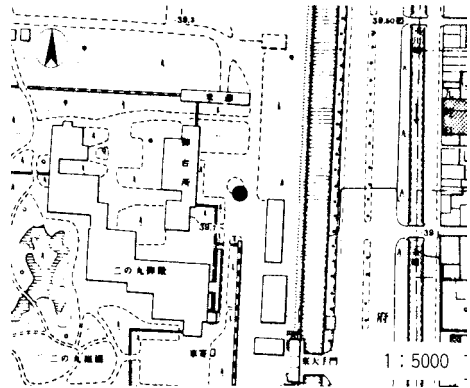
なお S G 1 - A よりいわゆる猿面硯が 1 点出土している。須恵器の素地に黒漆を施し、側面に金・銀を使用した波文の研出蒔絵を施した優品である。

小結 高陽院は平安時代の代表的な寝殿造建築であり、藤原頼道の造営以来文献史料に類出している。この文献史料によって推測されていた高陽院の遺構の一部を確認できたことは大きな成果である。検出した各池が高陽院のどの時期に対応するかは今後の問題となるが、遺構の残存状況が良好なことから、周辺での調査の成果を待って考察を進めたいと考えている。 (辻 純一・平尾政幸)

9 左京二条二坊(3) 史跡二条城

図版 2

- 1 中京区二条通堀川西入ル二条城町 541
- 2 1981年8月4日～11月9日
- 3 363㎡
- 4 ND 64 - 3 D 21・31 81 HK - J J 7
- 5 収蔵庫建設



経過 二条城の城内建物の一部は、明治から大正にかけて撤去されたものがあり、今回の調査の目的の1つである1番～6番倉もその頃撤去されている。ところが、この倉跡に重複して新たに収蔵庫が建設されることになり、事前に2番～6番倉の該当地について発掘調査を実施した。なお、当該地は冷然(泉)院および南に二条大路が推定される地である。

遺構・遺物 第1面で検出した倉は、寛永3年当時の二条城指図では2～6番倉に相当する。礎石はなく礎石据付穴を検出した。なお、礎石据付穴は倉毎に形状を異にする。

第2面では南北方向の道路敷および道路敷に付随する両側溝・柵列などを検出した。真北に対する振れが二条城と同方向であることから、二条城創建当時の遺構と思われる。

第3・第4面では室町時代から平安時代後期に至る柱穴群・溝・井戸・土壇などを検出した。溝はいずれも東西方向に走り、調査区南端では二条大路北側溝を、二条大路北側溝から北へ約30mと約60mの地点でそれぞれ一町内を区画すると思われる溝を検出している。

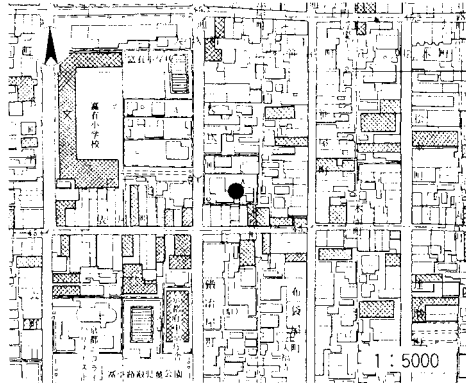
第5面では平安時代後期の溝・土壇などを検出した。東西溝は推定二条大路北側溝より北へ13mの地点に位置する。南北溝はほぼ真北を示し、猪隈小路東側溝と思われる。

第6面では、縄文時代晩期の流路を検出した。土器は小片であるが数10片出土している。遺物は整理箱で271箱出土したが、多くは近世のものである。遺物内容としては、縄文土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器・瓦器・青磁・白磁・軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・銭貨・金属製品などである。なお軒瓦には金箔を有するものもある。

小結 二条城造営以後の遺構破壊は少なく、今回の調査地からは比較的遺存状態の良好な各時期の遺構・遺物を多数発見した。中でも条坊に関する溝は各時期のものを多く発見できた。このうち二条大路北側溝は室町～平安時代後期の各期にわたるが、いずれもほぼ同位置を踏襲している。更には猪隈小路東側溝を発見し、また一町内を区画する東西溝を5条発見するなど、平安京の条坊復原には欠かせぬ資料となった。(辻 裕司)

10 左京二条四坊

- 1 中京区富小路夷川上ル大炊町 357
- 2 1981年9月28日～12月4日
- 3 310㎡
- 4 ND 64-4 B 14 81 HK-F B
- 5 農林水産省共済組合京都宿泊所建設



経過 調査地は平安京左京二条四坊の中にあり、十一町と十四町を分ける富小路の推定位置に当る。この付近には、平安時代から鎌倉・室町時代にかけての貴族の邸宅が集中し、遺跡の重複が予想されるところであった。

古墳時代	流路
平安時代	路面・側溝・井戸・柱穴・土壇・土器溜め
鎌倉・室町時代	柱穴・土壇
桃山・江戸時代	井戸・土壇・石組施設・墓

遺構・遺物 調査地の層序は極めて複雑で、

現代盛土層下に中・近世の整地層や遺構が複雑に切り合っている。平安時代の遺構は、標高43.40m前後の黄灰色粘土層上面に成立しており、この下層に、古墳時代の遺物を含む流路を1条検出した。

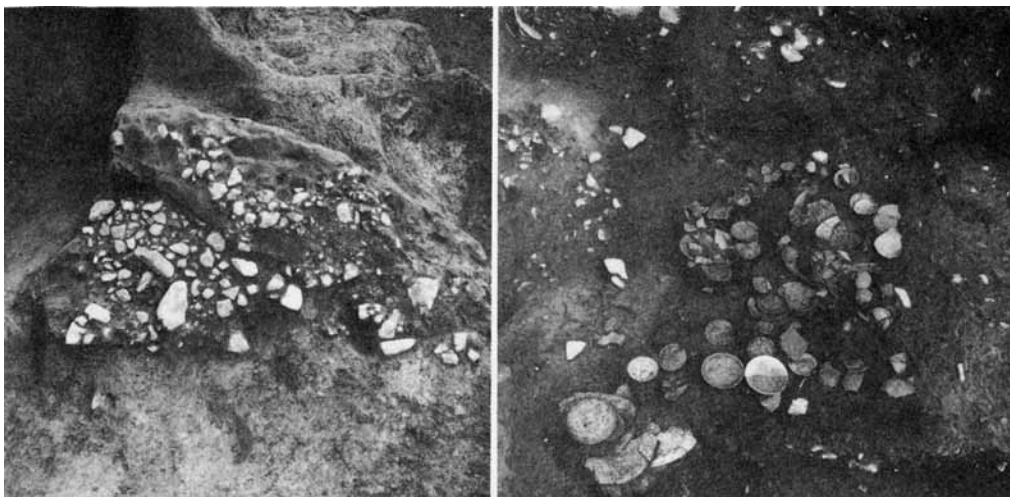
検出遺構は右上の表に示した。桃山・江戸時代に関しては井戸・土壇・石組施設の他に土壇墓があり、北接する寺院の墓地が当初この付近にまで及んだことが予想される。中世に関しては、柱穴と大小の土壇を多数検出した。平安時代では推定位置どおりに富小路の路面と両側溝を検出した。各所が寸断されて道路の残りは悪いが、側溝心々で6.95m、路面幅5.85mを測る。なお、道路心の座標値は、 $X = -109,578$ mで $Y = -21,155.05$ mである。路面は小石を敷きつめた面を持つ。後に周囲に土壇が掘られたので、土壇内に倒壊した箇所もあった。西側溝からは10世紀後半代の土器・陶器が出土した。これらの遺構の下層で、南西方向に流れる流路を検出した。幅約9m、深さ1mを測る。埋土は細砂層と泥土層の互層で、下層より5世紀後半、上層より7世紀前半の土師器・須恵器が出土した。

遺物は整理箱に約120箱分ある。古墳時代から飛鳥・平安・鎌倉・室町・桃山・江戸の各時期のもので出土している。内容は土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉・灰釉・中近世陶器・輸入および国産陶磁器・瓦・土製品・金属製品・銭貨等である。なお、江戸時代遺構より鉄滓が出土しているが、近接する町名に「鍛冶屋町」があり注目される。

小結 今回の調査では推定位置に富小路の路面と側構を検出し、条坊復原に貴重な資料を得た。更に下層では古墳時代遺物を含む流路を検出し、付近に遺跡の存在する可能性が高まった。ところで、この流路は飛鳥時代に埋められたことが出土遺物より判断できるが、富小路路面もこの上部にあってよく整地がなされており、京内の条坊施工時にこうした自然地形を整地し、造営が進む様子がよくわかる例となった。 (丸川義広・中村 敦)



全 景 (平安時代, 西から)

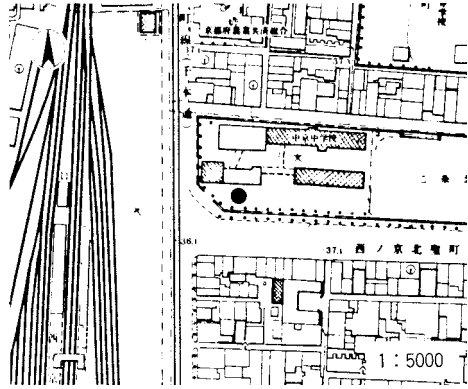


富小路路面 (倒壊箇所, 北から)

土器溜め検出状況 (南から)

11 左京三条一坊

- 1 中京区西ノ京北聖町 62
- 2 1981年8月25日～9月22日
- 3 161㎡
- 4 ND 64-3B 43・44 81 HK-C L 2
- 5 市立中京中学校水泳プール新設



経過 西ノ京北聖町に位置する中京中学校は、平安京条坊復原図による左京三条一坊一町の中にあり、北に二条大路、西に朱雀大路と接する平安宮正面東寄りの箇所である。また、江戸時代に下っては西町奉行所に比定されており、千本通と押小路の一角にはこれを示す碑が立てられている。同校は、すでに1979年夏に校舎増築に伴う発掘調査が実施されており、この時は近代に属する建物・井戸・溝等を検出している。今回は敷地の西南隅に水泳プールが建設されることになり、朱雀大路東側溝や西町奉行所西限施設の検出を主目的に、東西28mの細長いトレンチを設けて23日間にわたり調査した。

遺構・遺物 調査地の層序は比較的単純で、現地地表下約1.5m（標高35.30m）付近に地山の黄灰色粘土・礫土層があり、この上に江戸時代の旧耕土層、整地層が各々20～30cmあり、更に近・現代の盛土層となっていた。

検出した遺構は鎌倉時代から江戸時代にかけての建物・柵・溝・土壇等であった。これらは先の土層堆積状況によって3つの遺構面として把握することができた。

第1遺構面は江戸時代整地層上面をさす。柱穴約10個、溝4条、土壇10基以上を検出した。このうち、西寄りで検出した南北溝SD1は、その位置から推察して江戸時代の西町奉行所の西限を画す施設の可能性がある。

第2遺構面は江戸時代旧耕土層上面をさす。東西および南北方向の溝を数条検出した。一部に畦道状の高まりや、畑の畝を示すものもある。

第3遺構面は地山上面を指す。掘立柱建物2棟、柵1列、溝2条、土壇4基を検出した。SB2は東西2間、南北2間以上で、西に半間分を付けたす。柱間は1.7～2.1mでばらつきがある。SB3は東西3間、南北1間以上で、柱間は東西2.7m、南北は2mを測る。SD5と重複する位置の柱穴は削平されて存在しない。SD5は幅1.2m、深さ0.5mを測る南北溝である。埋土は3層に分けられたが、最下層には多量の丸・平瓦が含まれていた。

軒瓦や土器類の出土がなく、正確な年代は決めがたい。SD6は2段に掘り込まれた南北溝で、幅は上段で2.9m、下段で1.5m、深さ0.6mを測る。埋土より瓦と少量の土師器・陶器が出土した。瓦の中には連珠文軒平瓦や巴文軒丸瓦が含まれていたが、これらは、鎌倉時代に属すると考えられる。このSD6は朱雀大路東側溝の該当位置にある。

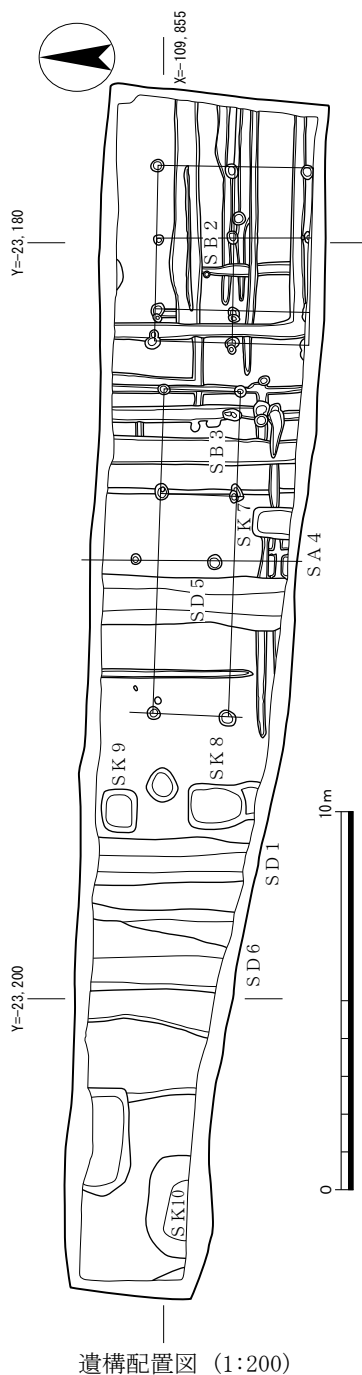
遺物は整理箱に22箱分出土した。土師器・須恵器・瓦器・緑釉・灰釉・輸入および国産陶磁器・瓦・金属製品等がある。特に瓦の出土量が多いのは、平安時代前・中期の宮所用瓦が混入した結果であろう。

小結 今回の調査で明らかになった3つの遺構面のうち第1、第2遺構面については史料である程度の年代比定が可能である。まず、江戸時代整地層については、寛文8年(1668)に西町奉行所が開設されているので、この前後に実施されたであろう造成工事との関連が指摘できる。

次に、二条城周辺は「二条御城廻」と呼ばれ、江戸時代初期には依然として田園地帯であったと記録されているが、今回検出した旧耕土層の存在はこれとよく一致している。つまり、調査地とその周辺は、二条城造営(1603)以降も田園の景観を留めて、寛文年間頃に奉行所開設に代表される屋敷地に変貌したとみられる。

最後に、西端で検出した南北溝SD6については、その位置が平安京条坊復原図による朱雀大路東側溝の該当位置に当るものの、出土遺物は鎌倉時代に下るものが多く、これを本来の大路側溝と考えるには問題を残した。しかし、該当位置に南北溝が存在した事実も評価されなければならない。今後こうした資料の増加を待つて考察してゆきたい。

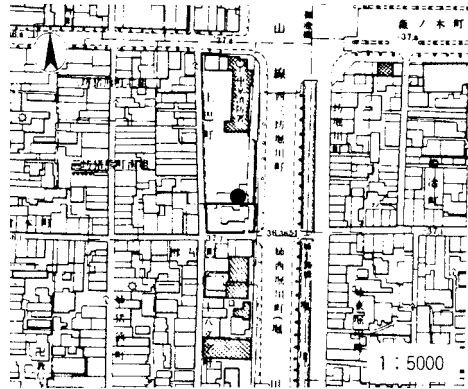
(丸川義広)



遺構配置図 (1:200)

12 左京三条二坊

- 1 中京区堀川通御池下ル上巴町 413-1
他
- 2 1982年2月10日～5月11日
- 3 780㎡
- 4 ND 64-3H 21 81 HK-F C
- 5 京都市中京区総合庁舎新築工事



経過 調査地は平安京左京三条二坊六町に当る。この敷地の北半分に測って消防庁舎が所在したので、基礎の攪乱は著しいことが予想された。一方、敷地の南端部は推定姉小路北側溝の検出される位置にあり、このため南北45m、東西16mの細長いトレンチを南半に設定して調査を開始した。

弥生時代	溝1
平安時代	溝2・井戸3・柱穴多数
鎌倉時代	溝1・土壇・柱穴多数
室町時代	溝3・井戸4・土壇・柱穴多数
桃山・江戸時代	井戸・土壇多数

遺構・遺物 調査地の基本層序は下から地山の黄灰色砂泥層（標高36.50m付近）、平安・鎌倉時代の整地層、近・現代の盛土層となり、この間の厚さは約1.5mである。地山上面には弥生時代の遺構があり、上記整地層には各種の遺構が複雑に切り合う状況を呈していた。

検出した遺構のうち主要なものは表に示したが、特に江戸時代以降の大規模な土壇が、主として西半分に顕著に存在し、これを調査して時点で全体の約半分の面積で下層遺構が削平されるという事態に至った。以下、時代毎に遺構の概略を記す。

弥生時代に関しては、幅1.2m以上、深さ0.3mの溝状遺構を検出した。周囲が後世の遺構によって削平を受けていたが、南北6.5m以上認められた。構内には比較的良好な形状をとどめた弥生土器が3個体以上あり、近傍には集落遺跡の存在が予想される。

平安時代に関しては、溝・井戸・土壇・柱穴等を検出した。時期的には後期に下るものが多い。南端部では姉小路北側溝に該当する東西溝を検出した。土層観察によると、溝どうしの複雑な切り合い関係がみられ、出土遺物より平安時代中期から室町時代にかけて幾度も掘り直して使用されたことが明らかとなった。3基の井戸を検出したが、このうちの1基は、掘形幅3.5mに達する巨大な井戸で、一辺1.2mの木枠が深さ2mまで良好に遺

存していた。木枠内の埋土からは12世紀の良好な遺物が出土した。

鎌倉時代に関しては、溝と土壇・柱穴等を検出したが、顕著なものはない。

室町時代では、南端部で姉小路北側溝とこれに沿う柵列を検出した。この柵列は中央部で門に復原できる根石を持つ柱穴に取り付く。また、北側溝より北に24mと44mの地点に東西溝を各1条検出したが、これらは宅地内の細分に関する遺構かと思われる。井戸は4基検出した。内分けは、石組2基、木枠組1基、桶組1基である。石組井戸のうちの1基からは、15世紀に属する土師器皿が多量に出土した。

遺物は整理箱に約160箱出土した。弥生時代と平安・鎌倉・室町・桃山・江戸の各時代の遺物が出土した。弥生土器には畿内第Ⅲ様式に属する壺と甕がある。平安～江戸時代遺物の内容は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉・灰釉・中近世陶器・輸入および国産陶磁器・瓦・金属製品等である。

小結 調査地では中央を境に西半分に地山の黄灰色砂泥層が堆積し、これを西肩として東半分に旧堀川の流れを示す灰色砂礫層が堆積していた。つまり調査地内の東半分は、かつての堀川の流路に該当したわけであるが、断割り等によっても遺物は採取し得ず、正確な年代は決められなかった。ただし、西肩わずか数mに弥生時代の遺構が存在することを考慮すれば、当時の流路は更に東方であった可能性が強い。次に、姉小路北側溝については、平安時代中期から室町時代という長期にわたり改修を受けたこと、年代が下るにつれて南に位置が移ること等を明らかにした。現在の姉小路は幅員約3mの小径であるが、その背景には上記のような経過があったのである。

(丸川義広・辻 裕司)



弥生土器出土状況 (北西から)



弥生土器

13 左京四条二坊

- 1 下京区四条通油小路西入ル藤木寄町 26
- 2 1981年5月18日～7月22日
- 3 200㎡
- 4 ND 64-3 L 43 81 HK-F A
- 5 朝日生命京都第2ビル建設



経過 当調査区付近は、過去の調査例が少なく、調査区を設定する際に調査対象地北端で一部試掘調査を行い基本層位、遺構面の深度を確認した。その後、盛土および現代層を重機で除去し調査を開始した。調査地の南側は現在の四条通に面しているが、平安京条坊復原図によると当調査区の南半部は、四条大路北側の築地および側溝が推定される位置である。

遺構・遺物 調査の結果、平安時代から江戸時代にかけての遺構が重複して多数検出された。まず、江戸時代の遺構には建物・地下室・土塋などがある。建物は河原石を礎石として用いていたが、削平を受けており、規模や間取りについては明確でない。地下室は2ヶ所検出された。いずれも床面に厚く漆喰を塗り丁寧に仕上げている。側壁は花崗岩の切り石を積み上げている。これらの地下室の中には焼けた棧瓦・焼土・壁土・陶器類などが廃棄されていた。室町時代の遺構には、多数の土塋・井戸などがある。井戸は2基検出され、いずれも河原石を用いた石組井戸である。最下部には方形の木枠が認められた。なお、ほとんど破壊されていたが竈が一部検出された。平安時代の遺構として井戸を2基検出した。2基の井戸は重複しており、新しい時期のものには方形の木枠が遺存していた。古い段階のものは最下部に一段だけ木枠が検出された。いずれも平安時代後期に属する。

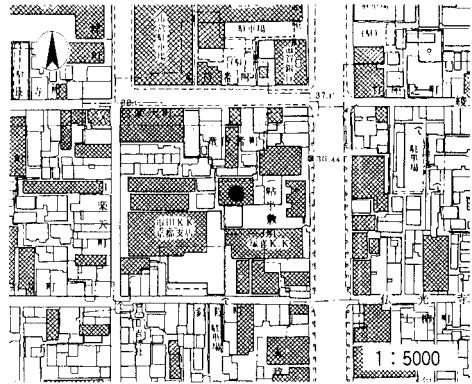
遺物は、江戸時代から室町時代にかけてのものが大半を占め、鎌倉・平安時代のものは極めて少なかった。出土遺物の中で注目されるのは、室町時代後半と考えられる石組井戸より出土した、仏花瓶・茶臼・火舎・金属製の釜などの茶道具を思わせるものがある。

小結 四条大路北側の築地・側溝などの遺構は、江戸時代から室町時代にかけての遺構のために全く検出することができなかった。井戸が4基検出されたが、これらの井戸は南へゆくに従って新しくなっている。このことは、四条大路の衰退を示すものと考えられる。

(鈴木久男)

14 左京五条三坊(1) 図版3

- 1 下京区烏丸通綾小路下ル二帖半敷町 652
- 2 1981年4月8日～7月31日
- 3 770㎡
- 4 ND 74-2 A 13 81 HK-C K
- 5 K2ホテル新築工事



経過 既存建物撤去の際の立会調査で、現地表下約1.4m付近まで近・現代層が達することが明らかになり、重機でこれを排除した後手掘りで調査を進めた。最上面で桃山時代以降の遺構と、一部調査区南端部付近で室町時代後半の遺構を検出した。以下、室町時代後半、室町時代前半および鎌倉時代、平安時代、更に一部では古墳時代の遺構面を検出した。この間の堆積層の厚さは80cmで、地山は標高35.2m前後である。

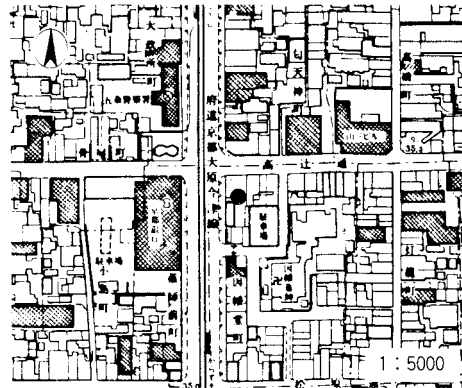
遺構・遺物 各期の遺構は重層して複雑な状況を呈する。検出した遺構総数は600を超え、土壌・井戸・溝・柱穴・石室・墓等その種類も多様である。これらの遺構のうち各時期を通して一般的にみられるのは土壌である。時期別にみると桃山期の土壌には大規模なものも多く、一辺が3～4m、深さ1.5m以上のものが数基ある。このような大土壌はいずれもゴミ捨穴のような施設と思われ、土器類を始め多量の遺物が出土している。室町時代の土壌には多量の土師器を含むものが多くあり、あるいは礫が多量に投入されたものもある。また犬が埋葬された土壌を1例検出している。平安～鎌倉期の遺構としては、井戸・土壌・柱穴等がある。井戸はいずれも方形の木組みを持つものであるが、平安時代の1基を除き残存状態は良くない。古墳時代の遺構には円形にまわる溝や竪穴住居状のものがある。

各遺構からは多量の遺物が出土した。総数は整理箱にして460箱である。遺物の大半は土器類であり、瓦類は少ない。その他に各期の井戸や土壌から木器・金属器が出土している。古墳時代の溝からは、須恵器・土師器が少量出土した。

小結 調査区内における複雑な遺構の在り方は、この地域の大きな特徴である。周辺のこれまでの発掘・立会調査によっても多くの遺構・遺物が発見されており、この付近が平安京造営以来、都市としての機能を果たしてきたことを示している。また、弥生時代から古墳時代にかけての集落の存在していたことも確認されており、今回の調査によって関連する遺構が検出されたことは大きな意味を持つといえよう。(平尾政幸・中村 敦)

15 左京五条三坊(2)

- 1 下京区烏丸通松原上ル因幡堂町 661
- 2 1981年10月19日～12月1日
- 3 180㎡
- 4 ND 74-2 A 34 81 HK-P D
- 5 (株)高島屋記念館新築工事



経過 調査地は烏丸通高辻の南東角に位置する。四条烏丸近辺は、弥生時代から延々と続く複合遺跡であることが、数々の調査によって判明している。

遺構・遺物 調査の結果、南側が近代の大きな攪乱を受けているが、平安時代から江戸時代までの遺構と下層に古墳時代の流路が検出された。流路は調査区の南部を北東から斜めに流れ、北側の肩部を検出した。川幅は不明である。平安時代後期の遺構は、井戸が3基認められた。2基は底部に薄板を方形に組んだ井戸枠が認められたが、残存状態は悪い。室町時代は、井戸・溝・土壙等の遺構があり、最も多い。溝は北端を東西に走り、幅0.7～1m、深さ40cmの規模である。この溝は平安京条坊復原図による推定高辻小路の南側築地に伴う溝の可能性はある。しかし築地の痕跡は検出できなかった。江戸時代以降は、多数の井戸が認められ、石組みを残している。

古墳時代の遺物は流路から出土し、古式土師器・土師器・須恵器がある。摩滅している土器が多い。平安時代後期以降は、土師器・須恵器・陶磁器・緑釉・灰釉・瓦器・瓦・和鏡・銭貨等の遺物があり、室町時代のものが最も多い。

小結 今回の調査では遺構の重複が激しく、近代以降の攪乱も多かったが、古墳時代の流路、室町時代の遺構は良好に遺存していることが認められた。

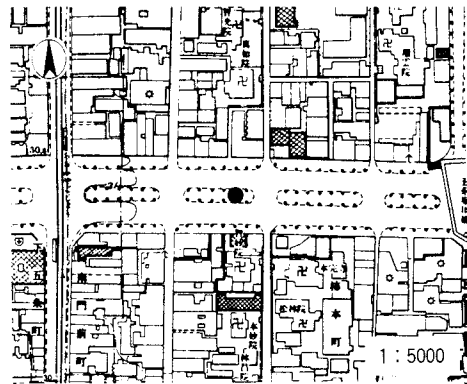
(前田義明)



全 景 (北から)

16 左京六条二坊

- 1 下京区醍醐町 291 ～南門前町 471
- 2 1981年6月6日～8月15日
- 3 516㎡
- 4 ND 74- 1 G 24・25・H 21 81 HK - GK 3
- 5 国道9号線都市共同溝建設工事



経過 調査は継続調査で、本年度は3年目である。第1次・第2次調査では平安時代～江戸時代に至る遺構・遺物を検出し、特に第1次調査では六条坊門小路、側溝を検出した。調査地は平安京の街区で左京六条二坊三町・六町・十二町内の北部に当る。調査区は西から第1区(16m)、第2区(24m)、第3区(15m)とし、いずれも幅5mである。調査目的は六条坊門小路および南接する建物群の検出と、当調査地の平安時代～近世に至る変遷の状況の把握においた。

遺構・遺物 調査区は全般に近・現代の攪乱・削平が激しい。第3区では遺構面が3面(平安時代後期・室町時代前半・後半)あるが、第2区では東半分で2面(平安時代・室町時代)、第2区西半部、第1区では1面(室町時代)だけである。検出した主な遺構は次のものがある。全調査区で室町時代～桃山時代の濠(幅2.6m、深さ1m)を検出し、第3区で南へ折れ曲がる。第2区では東半部北端で六条坊門小路南側溝(幅0.7m、深さ0.2m)を検出した。また全調査区で平安時代から桃山時代に至る土壌・柱穴を多数検出したが、建物としてまとまるものはなかった。また第2区で古墳時代(6世紀)の溝を検出した。

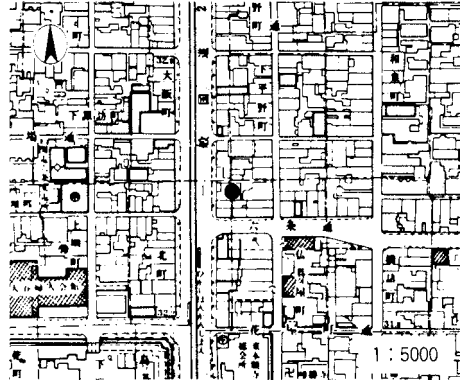
出土遺物には土器・瓦・金属製品などがある。土器には土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器・磁器などがあり、室町時代のものが大半を占める。濠・土壌から一括で多量に出土した。瓦・金属製品は少ない。

小結 調査の結果、平安時代の遺構は六条坊門小路南側溝と、それに南接する地域の建物柱穴を若干検出した。しかし調査範囲が狭いため、その性格等不明な点が多い。また全調査区で濠を検出した。この濠は先年調査を実施した本圀寺跡で検出した濠と形状・時期が同一である。本圀寺は室町時代後半には寺地が北に拡張されており、今回検出した濠との関連が注目される。

(上村和直・本 弥八郎・磯部 勝)

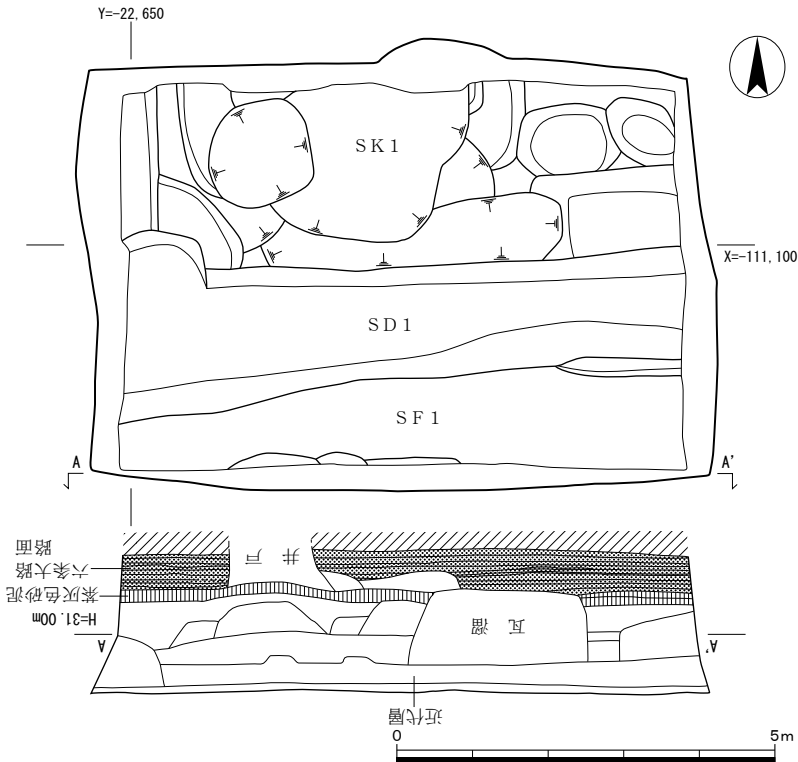
17 左京六条三坊 ㊦

- 1 下京区烏丸六条上ル北町 181
- 2 1981年10月12日～10月24日
- 3 44m²
- 4 ND 74-2 E 54 81 HK-P C
- 5 第5キョートビル新築工事



経過 調査地は左京六条三坊の南端に当り、六条大路北側溝の検出が予想される位置に当る。試掘調査を行ったところ、東西方向の溝と路面状の遺構を検出したので、東西8m、南北5mのトレンチを設定し調査を行うこととなった。

遺構・遺物 検出した遺構は、溝・土壇・柱穴・道路・井戸等で、平安時代から江戸時代にわたる。このうち調査区南半で六条大路の路面（SF1）と北側溝（SD1）を検出したので、以下若干の説明を加える。



遺構実測図 (1:100)

S F 1 六条大路の路面に該当するもので、地山の褐色砂礫層上部に厚さ0.7 mにわたって作られていた。この間を礫と砂層でつき固め、10回前後の補修の跡が認められた。

S D 1 六条大路北側溝に該当する。幅約1.5 m、深さ60cmの「U」字形を呈する。溝内の埋土は均一な茶褐色砂泥層で、室町時代後半の遺物が出土した。このS D 1はS F 1の最上層から成立しており、S F 1の路面各期に対応する側溝は検出できなかった。

この他、築地が想定される位置には、近世の土壙S K 1を検出した。

遺物はS D 1・S K 1から主に出土している。S D 1からは、土師器・陶器・輸入陶磁器等が出土した。S K 1からは、土師器・陶器・染付の他に鋳型・砥石・墨書のある木片等が出土した。中でも鋳型は10数片出土し、雷文や獣文を配したものの一部がある。

小結 今回の調査では推定どおり六条大路の路面と北側溝を検出することができた。この六条大路と北側溝は、東接した地下鉄烏丸線に伴う調査でも検出されており、同様の堆積状況が報告されている。平安京の左京^{註1}では、小路が造営当初の位置に重複して検出される例が多く、今回の六条大路の発見もこの例となろう。(平尾政幸)

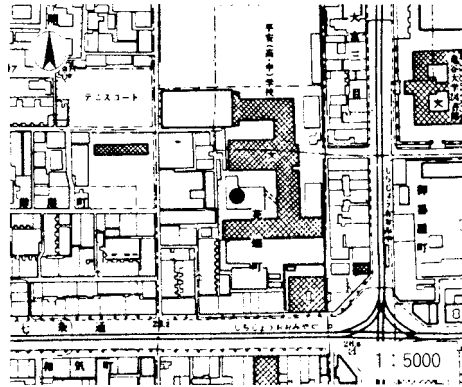
注1 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』1976年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会



全 景 (西から)

18 左京七条一坊

- 1 下京区北小路通大宮西入御器屋町 30
- 2 1981年6月29日～7月16日
- 3 260㎡
- 4 ND 74-1 K 43 81 HK-X C
- 5 学校法人平安学園校舎増築工事



経過 調査地は条坊復原図によると、東市跡に推定されているところである。これまで東市跡は、発掘調査による遺構・遺物は検出されておらず、不明な点が多い。

遺構・遺物 盛土層と近世耕土層を機械によって排除し、それより下を調査の対象とした。耕土層の直下は前面にわたって砂礫層が広がり、河川の流路と思われる堆積を示していた。その砂礫層を切り込んでいる遺構として、溝・井戸・土壇が認められた。

平安後期には、溝と井戸がある。溝は調査区の南部を東西方向に流れ、中央部でやや折れ曲がる。幅は約5m、深さ50cm程の規模である。井戸は、溝が埋まった後に掘られ、方形の掘形(1.4m×1.5m、深さ70cm)で木枠組みを持つ。底部に一辺15cm、長さ1mの角材を井桁に組み、幅10cm、厚さ0.5mの薄板を縦に並べて木枠としている。板材は北側と西側が内へ倒れ込んだ状態で発見された。

鎌倉時代の井戸、室町時代の溝・井戸・土壇は、いずれも残存状態が悪く、遺構の底部を検出したのみである。

遺物は、各遺構共に少量ずつ出土している。

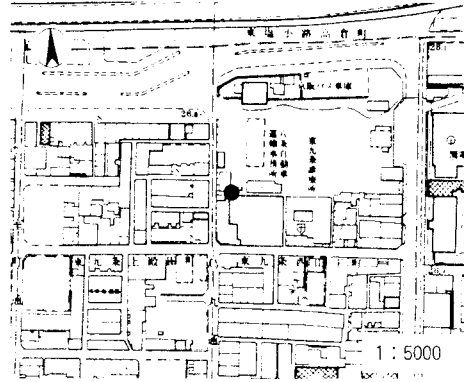
小結 今回の調査では、東市跡に直接関係する遺構は認められず、調査地周辺が中世以降に削平を受けたためと思われる。下層の流路からは遺物は出土せず時期は限定し難い。
(前田義明)



全 景 (北から)

19 左京九条三坊

- 1 南区東九条西山王町 31・32
- 2 1981年7月27日～8月24日
- 3 311.5㎡
- 4 ND 74-4 E 14・24 81 HK-E T 3
- 5 高速鉄道烏丸線建設工事



経過 八条竹田街道沿いの一角は、1979年夏以来再開発ビル建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物が出土したところである。今回の調査はこの敷地の西南隅で、地下鉄烏丸線の路線部分である。まず、四周の連続壁掘削の際に立会調査を実施し、この成果を基に敷地南半分を対象に約22日間かけて調査を行った。

遺構・遺物 調査地の層序は単純である。標高25.6m付近に地山をなす灰色砂礫層があり、この上に明治頃までの旧耕土・床土層がある。この上層は近・現代の盛土層であった。

灰色砂礫層上面で平安時代後期から室町時代前期までの井戸・土壇・柱穴を多数検出した。約130個検出した柱穴は、柱間・埋土等から建物4棟・柵3列以上に復元できた。SB1・2・4は梁間2間、SB3は梁間1間として復原した。SB2の北妻柱は検出できなかった。

調査区中央には東西方向に柱穴の密な箇所があり、これを3列の柵に復原した。SA5は3間あり、柱間は平均2.2m。SA6は5間以上で2.1mの柱間を有す。SA7は柱間0.9～1.1mで復原したが、SA5・6の例を参考にすれば2時期にわたることも考えられる。なお、この柵列は平安京条坊復



全 景 (北から)

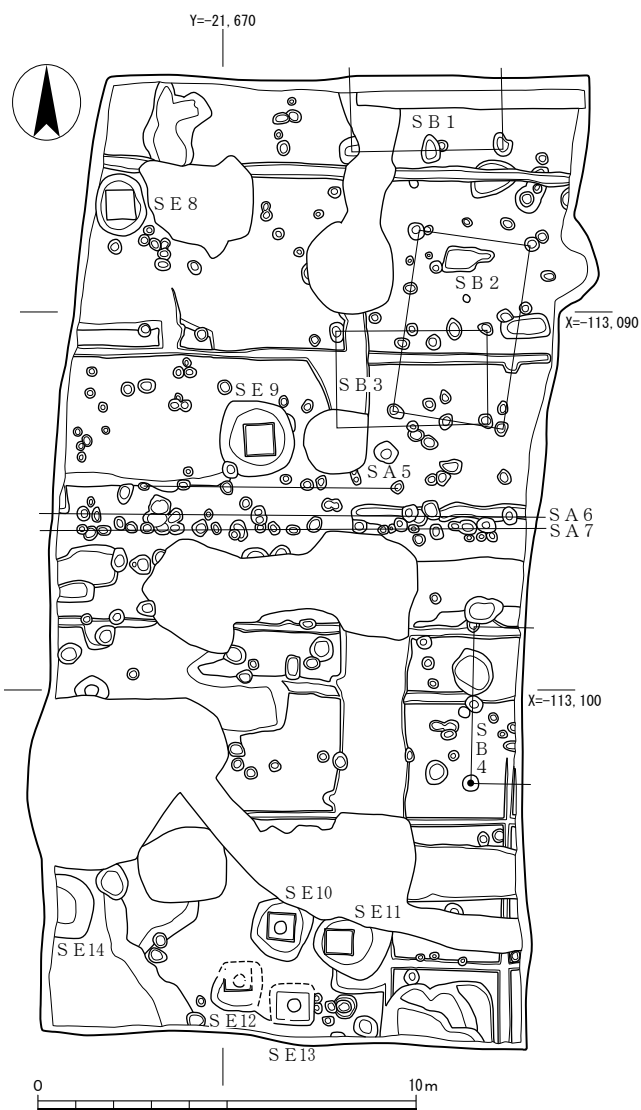
原による左京九条三坊十六町の南北を4等分する南一列目に該当している。

井戸は7基検出した。径1.5～2mの不整円形の掘形中央に方形の木枠組みを持つもので、再開発ビル建設に伴う発掘調査で出土したものと大差ない。底部の標高は平均24.1mを測る。SE13のみは円形の掘方に桶を用いていた。いずれの井戸も木枠の残りは良好でなく、出土遺物もSE11以外はみるべきものはない。

遺物は整理箱19箱分出土した。土師器(皿・甕・羽釜)、須恵器、陶器(壺・甕・鉢)、輸入陶磁器(青磁・白磁の碗・皿)、瓦等があり、他に少量の緑・灰釉陶器(碗・皿)、石釜、鉄釘、刀子、銭貨、鋳型がある。时期的には平安時代後期から室町時代前期のものが多い。

小結 今回の調査では敷地の中央部でみられたような遺物包含層がほとんどみられず、かわって灰色砂礫層上面で多数の柱穴を検出するという成果を取めた。これは砂礫層の堆積レベルが中央部に比べやや高いことが原因である。なお、調査地に北接して「八条院御所」が位置していたとされる。この御所は平安時代後期の史料に散見されるが、今回検出した遺構・遺物にはこの時期のものが多くあり、両者の関連性は今後の検討課題となろう。

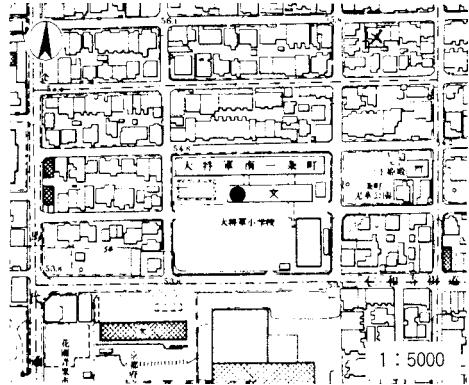
(丸川義広)



遺構配置図 (1:200)

20 右京北辺三坊(8)

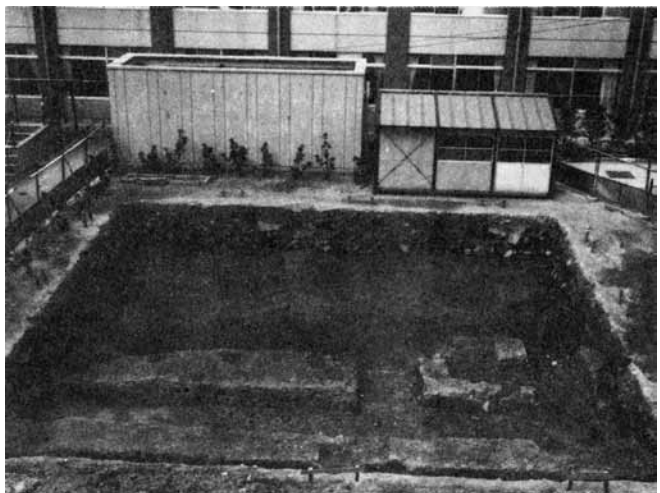
- 1 北区大將軍一条町 37-4
- 2 1981年9月5日～9月24日
- 3 160㎡
- 4 ND 63-2 G 15 81 HK-T S 3
- 5 市立大將軍小学校校給食室改築工事



経過 大將軍小学校校内では、校舎の新築工事に伴い1978年および79年の二度にわたり調査がなされている。これらの調査によって、室町時代の建物、平安時代の井戸・溝・湿地状遺構、弥生時代の溝等を検出している。このため今回も、工事に先立って発掘調査を実施する運びとなった。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、上から積土層・暗灰色砂礫層・灰白色粘土層（地山）と続いている。遺構は江戸時代および平安時代の遺構を灰白色粘土層の上面に検出した。江戸時代の遺構は、径1m、深さ50cmで円形を呈する土壇を1基検出した。この土壇からは土師器皿が多量に出土している。平安時代の遺構は河川状のものを検出した。これは、ほぼ東西方向に走るもので、調査区の中央付近で南側の肩を検出した。北側の肩は調査区の外と考えられ、今回の調査では確認できなかった。この遺構からは、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦等が出土している。また、弥生時代後期の壺・甕等の破片も少量であるが出土している。

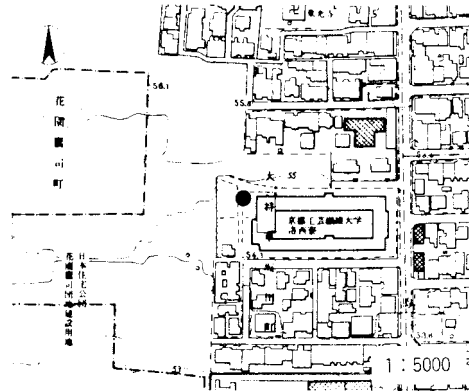
小結 今回の調査では当初の予想どおり、平安時代の河川状の遺構を検出した。しかしながら、この遺構は一部を検出したのみで、規模・性格等も不明な点が多く、今後の課題として残った。また、調査区周辺では遺構が比較的浅く検出される可能性が高いため、今後とも注意が必要である。（吉崎 伸）



全 景 (南から)

21 右京北辺三坊（2）

- 1 北区大將軍坂田町 22
- 2 1981年11月2日～12月14日
- 3 318㎡
- 4 ND 63-2 G 13 81 HK-I E
- 5 京都工芸繊維大学学生寄宿舎新営工事



経過 今回の調査地は平安京右京北辺三坊に該当する。周辺ではこれまでに京都工芸繊維大学跡地、府立山城高等学校等の発掘調査、および花園幹線の立会調査などが実施されており、いずれも遺構の遺存状態は良好であることが判明している。ことに京都工芸繊維大学跡地では条坊に関する溝および建物群が、府立山城高等学校では寝殿造の遺構等が発見されている。調査はまず2ヶ所の試掘坑を設定し、基本層序を確認した。その結果、表土下70cmまでは近代以後の堆積層と判明した。よってこれまでを重機掘削し、以後調査にかかった。調査の結果、多数の溝・建物・土塋・ピット群を発見したが、大多数の遺構については全く遺物が包含されず、自然流路や植生等の痕跡と考えられ、遺物を包含するものについては、溝1条・建物1棟・土塋3基にとどまった。

遺構・遺物 当調査地の基本層序としては、表土下約30～40cmまでは現代積土層、積土層下は耕土層が厚さ約10～20cm堆積し、耕土層下は黄灰色砂泥・黄灰色砂礫層などが堆積する。黄灰色砂泥層以下は遺物を包含しない。なお遺構は黄灰色砂泥層の上面で検出したが、調査区東端ではSD4を覆う状態で褐色砂泥層が堆積する。SB1の一部などはこの褐色砂泥層上面で検出した。以下発見した各遺構について述べることとする。

SD1 調査区西端で検出した南北方向の溝である。断面V字形を呈し、幅約90cm、検出面からの深さ約40cmを測る。埋土は5層あり、土師器・須恵器・瓦などを包含する。

SB1 調査区中央東北寄りに位置する東西棟の堀立柱建物である。柱穴は径30～40cm、検出面からの深さ約20cmを測る。東西3間（約5.8m）、南北2間（約4m）の建物に、西に半間、南に1間分の増築を行う。増築部分の柱穴には径10～30cmの根石を据える。

土塋はSB1の南に位置する。SK1・2は比較的掘り込みが浅く、建物も少ないが、SK3は、長さ約3.5m、幅約60cmの東西に長い土塋である。検出面からの深さ約35cmで埋土は2層あり、上層からは土師器が多く出土している。下層からは鉄釘が出土

した。

次に遺物を包含しない遺構の説明を行う。

SD 2 調査区西部に位置する南北方向の流路である。肩口からの深さ約 30cm を測る。

SD 3 調査区東北隅から南西に向って流れる流路である。肩口からの深さ約 10cm。

SD 4 調査区東端に位置する南北方向の流路である。肩口からの深さ約 1.7 m を測る。

SK 4 SD 4 の上面で検出した南北に長い楕円形を呈する土壌である。肩口からの深さ約 30cm を測る。底部および南肩は非常によく焼け、赤褐色を呈する。

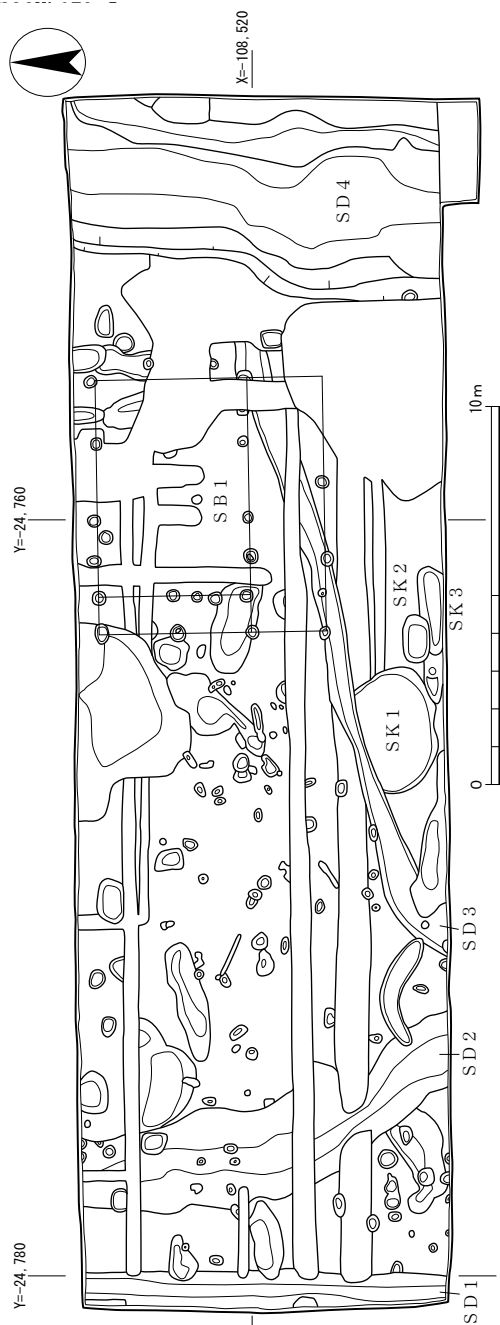
ピット群 総数約 150 個検出した。形状・規模等は一定ではない。埋土から大きく 2 種類に大別できる。樹木等の痕跡であろうか。

小結 今回発見した各遺構の中で、SD 1・SB 1 についてその概略を述べる。

SD 1 は、平安京条坊復原から、恵止利小路東側溝の位置にほぼ該当する。また溝の埋土中より平安時代後期の遺物が出土し、この時期に溝が廃絶したものと考えられる。

SB 1 は室町時代中頃の建物であるが、「洛中洛外図」の中に当該地周辺の状況を描いたものがあり、それによると、この付近は農村地帯となっている。この中にみられる農家の構造は 2 間×3 間を基本としているので、今回検出した SB 1 の構造とよく一致して興味深い。また増築に関しては、その拡張度は基本建物に対して約 85% に達すること、柱据え付け方法の差異、窓と思われる部分の配置替え等が判明した。

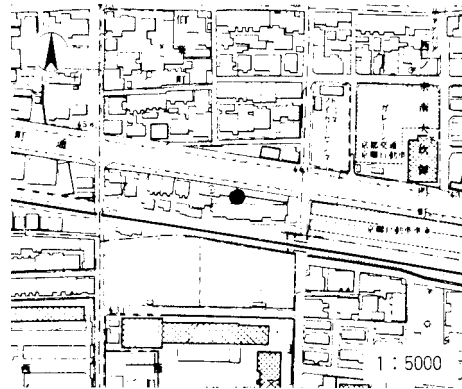
(辻 裕司)



遺構配置図 (1:200)

22 右京一条三坊 図版4-1

- 1 中京区西ノ京伯楽町 22-4
- 2 1981年6月12日～7月10日
- 3 470㎡
- 4 ND 63-2 K 25 81 HK-I D
- 5 井上ビル新築工事



経過 今回の調査地の周辺では平安時代の遺構が比較的良好な状態で検出される例が多い。1978年に調査地と道路を隔てた東側で、関西電力京都支社建設工事に伴う発掘調査が

実施され、平安時代の井戸・溝・柱穴等が検出されている。このため、今回は平安時代の遺構の調査に重点を置くこととした。まず、遺構の有無を確認するために調査対象地に3ヶ所のトレンチを設け、試掘調査を実施した。この結果、2ヶ所で平安時代および鎌倉時代の柱穴・土塋、1ヶ所で溝状の遺構を確認し、発掘調査を実施する運びとなった。

弥生時代	溝
平安時代	掘立柱建物・柵列・土塋・溝
鎌倉時代	掘立柱建物・柵列・土塋・溝
室町時代	溝

遺構・遺物 遺構および遺物については現在整理中であるので、比較的まとまりのある平安時代のものについての概略を述べるに留めておく。調査区の基本層序は、上から積土層・耕土Ⅰ層・耕土Ⅱ層・床土層・黄灰色粘土層（地山）と続いている。平安時代の遺構は、掘立柱建物2棟・柵列2列・土塋1基・溝2条であり、これらは全て黄灰色粘土層の上面で検出した。遺構はいずれも比較的浅く、上方を削平されているものも考えられる。

S B 1 調査区の北西隅で検出した掘立柱建物で、東西2間、南北1間を検出したに留まり、全体の規模は不明である。柱間寸法は2.7 mである。柱掘形は1辺1.1 m、深さ15cmの方形である。

S B 2 調査区の北部で検出した東西2間、南北1間以上の掘立柱建物である。柱間寸法は2.4 mである。柱掘形は1辺90cm、深さ10cmの方形である。

S A 1 S B 2の南で、S B 1の南柱筋にそろって検出した東西7間の掘立柱柵列である。柱掘形は径約60cm、深さ15cmの不整形円形である。

S A 2 S A 1の北側に並行して検出した東西7間の掘立柱柵列である。柱掘形は径約50cm、深さ15cmの不整形円形である。検出した位置、柱掘形の規模からみてS A 1を付

け変えたものと考えられる。

SK 1 調査区の西部で検出した。1辺1.1m、深さ25cmの方形の土壇である。この土壇からは、平安時代中期の土師器・須恵器の他、鉄製鋤先・鉄製品・延喜通寶、直径5cm前後の鶏卵状を呈する礫が出土している。特に延喜通寶は数10枚が出土している。祭祀的な性格を持つ遺構であると考えられる。



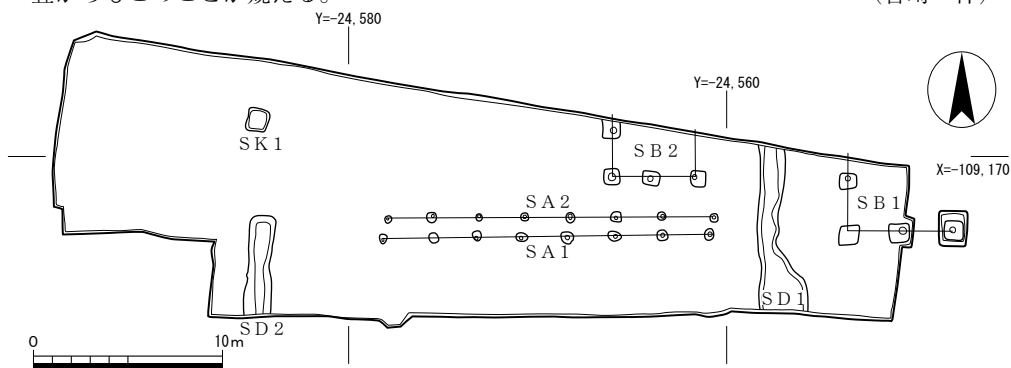
SK 1 遺構出土状況（北東から）

SD 1 SB 1とSB 2の間に検出した南北溝である。検出した位置からみて、二つの建物を区画する溝であると考えられる。幅は一定でなく北部で1.3m、南部で広がり2mである。深さは10～20cmと比較的浅い。この溝からは平安時代中期の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・白磁・青磁等が出土している。

SD 2 調査区の西部で検出した南北溝である。幅1.3m、深さ30cmで調査地の西中央付近から掘り込まれ調査区外へ延びる。この溝からも平安時代中期の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器等が出土している。

小結 今回の調査によって、当地には平安時代中期に、規格性を持ったかなり大規模な建物の造営がなされ、その後平安時代後期から鎌倉時代にかけては小規模な建物が数次にわたって造営されたことが判明した。しかしながら、室町時代には建物は全く建築されておらず、かわって暗渠状の溝を数条検出していることから、水田として利用されていたものと考えられる。一般に平安京の右京は早くから衰退していたと言われており、今回の調査からもこのことが窺える。

（吉崎 伸）



遺構配置図 (1:400)

23 右京二条二坊(1) ㊦

- 1 中京区西ノ京南両町 88
- 2 1981年11月3日～11月17日
- 3 240㎡
- 4 ND 64-1 I 51・52 81 HK-I A 2
- 5 (株)富永製作所本社社屋新築工事



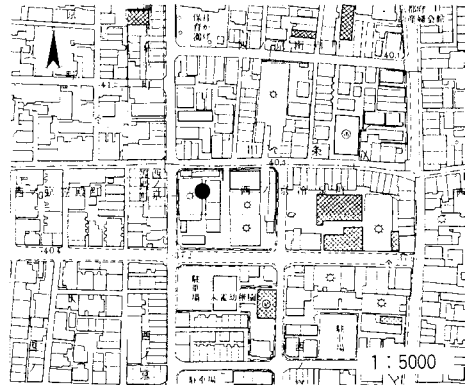
経過 当該地に富永製作所が社屋改築工事を計画し、京都市埋蔵文化財調査センターと協議した。その結果まず試掘調査を行い、遺構が残存していれば発掘調査を実施するということとなった。試掘調査で柵列を検出したことで発掘調査を実施する運びとなった。調査区の基本層序は積土層・耕土層・暗茶褐色砂泥層・地山であるが、暗茶褐色砂泥層は調査区南東隅の一部にのみ残存していた。この暗茶褐色砂泥層より平安時代後期の土師器皿が少量出土した。なお、調査区の7割が中世～現代の土採取穴および攪乱で破壊されていた。

遺構・遺物 遺構は全て地山面で検出し、主な遺構に平安時代中期の柵1列、同後期の井戸1基がある。その他に柱穴と考えられるピットなどがある。柵は調査区の東南隅付近で検出した。東西方向(E-7°-N)に延びる柵で、ピットは調査区で7ヶ所検出したが、西端のピットで柵は途切れる。なお、調査区より東へ更に延長していると考えられるが未調査である。井戸は調査区の中央、北側で検出した。木枠組みの井戸で、井戸の掘形の平面形は方形を呈し、検出面から深さ1.3mある。ただし、掘形の上部は土採取穴、攪乱により削平されていた。井戸枠は最下部で横木を井籠状に組み、内法は、一辺70～76cmある。側板は残存状態の良い南辺で4枚、西辺で3枚からなる。遺物は暗茶褐色砂泥層・井戸・土採取穴などから土器・瓦類が遺物整理箱で14箱出土した。なお、井戸からは平安時代後期の比較的良好な資料がまとまって出土した。土器には平安時代中期～後期の土師器皿・甕・羽釜・須恵器甕・鉢・緑釉椀・灰釉椀・瓦器椀・白磁椀などがある。瓦には複弁八葉蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦があり、平瓦の凸面に『西寺』を刻印したものもある。

小結 今回の調査で検出した柵は何らかの建物(宅地)に付属する施設と考えられるが、柵の主軸線は真東西より7°東で北に振れている。また出土した遺物より、その時期は10世紀後半頃と考えられることから、平安京造営時からの時間的推移に伴う、京内における宅地の変遷を考える上で興味深い。(平方幸雄)

24 右京二条二坊(2) ④ 図版 17

- 1 中京区西ノ京冷泉町 1
- 2 1981年4月28日～5月28日
- 3 200㎡
- 4 ND 64-1 I 51 81 HK-I A
- 5 (株)富永製作所本社工場増築工事



経過 調査地は大炊御門大路および兵部町に該当する。調査面積は200㎡であるが、低湿地状遺構の広がり等を確認するため、調査区南西隅に約12㎡の試掘トレンチを設定した。

遺構・遺物 基本層序は上から現代積土層が厚さ約30cm、耕土層が30～40cm、茶褐色砂泥層が厚さ約10cm、暗茶褐色砂泥層が厚さ約10cm、黄灰色粗砂および砂礫層が厚さ約10～20cm、灰色泥土層が厚さ約10～15cm堆積する。灰色泥土層下は東半では地山の砂礫層となり西半は低湿地状遺構となる。なお地山の砂礫層下で火山灰(AT)を確認した。発見した遺構は平安時代の低湿地(SX1)・井戸(SE1)・溝・土壇・柱穴群、鎌倉時代以後の建物・井戸・溝・土壇などである。以下SX1・SE1・SD1の概略を述べる。

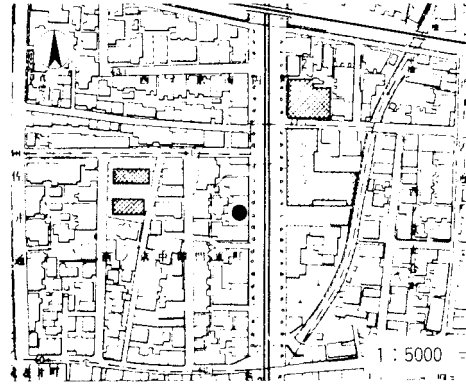
SX1は調査区の西半を占める低湿地状遺構である。西・北は調査区外へ広がる。検出面からの深さ約60cmを測る。埋土は大きく2層に大別でき下層から多量の遺物が出土した。SE1は調査区の南東部に位置する井戸である。掘形は1辺約1.6mの方形で、検出面からの深さ約1.1mを測る。掘形の中央に方形の木枠を組み、木枠中央には曲物を据える。SD1は試掘トレンチ北端で検出した東西方向に走る溝で幅は2m以上、検出面からの深さ約40cmを測る。推定大炊御門大路南側溝と思われる。溝南では柱穴群を検出した。

出土した遺物は整理箱で78箱を数える。内容は、平安時代の土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器・白磁・青磁・瓦・木器・銭貨・金属製品・植物種実などがあり、鎌倉時代以後では上記の他瓦器などがある。いずれの時期も瓦が多くを占める。

小結 今回の調査ではSX1・SE1・SD1などから平安時代中期の遺物を多量に発見することができた。中でもSX1からは『天曆七』の墨書を有する緑釉陶器が出土しているが、SX1からは多量の遺物と共に同類の緑釉陶器が出土し、このことからSX1の土器群には10世紀中頃の年代を与えることができ、従来の土器編年観に実年代の1点を付加し補強した土器群として極めて重要な発見と言えよう。(辻 裕司)

25 右京二条二坊(3) ㊦

- 1 中京区西ノ京中御門東町 93
- 2 1981年5月14日～5月26日
- 3 100㎡
- 4 ND 63-2 L 43 81 HK-I B
- 5 第3コーポ中川新築工事



経過 調査地は左京二条二坊十町に当る。試掘調査によって遺構が確認されたので発掘調査を実施することになった。調査区は南北20m、東西5mの100㎡であった。

遺構・遺物 近・現代盛土層は石炭ガラを含み、厚さ約2mを有する。この下に3時代の旧耕土・床土層がある。地山は黄褐色泥土層で遺構は全てこの上面で検出した。

溝7条・井戸3基・建物1棟と土壌、多数の柱穴を検出した。溝は東西溝が3条、南北溝が4条である。井戸は素掘りのもの2基、石組みのもの1基がある。建物は東西1間、南北2間分を検出した。柱間は1.6～1.9mで、中に根石を持つものもある。

出土遺物は平安時代前期から室町時代のものが17箱分ある。内容は、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉・灰釉・陶器・輸入陶磁器・瓦等である。井戸から各々平安時代前期と後期の遺物が一括で出土した。溝からは室町時代のものが豊富に出土した。

小結 今回の調査では調査区が狭小なこともあって、検出遺構の性格は十分に把握することができなかった。しかし、平安時代の遺構は残存状態が良好で、今後の調査に期待が持てる。また鎌倉時代の遺構の存在は周辺にあまり例がなく、右京域の中世の様相を知るものとして貴重な例といえる。

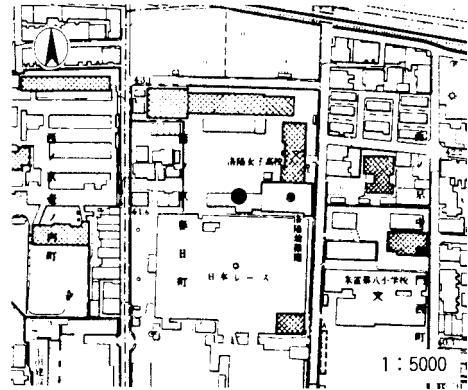


(辻 純一)

全景 (北から)

26 右京二条三坊 図版4-2

- 1 中京区西ノ京春日町8
- 2 1981年6月1日～7月6日
- 3 365㎡
- 4 ND 63-2K 45 81HK-IC
- 5 洛陽女子学院第3校舎新築工事



経過 当該地周辺はこれまでに、立会調査・発掘調査が行われ、平安時代中期を中心とした遺構・遺物が発見され、遺存状態は良好であることが知られる地である。

発掘調査に先立ち既存建物の基礎撤去時に立会調査を実施し、平安時代の遺構・遺物を発見し、併せて基本層序の確認を行った。この立会調査の成果を基に発掘調査を実施し調査を進めた。調査の結果、平安時代から鎌倉時代にかけての建物・井戸・溝・柵列等を発見し、溝からは多量の遺物が出土するなど、大きな成果を挙げることができた。

遺構・遺物 表土およびグラント整地層が厚さ約30cm、耕土層が厚さ約20cm、それぞれ堆積する。耕土層下は茶灰色砂泥層および砂礫層となる。遺構は茶灰色砂泥層の上面で検出した。

S B 1 2間×3間の東西棟である。掘形は隅丸方形を呈し検出面からの深さ約15cmを測る。柱間は、梁行約2.7m、桁行約2.4mを測る。S B 2およびS D 1に切られる。

S B 2 四面廂と思われる南北棟の建物である。北は調査区外へ拡がる。掘形は隅丸方形を呈し検出面からの深さは約20cm程である。梁行4間、桁行3間分を検出した。身舎部分の柱間は、梁行約2.3m、桁行約2.8m、身舎と廂間は約2.8mを測る。

S B 3 S E 1を囲む状態で検出した。柱間は東西約2.3m、南北3.2mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し検出面からの深さは約3cmである。

S B 4 南北棟で1間×2間分を検出した。柱穴の形状は一定ではない。検出面からの深さ約10cmを測る。柱間は東西2.7m、南北は2.1mと2.4mである。

S B 5 2間×3間の南北棟である。柱穴は径約30～40cmの円形を呈し検出面からの深さ約10cmを測る。柱間は梁行2.1m、桁行約3mを測る。間仕切り等がみられる。

S B 6 東西2間、南北2間の建物と思われる。柱穴は径約30～50cmの円形を呈し検出面からの深さ約15cmを測る。柱間は東西1間2.5m、南北が1間1.5mである。

S E 1 掘形は径約2.8m、掘形中央北寄りに円形の木枠を構築する。木枠は現存長約

90cm, 幅約9～15cm, 厚さ約5～8cmの縦材21枚を使用し, 縦材の両木端に柄穴を穿ち, 横木を差し込み円形に組み立てる。遺物は整理箱で3箱程出土している。

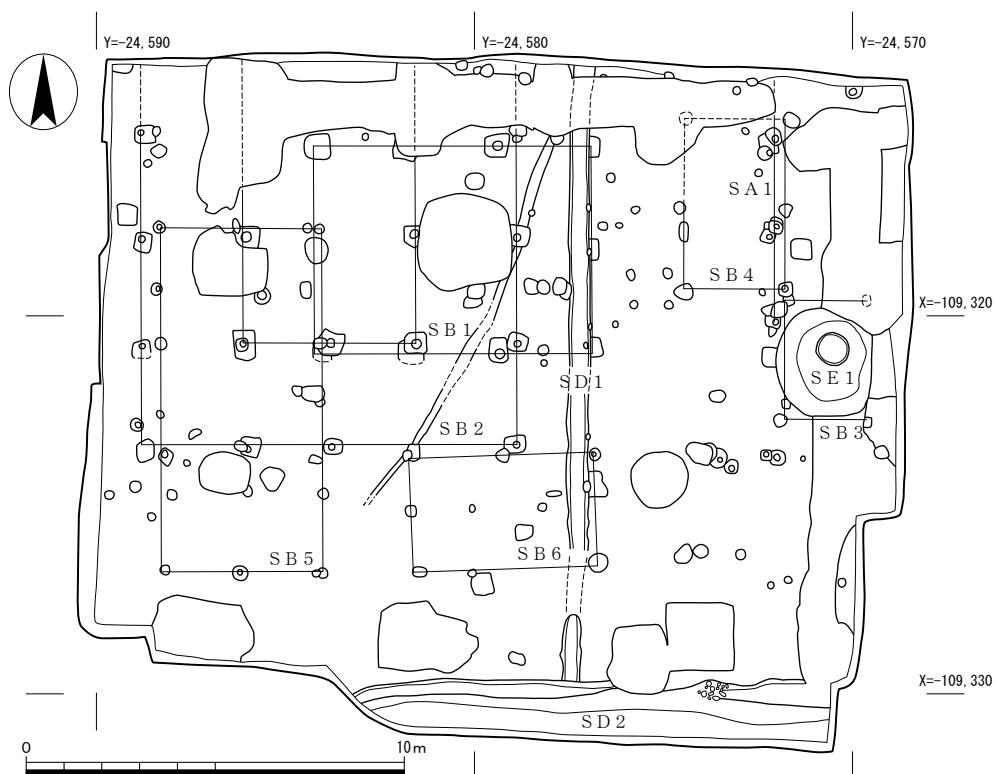
SA1 南北方向の柵で, 2間分検出した。1間約2.2mで3時期の切り合いを示す。

SD1 SB1の東に位置する南北方向の溝である。幅70cm, 検出面からの深さ約25cmを測る。SD2に切られる。遺物は土師器を主体として整理箱で6箱程出土している。

SD2 調査区南端に位置する東西方向の溝である。南肩は調査区外へ拡がり検出面からの深さ約40cmを測る。春日小路北側溝に該当し平安時代末～鎌倉時代の遺物を包含する。

遺物は全体で26箱出土した。平安時代中期のものが主体であり, 土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・銭貨・石製品・墨書土器・瓦などがある。

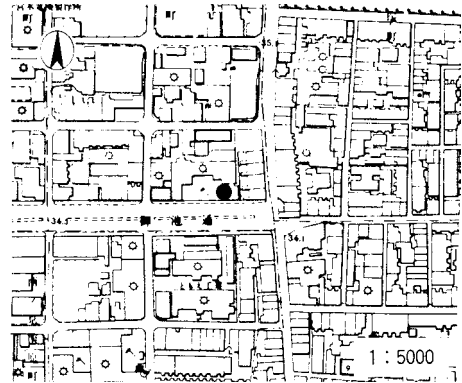
小結 今回の調査では, 断続的にはあるが, 平安時代から鎌倉時代にかけて宅地として利用されたことが判明し, とりわけ平安時代中期には活発な利用状況がみられた。大規模な四面廂建物や特徴的な構造を有する井戸等が構築され, また豊富な遺物も共伴したことは今回の調査における貴重な成果と言えよう。 (辻 裕司)



遺構配置図 (1:200)

27 右京三条二坊(1) ㊦

- 1 中京区西ノ京銅陀町 76
- 2 1981年10月21日～11月20日
- 3 360㎡
- 4 ND 64-3 E 12 81 HK-R B
- 5 (株)山田鉄工所工場建設



経過 調査地は右京三条二坊二町に推定され、敷地の東端に西大宮大路西側溝が遺存する可能性が考慮された。試掘調査を行った結果、平安時代の遺物包含層、柱穴などを確認したので発掘調査を実施することとなった。調査トレンチは、東西30m、南北12mである。旧耕土層直下に平安時代の遺構面を検出し、建物・井戸・溝等を検出した。

遺構・遺物 調査区のかなりの部分が近世の土取り穴と思われる土壌で破壊されていたが、遺構面が残存していた部分で、平安時代の掘立柱建物3棟・井戸1基・溝2条・柵と思われる柱穴1列・土壌1基を検出した。

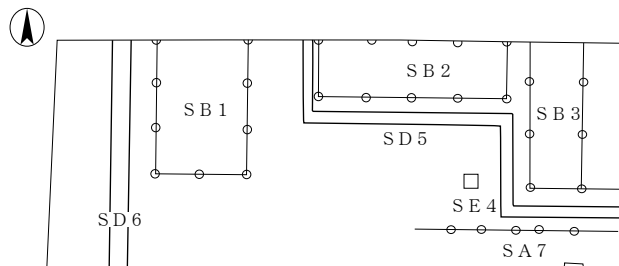
SB1 東西2間、南北3間以上の南北棟。柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間、柱穴は一辺50～60cmを測る。

SB2 SB1の東側に位置する東西棟。東西は4間、南廂と思われる部分を検出。廂桁行3m、梁行2.5mを測る。柱穴は一辺55cm前後である。

SB3 SB2の更に東側に位置する南北棟。この建物も西廂らしき部分のみを検出した。身舎の規模は不明。廂の桁行、梁行は共に2.7mを測る。柱穴は一辺55cm前後。

SE4 一辺3.5m前後の方形の掘形中央に、一辺75cmの方形の井戸枠を持つ。縦板は幅20～25cmで約2m以上残存していた。底部中央に径約60cm、深さ45cmの曲物を据えていた。

SD5 SB2の西側を南行し、西南隅で東行し、SB3とSE4の間を南行し、更に東行する溝である。



遺構配置模式図 (1:400)

幅 50～60cm, 深さ 25cm を測る。

SD6 SB1の西側に南北に走る溝である。幅 1.1 m 前後, 深さ 20～25cm を測る。SB1 西側柱心から溝心までの距離は約 2 m である。

SA7 SB3の南を東行するSD5の更に南約 1 m で検出した東西方向の柵列。大きさの異なる柱列がほぼ一列に並び切り合うので, 数期の作り替えが想定できる。

出土遺物は整理箱に 44 箱あり, 大半が瓦と土器類である。10 世紀に属するSE4, SD5の出土土器については破片総数を数え各器種毎に比率を算出したので記しておく。SE4の破片総数は 1565 片で, うち土師器 59.8%・緑釉 15.4%・黒色土器 7.9%・須恵器 7.6%・灰釉 7.1%・磁器 2.0%となっていた。SD5の破片総数は 1904 片で土師器 75.4%・緑釉 8.4%・黒色土器 6.5%・灰釉 5.6%・須恵器 3.9%・磁器 0.2%となっていた。

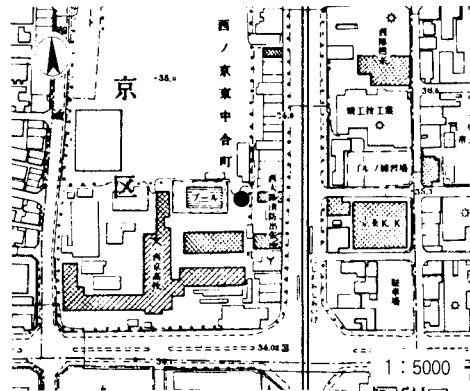
小結 検出した遺構群は配置や出土遺物からみてほぼ同時期のものと考えられる。SD5の方向の変化もこれら遺構群の位置を考慮した結果であろう。次にSD6とSA7はそれぞれ三条二坊二町の東, 南限推定地から約 30 m (10 丈) の位置にあり, これを一町内の区分と考えると, SD6は, 東一, 二行の, SA7は北二, 三門の境界に該当する。しかし建物の規模を考慮すると北へは 2 門以上の拡がりが必要で, 調査地の宅地は少なくとも一行二門(二戸主)を想定することができるが, 平安京内における宅地割りのわかる調査例はまだ少なく, 今は断定を避け今後の資料の増加を待ちたい。(平尾政幸)



全 景 (東から)

28 右京三条二坊(2) 図版5-1

- 1 中京区西ノ京東中合町1
- 2 1981年7月3日～7月31日
- 3 550㎡
- 4 ND 63-4D 53 81HK-RA
- 5 市立西京商業高等学校格技場建設



経過 市立西京商業高等学校内で格技体育館を新築することになった。当地は平安京右京三条二坊に当り、野寺小路、押小路の交差点に推定された。また、付近の調査例からも遺構の残存状態は良好と予想された。試掘調査で遺構の有無を確認することより行い、その存在が明らかとなったので、7月3日より発掘調査を実施した。調査トレンチは東西11m、南北50mで、調査面積は550㎡を有す。川状遺構・押小路・建物・井戸等を検出し、7月31日に調査を終了した。

遺構・遺物 検出した主要遺構は、野寺小路の西側溝の位置に当る川状遺構(SD1)・押小路北側溝(SD2)・南側溝(SD3)・井戸(SE1)・建物(SB1)がある。SD1は全体を検出していないので規模は明らかでないが、現状では幅5m以上、深さ検出面より1m以上を測る。埋土は砂礫層を主とし、出土遺物は摩滅したものが多い。SD2は幅1～1.2mを測る。深さは検出面より20～30cmで、両肩はかなり崩れ、このため溝幅がやや広がっている。SD3は幅約75cm、深さ45cmを測る。SD2同様北肩が大きく崩れ、溝幅が広がっている。SB1は調査区西南隅で検出した掘立柱建物で、南北3間、東西2間分を検出した。柱間は南北2.4m、東西2.1mを測る。SE1は東西2.6m、南北2.8mの不整円形の掘形に、一辺1mの方形の木枠を持つ井戸である。深さは検出面より1mを測る。

出土した遺物の大半は、平安時代前期から後期のもので、その多くは川状遺構SD1から出土した。整理箱に24箱を数える。SD1より出土した遺物の内容は、土師器・須恵器・緑釉・灰釉・軒平瓦・平瓦・青磁・白磁などである。時期的には平安時代中期から後期のものである。押小路の両側溝であるSD2・SD3からは、平安時代前期から後期にかけての土師器・須恵器・緑釉・灰釉・青磁・白磁・瓦器・瓦等が出土した。井戸SE1からは、

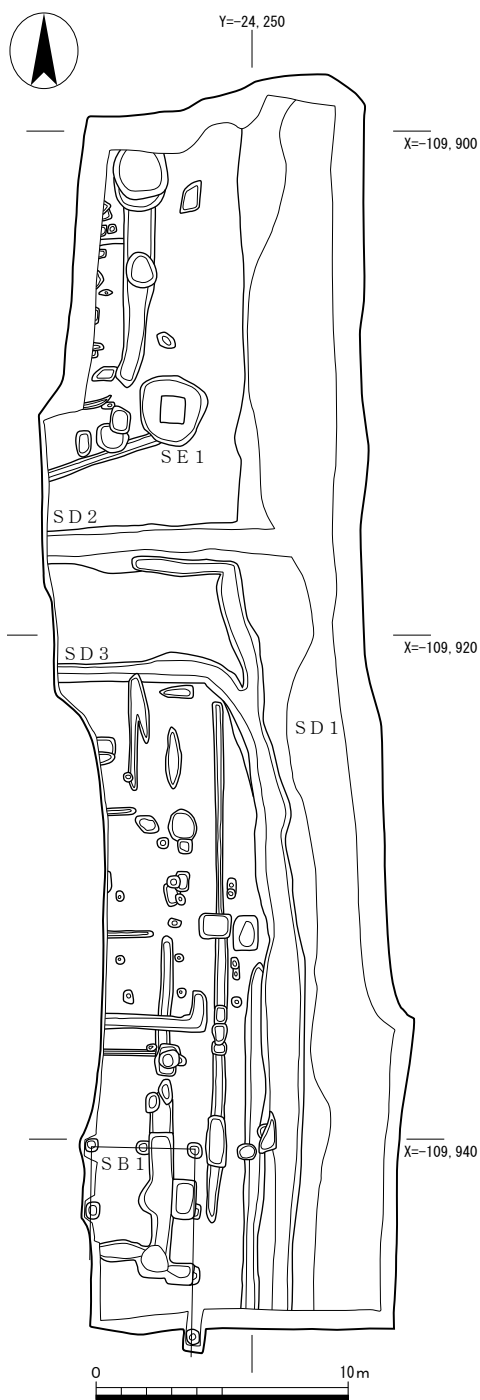
平安時代中期の土師器・須恵器・緑釉等が出土した。建物S B 1の柱穴からは、平安時代前期から中期にかけてのものが出土したが、量的には乏しい。

小結 当地は平安京右京三条二坊に相当し、調査区の東端には野寺小路の西側溝が、南北の中央には押小路の存在が予想された。調査の結果、野寺小路の西側溝に推定される位置には、幅5 m以上を有する南北方向の川状遺構が検出され、また、調査区の中央でも押小路に相当する道路を検出することができた。

押小路の規模は、路面幅が4.2 m、北側溝が幅1～1.2 m、南側溝が幅70～80cmを測り、側溝心々間の距離は約5.1 mであった。両側溝のうち南側溝の方が深いが、これは地形による水利対策の結果であろう。両側溝とも出土遺物から平安後期までの存在が知られるが、付近の調査例からはこの時期にまで存続する遺跡が少なく貴重な例といえる。

次に川状遺構は野寺小路の推定位置に当る。西堀川小路(野寺小路の1本東の小路)にも西堀川が存在したことは自明のことになっているが、平安時代中期から後期にかけて、二本の排水施設が必要であったかは問題を残すところである。あるいは、西堀川廃絶後、川の流れが野寺小路に移ったことも考えられ、今後の検討課題としておきたい。

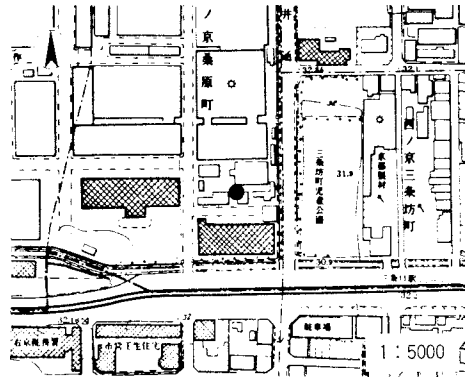
(辻 純一)



遺構配置図 (1:300)

29 右京三条三坊 図版6

- 1 中京区西ノ京桑原町1
- 2 1981年8月6日～10月5日
- 3 732㎡
- 4 ND 63-4 H 31 81 HK-C F 3
- 5 (株)島津製作所E2号館新築工事



経過 建設予定地東端付近に道祖大路西側溝が推定されたため、これを含んで東西44m、南北18mのトレンチを設定した。旧耕土と思われる茶褐色砂泥層上面で小規模な溝を検出した。溝は東西、南北方向のものを合わせて48条あり、いずれも幅20cm、深さ10cm前後のものである。この面では他に18基の土壙を検出している。この面から約30～35cm下に平安時代の遺構面を検出し、溝・建物・土壙等を検出した。

遺構・遺物 検出した遺構は、平安時代のもとの室町時代以降のものに大別できる。室町時代以降の遺構には、溝・土壙がある。溝は耕作用の暗渠と考えられるもので、調査区全域にわたり検出された。土壙は調査区の東半に集中して分布しており、いずれも遺物は非常に少ない。これらの土壙も暗渠同様耕作地に関連するものかも知れない。

平安時代の遺構は、溝(S D 101・102・103)、土壙(S K 106・131)、建物(S B 132)、その他性格不明の柱穴(S X 133・134)等がある。検出した溝のうち南北溝S D 101は、杭・矢板で両岸を護岸し、他の2条の溝S D 102・103はこのS D 101に取り付いたものである。S D 101の中央には護岸に直接関係ない杭列を検出している。これらはS D 102・103の取り付け部の間にだけあり、この間を板等で塞いで暗渠にする際の支柱と思われる。これら3条の溝は、整地層との関係から各々2時期以上認められるが、いずれも出土遺物からみて9世紀代におさまるものである。この時期の遺構としては、他にS K 106・S X 133・134等がある。S K 106は浅い落ち込み状のもので、土師器を主とする多量の土器が出土している。S X 133・134はいずれも1対の柱穴からなるもので性格は不明である。溝が廃絶した後の遺構としてはS K 131・S B 132がある。S B 132は東西棟で、桁行3間(2.5m等間)、梁行2間(2.25m等間)、柱掘形は径40～50cm前後である。出土遺物は少なく時期は決定し難いが、整地層との関係から溝の廃絶後のものと判断できる。S K 131からは土器類の他に軒平瓦等が出土した。

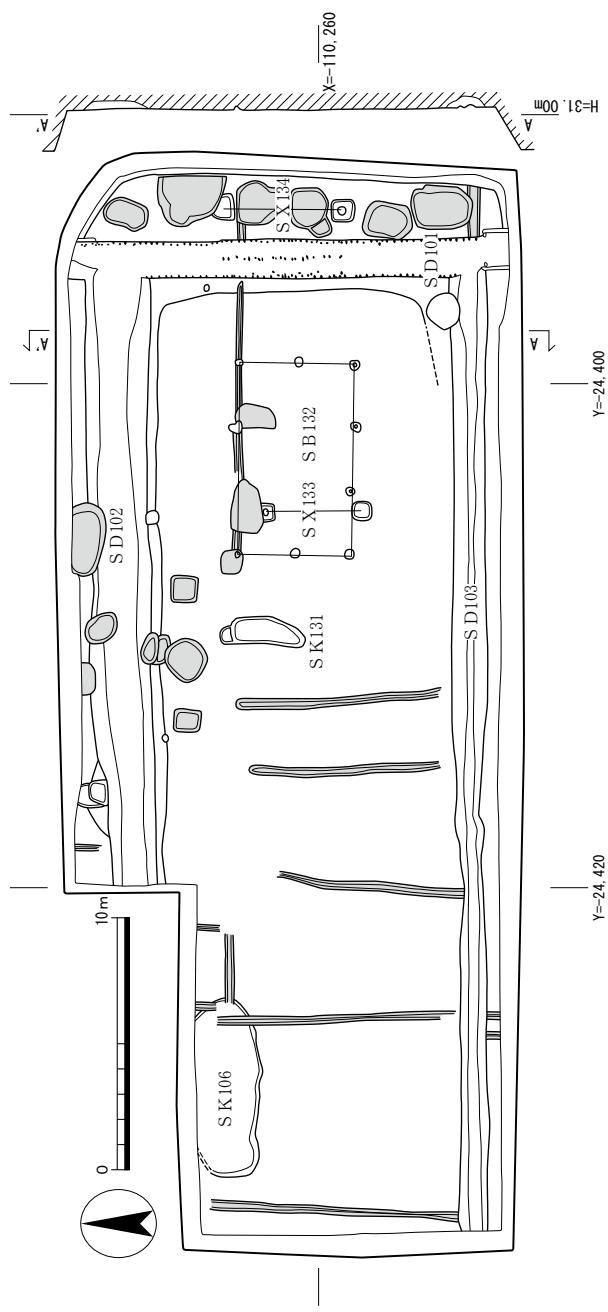
各遺構や地層からは、土器類や木器類、瓦類等多量の遺物が出土した。土器類には、土

師器・須恵器・黒色土器・緑釉・灰釉・輸入陶磁器等がある。S D 101・S K 106からはまとまった土器類が出土した。特にS K 106からは土器類を主とする9世紀前半代の一括遺物が出土している。木器類にはS D 101の護岸に使用されていた杭や矢板、柱根の他に、S D 101出土の木簡3点等がある。

小結 今回検出した溝S D 101は、当初道祖大路西側溝と考えていたものであるが、その後他の条坊関連遺構との比較で、その位置が西へ約12m(4丈)ずれることがわかった。一方S D 101の東側は堆積状況からみて道路状遺構と判断でき、この結果これが道祖大路の遺構であるのか、あるいは平城京跡に例のある坊内道路施設^{註1}に当るかは今後に残した。

またS D 102・103は宅地内あるいは宅地割りの施設と思われるが、周辺の状況が不明な現在結論は避けたい。平安京右京三条三坊内の発掘調査は今回で3次を数えるが、いずれも遺構が良好に残っており、今後の周辺部の調査に期待するところは大きい。

(平尾政幸・中村 敦)

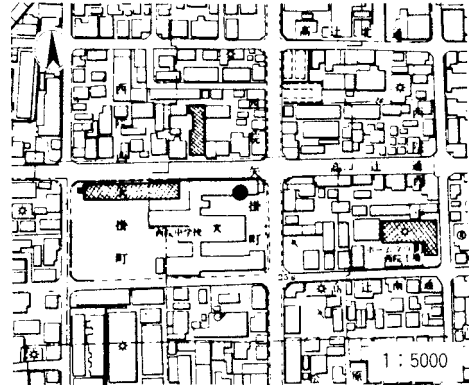


遺構実測図 (1:300)

註1『平城京左京八条三坊発掘調査概報、東市周辺東北地域の調査』奈良国立文化財研究所 1976年

30 右京五条三坊

- 1 右京区西院矢掛町5
- 2 1981年10月20日～11月20日
- 3 136㎡
- 4 ND73-2D31 81HK-QA
- 5 市立西院中学校校舎建設



経過 当該地付近は、従来当研究所が行ってきた発掘調査および立会調査などにより、遺跡の残存する可能性が高いことが認められているため、今回の発掘調査の実施となった。調査は東西約14.5m、南北約10mの長方形の調査区を設定し、重機による盛土層の排除から始めた。調査区内には旧校舎の深い基礎が残っており、かなりの面積がすでに破壊を受けていた。この基礎を取り除き、断面による堆積状況の観察を行った結果、3期にわたる遺構面を確認した。それぞれの面につき平面、断面などの実測、写真撮影を行い、約1ヶ月の調査を終了した。

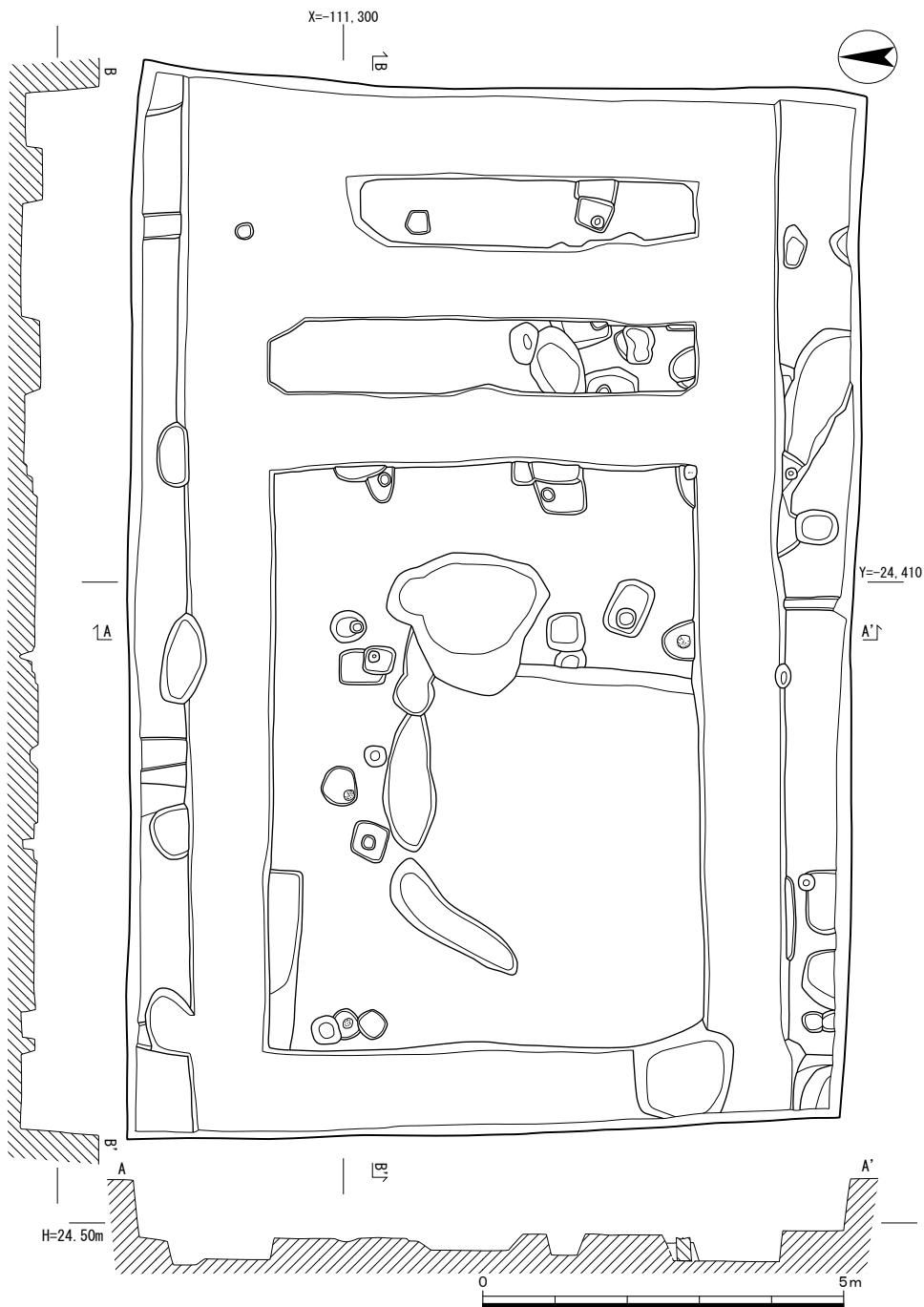
遺構・遺物 調査地の堆積状況は、盛土層および耕土層が現地表下約60cmまでみられ、その直下が厚さ10～15cmの暗灰褐色泥砂層である。次いで厚さ20～30cmの褐灰色泥砂層となる。この下層は赤褐色砂礫層であり、最後に同層を約1m掘り下げ、同様の砂礫層が続くことを確認した。暗灰褐色泥砂層は鎌倉～室町時代の遺物包含層である。同層上で検出した遺構は全て江戸時代以降のものであった。褐灰色泥砂層は、平安時代前期から中期の遺物包含層である。同層上で検出した遺構を図に示した。土壇・柱穴などがある。これらの遺構は出土遺物が少なく成立時期を求め難いが、平安時代中頃と考えて良いと思っている。赤褐色砂礫層からは遺物は出土しなかった。同層上で検出した遺構は溝および土壇である。これらの遺構からは平安時代前期から中期に属する遺物が出土している。

当遺跡から出土した遺物は、平安時代では土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦がある。緑釉陶器では出土例の少ない火舎がみられる。鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器・須恵器・瓦器・六古窯系陶器・輸入陶磁器がある。

小結 今回の調査は対象面積が少なかったこともあり、柱痕の残るものもある柱穴群を検出したものの、建物としては2棟存在すると推定できるとどまり、全体の規模や方向を知ることはできなかった。しかしこの成果により、この近辺は平安時代およびそれ以降

の遺跡の残存状況は良好であることを再確認できたと思っている。

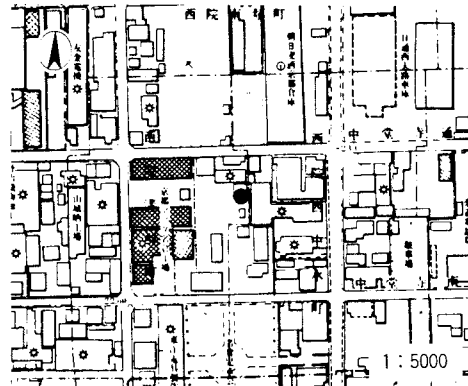
(鈴木廣司)



遺構実測図 (1:100)

31 右京六条三坊 図版5-2

- 1 右京区西院溝崎町 21
- 2 1981年6月16日～7月28日
- 3 585㎡
- 4 ND 73-2 H 41 81 HK-OB
- 5 (株)東洋電具製作所半導体研究センター新築工事

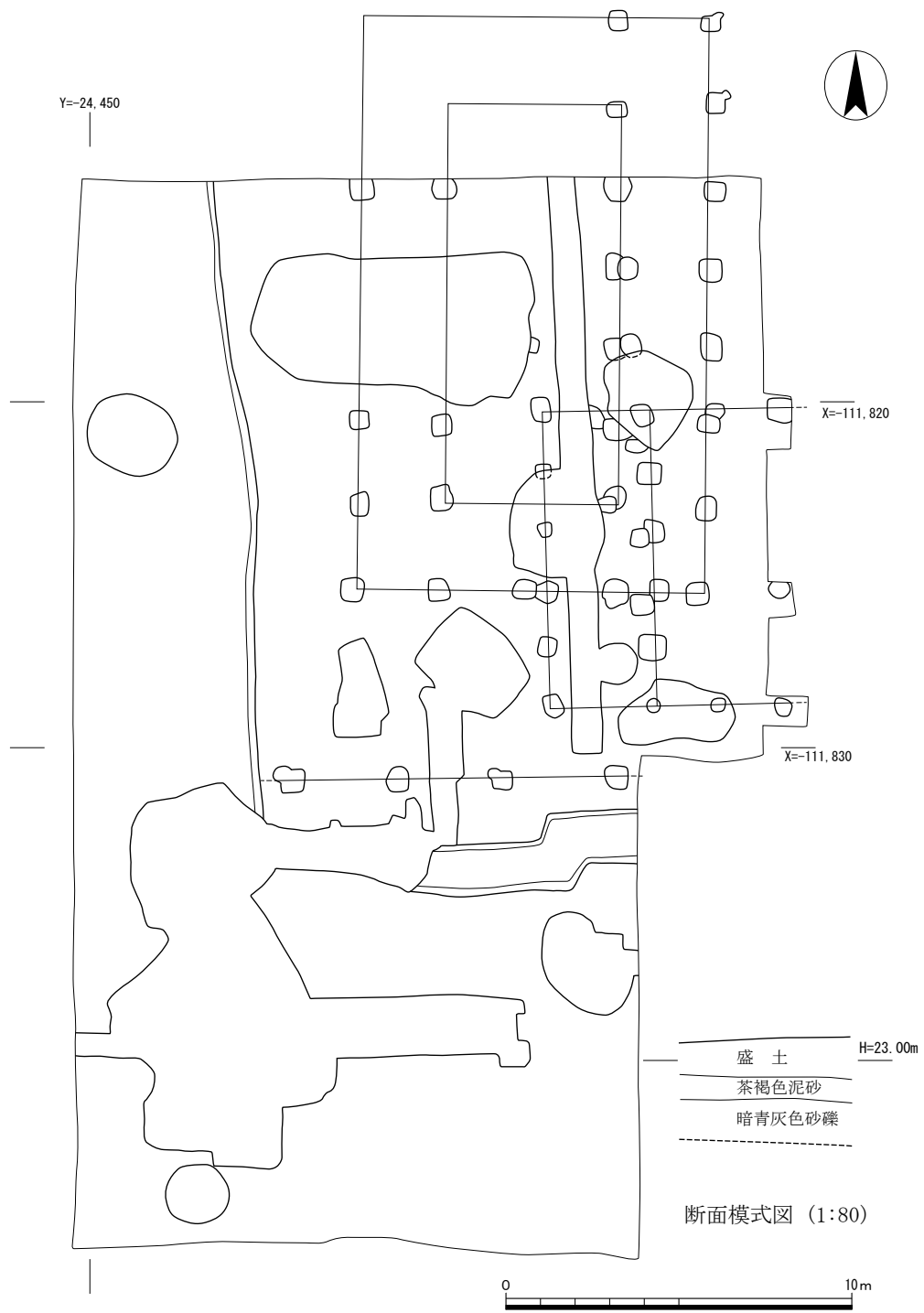


経過 当該地付近は従来、発掘・立会調査などの実施件数が少なく、遺構の有無が定かでない地域のため、試掘調査を先行した。その結果、建物跡の存在が明確になり、発掘調査に変更した。新たに調査区を設定し重機で盛土層を排除の後、遺構検出、掘り下げなどの作業を行い、平面・断面実測および写真撮影を経て調査を終了した。

遺構・遺物 調査地の土層の堆積状況は盛土層が現地表下約50cmまでみられ、盛土層直下は遺物をまったく含まない厚さ20～60cmの茶褐色泥砂層で、全ての遺構は同層上で検出した。茶褐色泥砂層以下は3m以上の堆積が認められる暗青灰色砂礫層である。また同層も遺物を含んでいない。検出した遺構は、溝1・柵列1・建物2である。溝は幅1.5m、深さ20cmで東西に流れる。柵列は溝の北側にあり東西方向に3間(約10m)を認めた。建物は、1棟が母屋の桁行5間(約11.5m)、梁間2間(約5m)で、4面に1間(約2.5m)ずつの廂を持つ南北棟である。もう1棟は桁行5間(約8.6m)、梁間3間(約6.7m)を認めたが東側は調査地外に延びる可能性があり即断できない。この建物2棟は、柱穴の重複関係で前者(四面廂の建物)が後者より新しいということが認められる。これらの遺構の成立時期は平安時代前期から中期の間と推定できる。また上記の遺構の他に調査区の西側で、中世に削り取られたと考えられる段差がみられる。

出土した遺物は、平安時代前期から中期に属する土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦がある。鎌倉から室町時代には土師器・瓦器・六古窯系陶器がある。遺物は総体的に出土量が少なく、大部分が小破片であった。

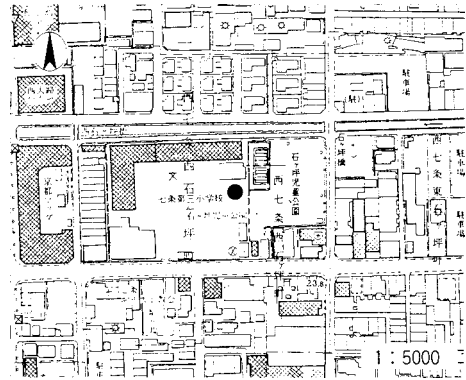
小結 平安京の右京は、これまでの調査の成果により、平安時代の遺構の残存状況は良好であることが知られており、今回の調査において検出した遺構も近世以後の攪乱を除けば残存状況は良好といえる。また右京の遺構の多くは平安時代以降の遺構との重複が少ないこともあり、平安京創設当時の様子が窺える良好な資料を提供している。(鈴木廣司)



遺構配置図 (1:200)

32 右京七条二坊

- 1 下京区西七条西石ヶ坪町5
- 2 1981年9月4日～9月21日
- 3 119㎡
- 4 ND73-2L15 81HK-EX2
- 5 市立七条第三小学校給食室改築工事



経過 調査地は平安京西市跡の北限から北へ30mの所に位置している。七条第三小学校では1978年度に発掘調査が実施されているが、流れ堆積状の砂礫層が認められているものの、遺構は見つかっていない。

遺構・遺物 調査の結果、前回と同様の砂礫層が、近代盛土層の直下に全面に認められた。この砂礫層を切り込んで、平安時代中期の東西溝を検出した。しかしながら南肩部が調査区外になり、溝の幅は確定できなかった。調査区内での溝幅は約5.5m、深さ0.6mである。北肩部はなだらかで、埋土は淡灰色砂泥層、黄褐色粗砂層、灰色粘土層、黒色腐植土層の順に堆積していた。

遺物としては溝内より、土師器皿・須恵器杯・甕、緑釉椀、黒色土器杯、瓦等が出土している。砂礫層からは古墳時代後期の土師器甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

小結 七条第三小学校の校地内で、これまで二度にわたり調査したことになるが、共に調査区全域で流路の砂礫層を検出している。古墳時代後期の遺物が少量出土することから、その頃に流路が形成されたものであろう。また、砂礫層上面で検出した溝は北肩部が直線的に走ることから、平安時代中期頃の地割りに関連を持つことが考えられる。

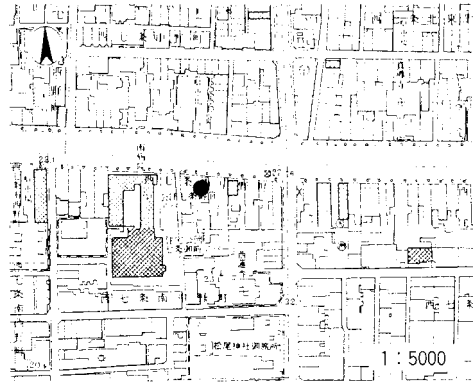


(前田義明)

全 景 (北から)

33 右京八条二坊(1) 図版7-1

- 1 下京区西七条南中野町 44
- 2 1981年7月17日～8月12日
- 3 170㎡
- 4 ND 74-1 I 52 81 HK-YB
- 5 (株)京都銀行西七条支店建設



経過 調査地は七条通を北に面し、平安京西市跡の範囲内に当る。条坊復原図によると、七条大路の南半が通ると推定された。周辺の西市跡の発掘調査は七条通内や京都南病院等で実施され、七条大路の路面と側溝・建物や井戸等が検出されており、平安時代の遺構が比較的良好に遺存している地域であることが確認されている。

遺構・遺物 調査はまず試掘調査を先に実施し、溝・ピット等が認められ本調査となった。調査の結果、七条大路の路面と南側溝・建物・溝・土壌・多数のピット群等が検出された。盛土層と旧耕土層を機械によって排除したところ、無遺物層である黄褐色砂泥層が広がっており、この面で遺構を検出した。

七条大路は路面が3面(SF1-A～C)、側溝が4条(SD1-A～D)重複して認められた。路面はいずれも5cm程の厚さがあり、下に暗茶褐色砂泥層を置き、その上に砂礫を敷いたもので、表面が堅い面をなしている。側溝は幅が1m前後で、深さが約40cmの規模である。4条の側溝の作り替えによる幅は、溝の心々間で1.2mの間におさまる。側溝の年代は最古のSD1-Aが平安時代後期に当り、他の3条は鎌倉時代に比定される。路面からの出土遺物は、小片のみで、年代は決定し難いが側溝との対応関係から同



七条大路南側溝 (北東から)

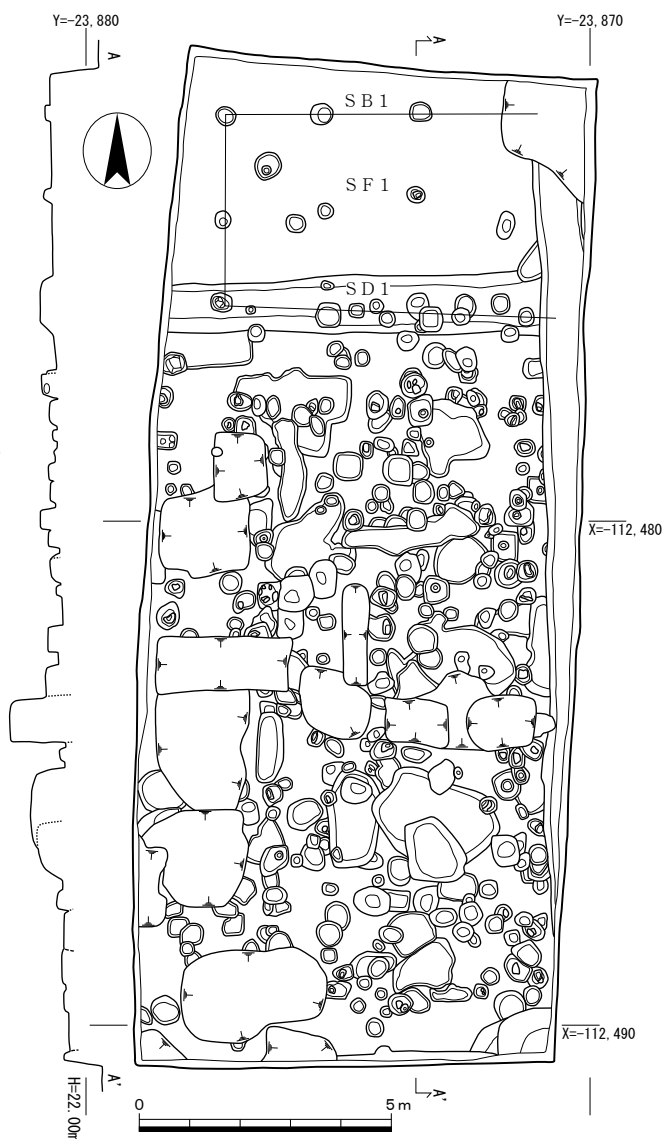
時期のものであろう。

ピット群は、掘立柱建物等の建て替えが激しく行われたとみえて、切り合いが著しい。柱穴からの遺物は少量で年代は限定し難いが、平安時代後期から室町時代にかけてのものと思われる。SB1は建物としてまとめ、南北3.8mで、東西6m以上、2間×3間以上。東西隅のもの以外は根石を持たない。このSB1は路面と側溝を切り込んで作られており、七条大路にはみだしている建物である。他のピット群は素掘りのものと底部に根石を置くものがあり、柱根を残しているピットもいくつか認められる。

遺物は平安時代後期から室町時代のものがあり、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶器・輸入陶磁器・瓦等が出土しているが、大半は小破片である。

小結 今回の調査では、七条大路の路面と側溝が検出され、平安京の条坊をより精密に復原するに当り、良好な資料が得られた。路面の南側で検出された多数のピットは、大半が建物の柱穴と考えられ、平安時代後期から中世の町屋の頻繁な建て替えの結果と思われる。七条大路上にも延びており、中世以降路面が狭まっていることを物語っている。なお西市跡に直接関係する遺構は発見されていない。

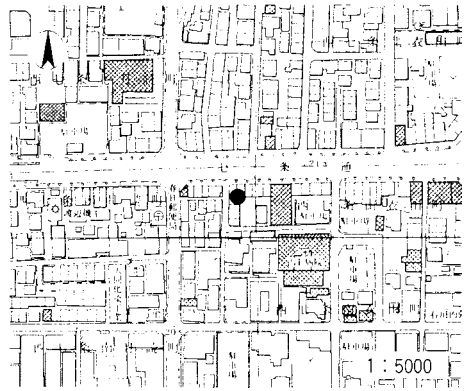
(前田義明)



遺構実測図 (1:150)

34 右京八条二坊(2) ㊦ 図版7-2

- 1 下京区西七条月読町98-1・南衣田町10-1
- 2 1981年3月17日～3月23日
- 3 101㎡
- 4 ND73-2L52 81HK-NN
- 5 藤喜マンション新築工事



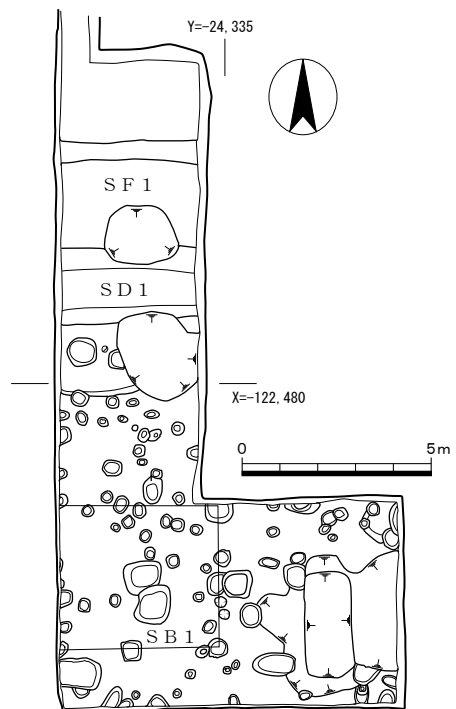
経過 調査地は平安京右京八条二坊十六町および七条大路に当る。工事に先立って試掘調査を実施したところ、路面や柱穴を検出したので発掘調査を実施することとなった。調査対象地約300㎡の中で、面積101㎡を有するL字形トレンチを設定して調査した。

遺構・遺物 基本層序は上から積土層・旧耕土層・赤褐色砂泥層・灰色砂礫層となる。調査区北端で七条大路の路面と南側溝を、中央から南半分では多数の柱穴を検出した。路面SF1は極めて残りが良く、小礫や泥土を突き固めた土層が、積土層直下より厚さ約1mにわたり堆積していた。路面の最上層は昭和初期のもので、側溝廃絶後も道路として生き続けたことを示している。南側溝SD1は幅2m、深さ50cmを測る。埋土より鎌倉時代の遺物が出土した。

南半分で検出した柱穴は、大部分が径20cm前後、深さ10～20cm程のもので、平安～鎌倉時代の遺物を含む。約90個検出したものの、建物として復原できたのはSB1のみにとどまった。

遺物は整理箱16箱分が出土した。平安～鎌倉時代のもものが大部分である。内容は土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁等であった。

小結 今回の調査では推定どおり七条大路の路面と南側溝を検出し、出土遺物によって鎌倉時代に側溝が廃絶した後も道路のみは生き続けたことを明らかにした。こうした大路の変遷は、平安京右京における最近の調査でもよく知られており、今回の成果もこれに合致する重要な例といえよう。(吉崎 伸)

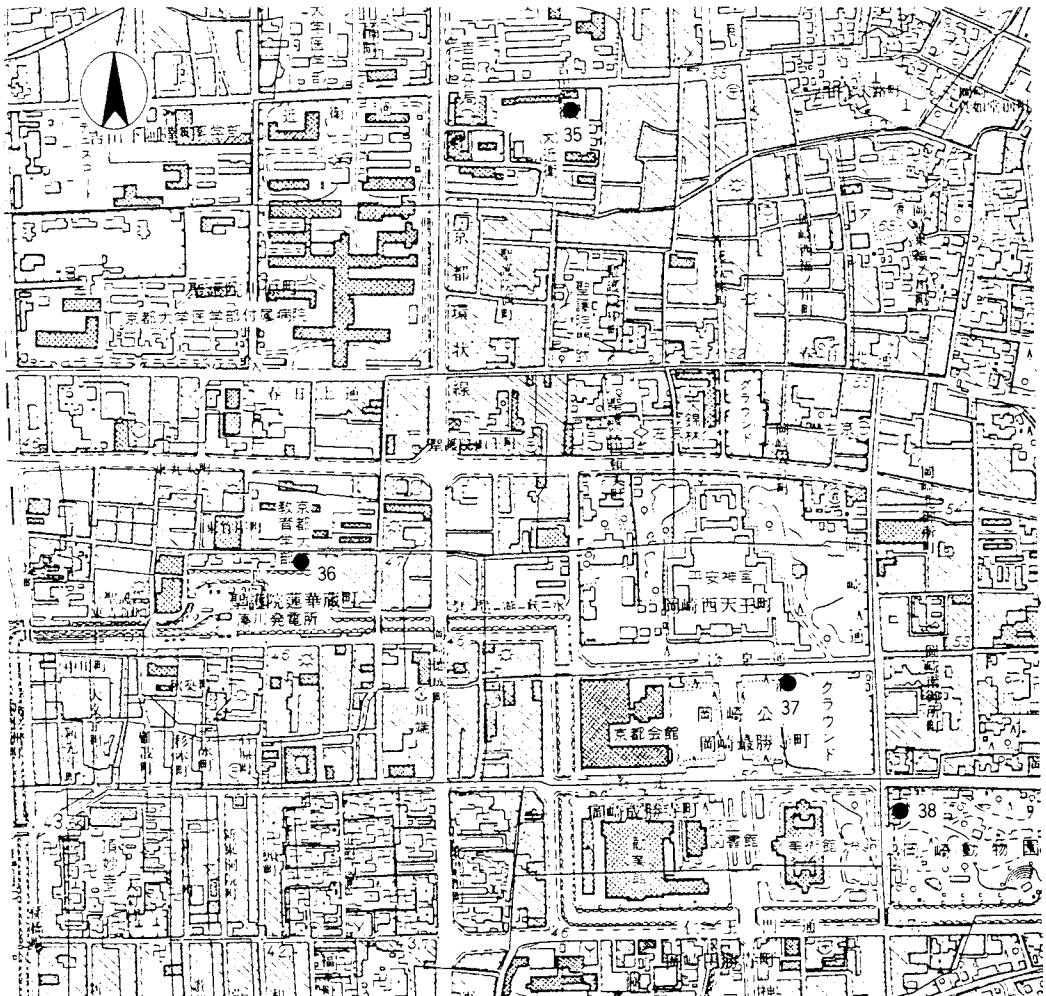


遺構配置図(1:200)

Ⅱ 白河街区跡

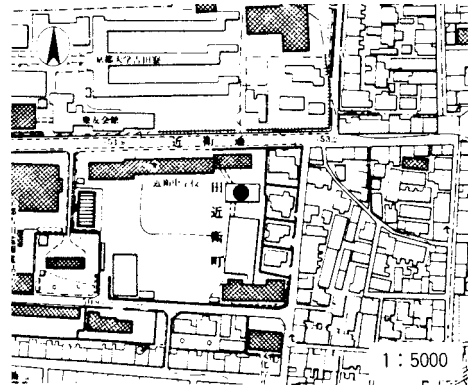
今年度白河街区跡（六勝寺跡）で実施した発掘調査は、福勝院跡（35）・白河北殿跡（36）・最勝寺跡（37）・法勝寺跡（38）の4ヶ所である。発掘調査で検出した平安時代後期の主な遺構には白河北殿跡の建物基壇および法勝寺跡の寺域西限築地側溝がある。これらの遺構は六勝寺域の地割りや建物配置の復原を検討する上で注目される。また法勝寺跡では平安時代遺構の下層で弥生時代後期～古墳時代後期に至る流路を検出し、多量の土器・木器が出土した。当時の旧地形や生活環境の復原を考える上で貴重な成果を得ることができた。

（上村和直）



35 福勝院跡

- 1 左京区吉田近衛町 26-53
- 2 1981年4月27日～5月28日
- 3 183㎡
- 4 ND 65-1 E 43 81 K S-KN
- 5 市立近衛中学校校舎改築



経過 調査地周辺は平安時代後期（院政期）に繁栄した白河街区内の福勝院跡に推定されている。調査地付近の京都大学農学部・医学部・教養学部構内および隣接地の看護専門学校寄宿舎内では多くの調査が実施され、縄文時代から平安時代、更には中・近世に至る各時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査目標は平安時代後期の遺構残存状況の確認と、平安時代以降の変遷状況の把握においた。

調査は建物平面に合わせ、東西 17 m、南北 11 m の調査区に設定した。盛土および前校舎のコンクリート基礎は重機によって除去し、その後精査を行った。

遺構 調査の結果、中世の包含層およびその下面で遺構面 1 面を検出した。遺構は全て中世以後の時期に属するもので、平安時代後期に相当する遺構はない。

調査地周辺は東から西へ緩やかに傾斜した白川の扇状地で、標高は 51.9 m である。調査地の層序は上から盛土層（現代層 40cm）、茶褐色土層（中世包含層 20cm）、灰色砂土層（無遺物層 20cm）、茶灰色砂泥層（無遺物層 1 m）、黒色砂土層（縄文土器包含層 50cm）、灰色細砂層（以下無遺物層 10cm）、青灰色粘土層（20cm）、黄灰色砂礫層である。灰色砂土層上面で、溝・土壇・井戸・柱穴等の遺構を検出した。時期は鎌倉時代から室町時代後半である。

鎌倉時代の遺構は少なく、調査区南東部に集中する。主な遺構は溝（S D 124・128）などがあり、柱穴も若干ある。室町時代前半の遺構は多く、調査区全域にみられる。主な遺構には溝（S D 91.180）、土壇（S K 20・29・55・76・106・112）、井戸（S E 39・65）などがある。柱穴は調査地全域にあるが、建物としてまとまるものはない。また柱穴には底部に平坦な石を据えるものもみられる。室町時代後半の遺構も多い。主な遺構は土壇（S K 11・49・52・93・116・119）、井戸（S E 37）などがある。柱穴は調査区域全域にある

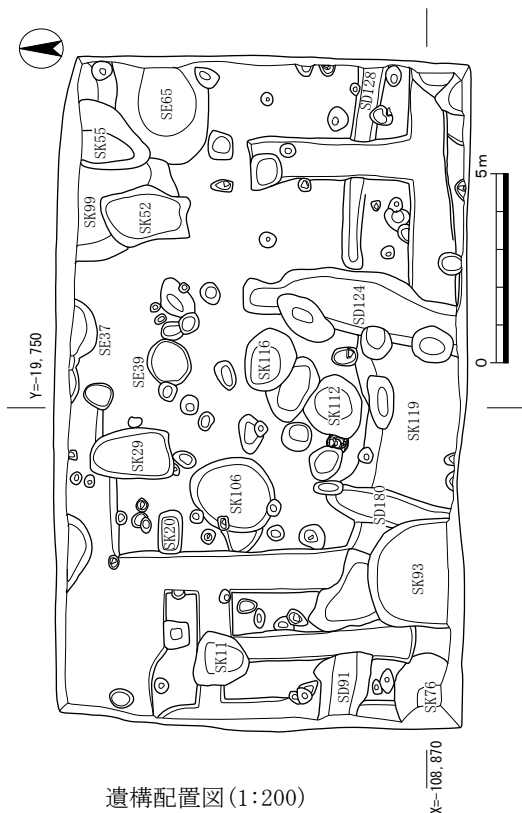
が、建物としてまとまるものはない。また土壌には長方形の掘形を呈し、完形の土師器皿を出土したことから墓塚と推定できるものもある。

遺物 出土した遺物には土器類・瓦類・金属器類などがある。土器類が最も多く、他の遺物は少ない。土器類には縄文時代、平安時代後期、鎌倉時代、室町時代前半・後半のものがある。縄文土器は少量で黒色砂土層や、中・近世の遺構内より出土し、若干摩滅している。平安時代後期の土器には、土師器皿・高杯・甕、須恵器壺・甕、瓦器椀、緑釉陶器椀・皿、白磁椀などがあり、茶褐色土層や中世の遺構より出土している。鎌倉時代の土器には土師器皿、瓦器鍋・椀・皿、陶器壺・甕・播鉢、磁器椀などがあり、S D 124・128から出土している。室町時代前半の土器には土師器皿、瓦器鍋・釜・椀、陶器播鉢・甕、磁器椀・壺などがあり、S E 39からは多量に一括して出土した。室町時代後半の土器には土師器皿、瓦器鍋・釜、陶器播鉢・甕・壺、磁器椀・壺などがあり、土壌や茶褐色土層から多量に出土した。特にS K 93・116からは土師器のみが一括して出土した。瓦類は量が少なく、軒丸瓦・丸瓦・平瓦が出土し、いずれも小片である。金属製品は銭貨・鉄釘・刀子などがある。

小結 調査区内は現代攪乱や中世の削平が激しく、遺構の残存状況は良好ではなかった。当初目標にした平安時代後期の遺構は全く検出できなかったが、鎌倉時代・室町時代の遺構を多く検出し、周辺の調査と合わせ平安時代後期以降の当該地の変遷を考える上で貴重な資料を得た。

当地に推定されている福勝院は仁平元年(1151)に建立され、応永3年(1196)頃まで残っていたものと推定されている。検出した鎌倉時代の遺構もこの福勝院に関連するものと考えられる。

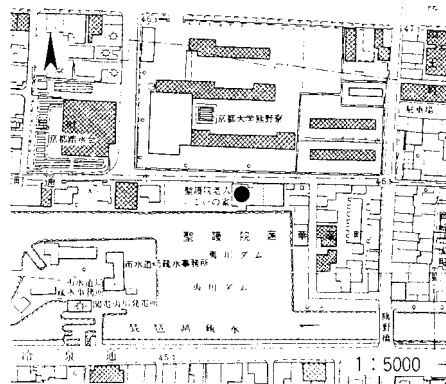
(上村和直)



遺構配置図 (1:200)

36 白河北殿跡

- 1 左京区聖護院蓮華蔵町2-3
- 2 1981年9月1日～10月2日
- 3 250m²
- 4 ND 64-2 L 54 81 K S-WN 3
- 5 仮称聖護院保育園新設工事



経過 調査地は白河北殿跡に推定されている。調査地付近の京都大学医学部附属病院・教育学部・熊野寮構内では多くの調査が実施され、縄文時代から中・近世に至る各時代の遺構・遺物が検出されている。また調査地西側隣接地の京都市清掃局構内でも1979年に発掘調査が行われ、平安時代後期の建物基壇を検出している。今回の調査の目標は建物基壇の続きの検出と、その後の変遷状況の把握においた。

調査は建物平面に合わせ東西25m、南北10mの調査区を設定した。盛土および近世の堆積層は重機によって除去し、その後精査を行った。

遺構 調査区東部は北西から南西へ流れる流路で、近世の柱穴を除き遺構はない。西部で2面の遺構面を検出した。調査地周辺は平坦地で標高は45.5mである。調査地西部の層序は上から盛土層（現代層20cm）、黒色土層（近世～近代層1m）、灰色砂泥層（中世整地層25cm）版築層（平安時代後期70cm）、茶灰色砂泥層（以下無遺物層20cm）、黄色砂と黄褐色砂礫の互層となる。遺構検出面は判築層上面と灰色砂泥層上面であり、時期は平安時代後期と鎌倉時代～室町時代である。

平安時代後期の遺構面では調査区北西部で建物基壇（SB1）を検出した。基壇は南部・東部を中・近世の遺構により削平されているが、東西20m、南北5m検出した。基壇上面は削平を受けているが、北側が高く（高さ50cm）、南側が下がり亀腹状を呈している。基壇外装および雨落溝は検出できなかった。各柱位置では北側で3ヶ所、南側で2ヶ所の礎石据付穴を検出した。北側の据付穴は大きく（径1～1.2m、深さ20cm）、南側は小さい（径70～80cm、深さ10cm）。据付穴の中には直径5～10cmの河原石を入れ根固石としている。柱間寸法は東西間が、西より4.2m・1.6mで、南北間が3.2mである。基壇は黄色砂と褐色砂を互層に積んだ版築層で、かなり固くしまっている。基壇が掘り込み地業かどうかは範囲が削平を受けているために不明である。

鎌倉時代～室町時代の遺構面では調査区北西部で道路状遺構，その南側で落ち込みを検出した。道路状遺構はSB1基壇の北部の上面に灰色砂泥層および，石・瓦を敷き固めた遺構で，上面は平坦である。南側落ち込みは深さ90cmで調査区外へ続く。埋土は暗灰色砂泥層で，下層には多量の瓦が堆積している。

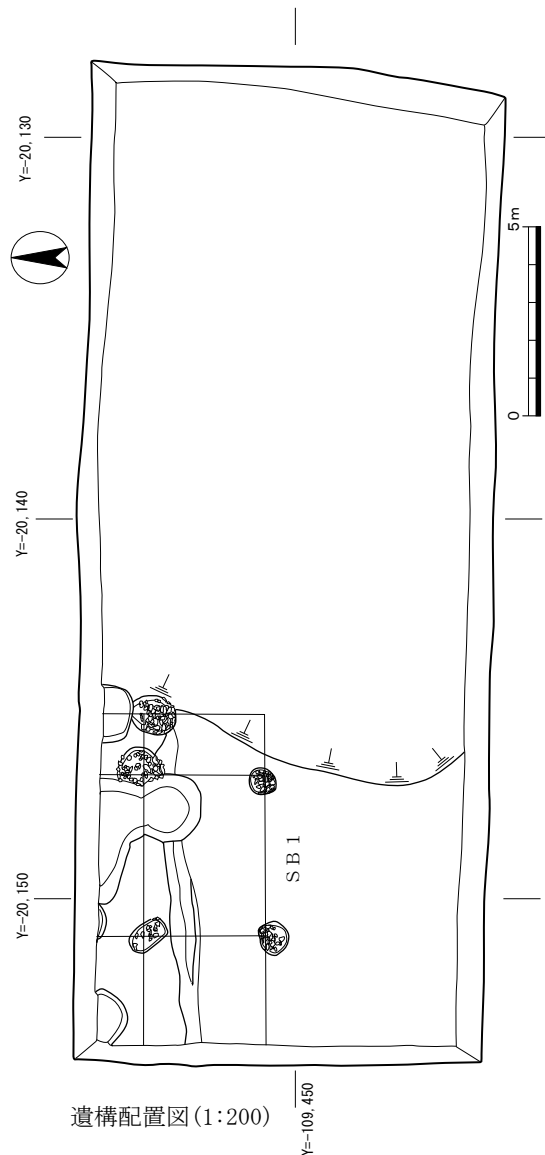
遺物 出土した遺物のほとんどが瓦類で土器類などは極めて少量である。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦などがあり，主として中世の落込から出土した。時期は平安時代後期のものが多いが，鎌倉時代のものも若干含まれる。平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様は，以前から調査されている六勝寺跡出土の瓦類と同様である。

土器類には縄文土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・陶器・磁器があり，建物基壇内・中世落込や近世攪乱などから出土している。建物基壇内から出土した土器には土師器・須恵器・緑釉陶器などがあり，時期は12世紀前半である。金属製品は銭貨・鉄釘などがある。

小結 調査の結果，平安時代後期の建物と中世の遺構面を検出した。建物は調査区西隣で検出した建物基壇と同一と考えられ，東西棟建物に比定できる。基壇南側が下がり，南側礎石据付穴列が小さいことから，北側柱列を身舎のもの，南側を廂または縁束のものと推定できる。

当地周辺に推定されている白河北殿は方二町の敷地を持ち，元永元年（1118）に建立され，保元元年（1156）に焼失している。検出した建物は北殿内のどの部分に当るかは不明であるが，関係する建物を検出したことは，今後白河北殿の規模や建物配置を考える上で注目される結果である。

（上村和直）

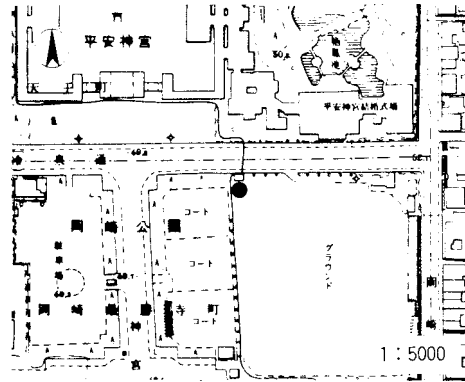


遺構配置図 (1:200)

Y=-109,450

37 最勝寺跡

- 1 左京区岡崎成勝寺岡崎公園グラウンド内
- 2 1982年1月20日～1月22日
- 3 42㎡
- 4 ND 765-3A 25
- 5 左京区岡崎公園グラウンド内公設防火水槽新設



経過 岡崎公園グラウンド北西部のテニス

コートに隣り合う位置に、南北約6.5m、東西約7mの調査区を設定、重機による盛土層の排除を行った。現地表下40～80cmで白川砂の面がみられたため、この面を遺構面と認め精査を開始した。2日間で遺構検出、掘り下げを終わり、3日目に写真撮影、平面実測、土層の堆積状況確認のため断割りを行い断面実測ののち調査を終了した。

遺構・遺物 いわゆる白川砂（青灰色細砂層）上面で遺構検出を行い、土壙・柱穴・下水の会所・性格の明らかでない施設の基礎などを検出した。これらに伴う遺物は、土師器・陶器・瓦・ガラス等である。遺構の状態、出土遺物から、全て公園整地直前まで使用していたものと考えられる。

小結 付近の調査の成果にもかかわらず、今回は最勝寺あるいは円勝寺に関連する遺構は認められなかった。しかし、これは遺跡内での部分的な結果であることを考慮すべきである。また標高48mで約21000年前と思われる火山灰層を認めた。

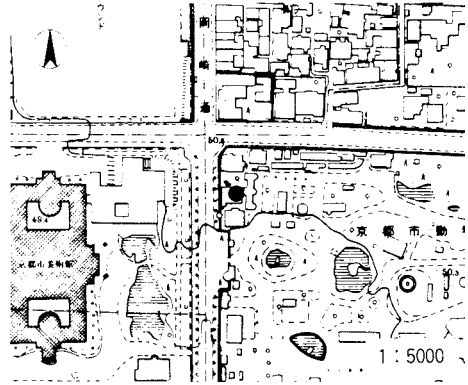


全景（北東から）

（鈴木廣司）

38 法勝寺跡 図版8・16

- 1 左京区岡崎法勝寺町
- 2 1981年8月3日～10月6日
- 3 508㎡
- 4 ND 65-3 B 32・43 81 HK-Z O
3
- 5 動物図書館の建設



経過 調査対象地は標高約49.8mにある京都市立動物園北西部の旧木造官舎の跡地である。同地に、南北約23m、東西約21mで方形のⅠ区と、その南に、南北約10m、東西約6mのⅡ区と2ヶ所調査区を設定し、発掘調査を開始した。

遺構・遺物 調査地は、盛土層が現地表下10～50cmで西から東に向かって厚く堆積している。盛土層を取り除くと平安時代から江戸時代に至る遺構面がみられる。この遺構面はⅠ区の北西部とⅡ区の南東部が灰褐色砂の無遺物層であり、この間には茶褐色砂泥層などの平安時代の遺物包含層が20～30cmの厚さで堆積している。検出した遺構には江戸時代の井戸・柱穴、室町時代の南北溝・土壇、平安時代の井戸・土壇・柱穴などがある。この層以下は、幅約25m、深さ約1.5mの流路となる。流路の堆積土をここでは大きく2層に分けておく。上層は黒褐色泥砂層などで古墳時代後期と考えられる。下層は砂、泥砂、腐植土などの互層で、古墳時代前期と考えられる。また標高約47.5mで火山灰層を認めた。

流路の上層から、6世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。下層からは、4世紀前半～5世紀中頃の土師器・須恵器・木器が出土した。特に、庄内式～布留式に併行する多量の土師器の壺・甕・高杯・鉢などがある。またTK73型式に併行すると考えられる須恵器甕が出土し、それと共伴して土師器の壺・甕・高杯なども出土した。なお木器には臼・一本梯子・火鑽臼・盤・えぶり・鋤などがある。その他、井戸・南北溝などから平安時代後期～室町時代の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦器・六古窯系陶器・瓦などが出土した。

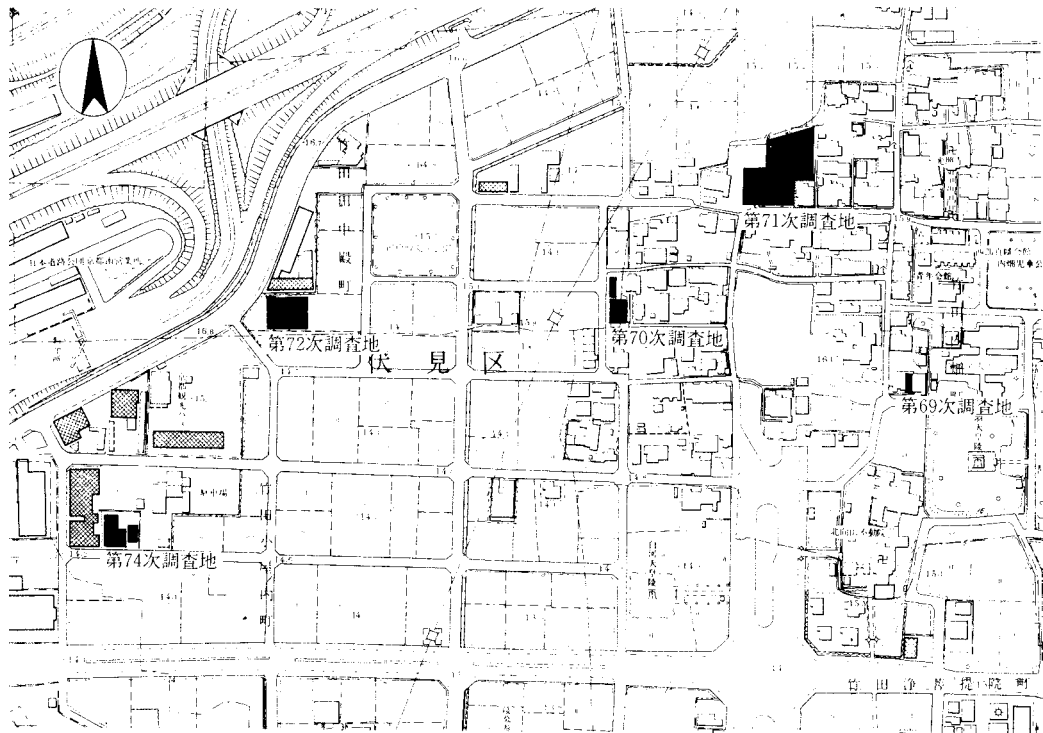
小結 岡崎一帯はこれまでの調査で六勝寺に関係する遺跡だけでなく、弥生時代から古墳時代の遺跡の存在が知られている。今回の調査地は法勝寺の西限に推定される位置であるが、法勝寺に関連する明確な遺構は検出できなかった。しかし下層遺構の流路から出土した古墳時代の多量の土器、木器などは京都のこの時代を知る貴重な資料と言える。これらは現在資料整理中であり詳細は今後の報告に譲りたい。(鈴木廣司・平方幸雄)

Ⅲ 鳥羽離宮跡

今年度の鳥羽離宮跡発掘調査は、第69・70・71・72・74次の5ヵ所で実施した。第69・70・71次は東殿推定地、第72・74次は田中殿推定地である。

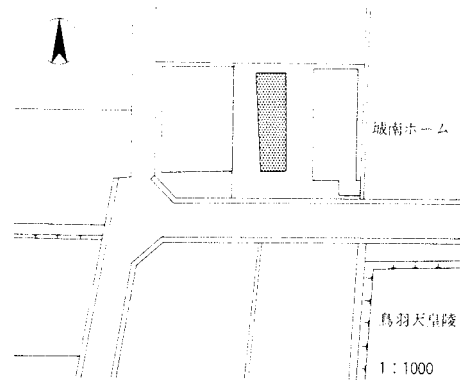
東殿中心部は、白河天皇陵から北向山不動院・鳥羽天皇陵・近衛天皇陵にかけての一带である。これらより以北の一带は、離宮期の遺構群から始まり、中・近世の集落跡を示す多数の遺構が重複して検出される状況にある。今回の調査でも同様な状況であった。特に第71次調査地では顕著にみられ、更に下層では今回初めて弥生時代（第Ⅲ～Ⅳ様式）の遺構・遺物を発見した。

田中殿推定地の調査では、両調査地で道路跡と思われる遺構を検出し、離宮の地割りを研究する上で重要な発見となった。特に第72次調査地のものは、道・側溝の規模が大きく、文献にみえる「北大路」に比定される可能性がある。下層では、平安時代前期・奈良時代・古墳時代・第Ⅴ様式から庄内式にかけての遺構・遺物を確認している。当推定地内では現在多数のモーターが建ち又建設中で、田中殿町の景観も失われつつある。（長宗繁一）



39 第 69 次 調 査 ④

- 1 伏見区竹田内畑町 48-3
- 2 1981年6月8日～6月16日
- 3 52㎡
- 4 ND 84-3 H 53 81 TB-TB 69
- 5 家屋建築工事



経過 調査地は鳥羽離宮跡の推定東殿の中心部に位置しており、現在の鳥羽天皇陵の北西 30 m、北向山不動院の北方 100 m の所である。1970 年度に同敷地内の東隣りで増築工事が行われた折、試掘調査を実施しているが、湿地であることが確認されている。

遺構・遺物 基本的な層序は、盛土層・灰褐色泥砂層の直下に、灰色砂礫層が認められ、この層がベースになっている。調査区の南部に南へ傾斜する肩部が認められ、それより北部の高い部分に、井戸・土壇・溝・礎石・多くのピットが検出された。いずれも中世以降の時期に属するものである。ピット群は中世以降何回も造り替えられたらしく、素掘りのものと、底部に根石を置いたものがある。調査区の北西部では柱間隔が 1.9 m で 3 間分 (5.7 m) 並んだ柱列が認められるが、建物か柵列かは不明である。井戸・溝・土壇は江戸時代のものである。井戸は円形の掘形 (径 90 cm, 深さ 1.0 m) を持ち底部に桶を置く。

出土遺物は少なく、鎌倉から室町時代の土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦等がある。

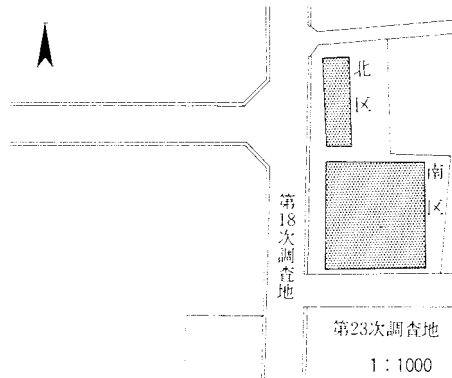
小結 今回の調査では鳥羽離宮期の遺構は検出されず、中世のピット群が認められた。しかし、調査面積が狭いため建物の規模・様相は窺えなかった。東殿の既往の調査では、中世の柱穴群とそれに伴う濠や井戸等の遺構が多数検出されており、今回の調査地も同様な性格のものであろう。(前田義明)



全 景 (北から)

40 第 70 次 調 査 ④

- 1 伏見区竹田真幡木町 65 の 1
- 2 1981 年 6 月 16 日～7 月 27 日
- 3 218㎡
- 4 ND 84-3 H 41 81 T B-T B 70
- 5 家屋建築工事



遺構・遺物 調査で検出された遺構は、室町時代と鳥羽離宮期から鎌倉時代にかけての遺構である。これらの遺構は、南区で主に検出されている。遺構が検出された標高は、14.2～14.5 mであった。室町時代の遺構群のベースは暗茶灰色系の泥土ないし砂泥層、鎌倉時代から鳥羽離宮期にかけてのベースは、砂礫層ないしは、灰色砂泥層であった。

室町時代の遺構では建物・溝・暗渠施設等がある。建物は南区北東部に石が散在し、東端部では転用されたと思われる凝灰岩製の長さ 50cm のものがみられた。他は列石状に並ぶ部分等がみられたものの、建物を復原できる状況ではなかった。この建物を取り囲むように、幅 20～30cm、深さ 30cm の溝（SD 2）が東西より走り北へ折れ曲がる状況で検出された。暗渠施設（SX 2）は、建物・SD 2 の西側で検出されたもので、平瓦・丸瓦 3 枚ずつを組合せ、西に傾斜していた。これらの遺構群に先行する SD 3・SX 3 を検出した。SD 3 は東端を南北に走り、深さ 20～40cm を測る。南端部は一段深くなり、土器・木製品を出土した。SX 3 は、SD 2 の外側を更に取り囲む状況で検出され、堆積土上に SX 2 が位置する。深さは 10～20cm を測る。

上述した遺構から更に掘り下げたところ、鳥羽離宮期から鎌倉時代にかけての遺構群が検出された。溝（SD 4）は、幅 3 m、深さ 10～20cm の浅い溝である。この溝からは、土師器・瓦器・陶器・磁器・漆器碗・木札・箸等が出土した。SD 5 は SX 3 の下部に検出されたもので幅 2 m、深さ 40cm を測る。東西に走る SD 6 は、SD 3 に切られ幅 1 m、深さ 10cm を測り、SD 4 と同様西に向って下がる。SD 7 は南区北西部でわずかに検出された幅 1 m、深さ 10～20cm の溝である。柵列状の遺構は、南北に一直線上に約 2 m 間隔で並ぶ。柱穴径は 20～40cm、礎石の大きさは 20～30cm を測る。

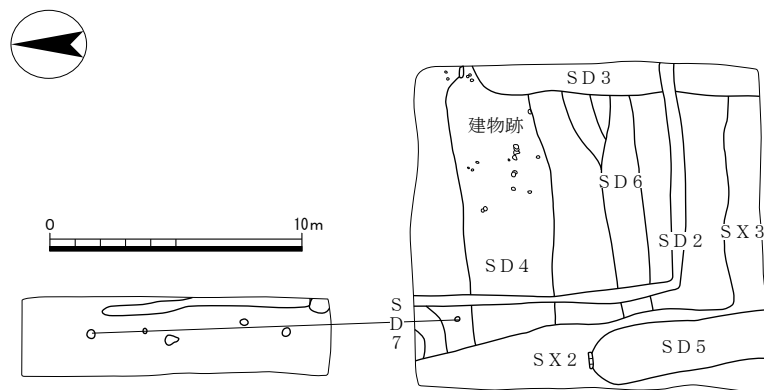
上述した出土遺物の他に弥生土器壺底部、鳥羽離宮期の軒丸瓦(巴文・蓮華文)、軒平瓦(連巴文・唐草文)がみられ、SX 2 に転用されていた瓦は、丸・平瓦ともに段瓦であった。

小結 第70次調査は、東殿推定地の西端に位置し、竹田内畑町の集落から竹田田中殿町の水田地帯への変遷地帯となっている。近辺の調査および今回の調査からみても、東から西へ全体に傾斜し、落込状遺構、おそらくは池の端部に達しているものと思われる。このことは、東殿中心部との標高差からも言える。

鳥羽離宮期の遺構群は、東殿推定地北部でみられるような重複する多数の遺構群から比較すると、非常に少なく、池に近く低湿地であったことによると思われる。また出土遺物数量からも言える。特異な遺構としては室町時代の暗渠施設（S X 2）が挙げられる程度である。

前述したように、調査では東殿推定地西端の状況がわかった。特別な庭園遺構は付近から検出されておらず、東殿南辺にみられるような一大庭園は築かれなかったようである。このことは、当地一帯が東殿の中にあつてさほど重要な場所ではなかったと予想される。反面田中殿御所からみれば前面東方に位置していることから、田中殿御所に対する景観上の配慮に寄るものかも知れない。今後の調査の課題であろう。

(長宗繁一)

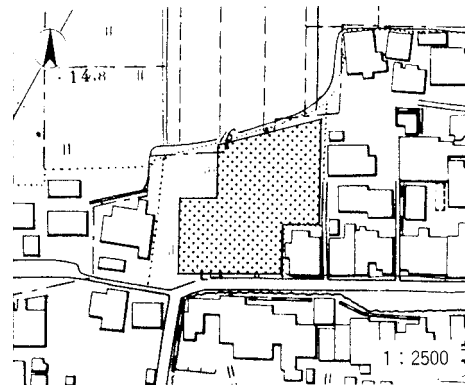


遺構配置図 (1:300)

41 第 71 次 調 査

図版 9・15

- 1 伏見区竹田内畑町，真幡木町
- 2 1981年7月11日～1982年2月25日
- 3 1617㎡
- 4 ND 84-3 H 32・42 81 T B - T B 71
- 5 京都国際文化観光都市建設計画土地区画整理事業（伏見西部第1区）



弥 生 時 代	溝・土壙
古 墳 時 代	土壙
平 安 時 代	溝・土壙・井戸・柱穴・池
室 町 時 代	溝・土壙・井戸・柱穴・墓
室町・桃山時代	溝・土壙・井戸・柱穴・墓・へっつい
江 戸 時 代	溝・土壙・井戸・柱穴

経過 調査地は東殿推定地の北限に当り、また弥生～古墳時代の遺跡「鳥羽遺跡」の推定範囲にあっている。鳥羽遺跡については現在までの第 27・29・35・51・61・64 次調査で遺構・建物が出土している。今回の調査は、東半と西半に分けて実施した。

遺構 遺構の大部分は柱穴で、以下、土壙・溝・井戸等が続く、遺構面は 5 面を確認した。第 1 面は江戸時代で、礎石建物群と掘立柱建物群を検出した。第 2 面は室町～桃山時代で、東南部を中心に分布する。主な遺構として墓、東西に走る大溝がある。墓の中には木櫃に屈葬した人骨を取めたものがあつた。この第 2 面以下では井戸が多数検出されている。第 3 面は鎌倉～室町時代にかけての遺構面で、調査区南部全域に多数の井戸と柱穴がみられた。瓦と粘土で築き固めたへっついの基部も検出されている。第 4 面は鳥羽離宮期の遺構面で、北部の東西溝の南と、東半区の池状遺構とによって区画される地域に遺構が広がっている。北半では平行して走る 2 条の東西溝と、これに直交する南北溝を 1 条検出したが、これらは鳥羽離宮期の地割りに関連するものと考えられる。特に北側の東西溝は、推定東殿の北限を画するものではないかと思われる。第 5 面は弥生～古墳時代の遺構面で、黄褐色泥土層をベースに、溝・土壙が検出された。弥生時代の溝は 6 条確認されており、溝内から中期の土器・石器・木器が多量に出土した。古墳時代では土壙が 1 基あり、布留式土器が一括して出土した。第 1 面から第 5 面までの高低差は約 1 m である。各遺構面から検出された多数の柱穴は、その量が膨大なだけに相互の有機的な関連がつかめず、建物等を

復原するに至っていないが、密集の度合いによってほぼ建物のあった場所は推定できる。

遺物 出土した遺物は弥生時代から江戸時代までのものがあるが、古墳時代前期から飛鳥、奈良時代にかけてのものは出土していない。鳥羽遺跡での今までの弥生土器出土点数は10片にも満たなかったが、今回の調査では整理箱52箱分出土している。今回出土したものは弥生時代畿内第三～IV様式併行の土器群で、製塩土器も含まれている。土器の中には近江・河内・播磨地方からの搬入品、もしくはその影響を受けたものもある。なお平安時代の遺構中ではあるが、前期の甕が1点出土している。石器は全て磨製で、石剣・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁・石錘・砥石等が出土した。特に扁平片刃石斧には大きささまざまな種類があり、当時の木材加工の工程に対応させれば興味深い。木器には手斧の柄・馬鋏・杵・弓状木製品・木の皮を輪状に編んだもの等が出土している。古墳時代の遺物には、土壌内より出土した布留式土器群がある。

平安時代前期の遺物は、池状遺構の下層より土師器・須恵器・緑釉陶器等が出土した。平安時代後期以降の遺物は量的に最も多い。土師器・須恵器・瓦器・瓦・銭貨（北宋銭）等従来出土しているものと大差はない。特異な遺物としては室町時代のピットより、白色粘土を用いて作った無焼成の人形、釣針を模したもの等がある。木器には漆器椀・塔婆・箸等があり、また井戸杵に使用された板材には建築部材の転用したものも含まれていた。

小結 今回の調査で注目されることは、鳥羽遺跡内で初めて溝・土壌等の遺構を確認し多量の弥生土器を採集したことである。遺構面の標高は約14mで、旧鴨川に沿う自然堤防上に遺跡が立地したことが推定される。今後調査地周辺での発掘調査により、竪穴住居址等を検出する可能性が極めて高くなったといえよう。

（木下保明・本 弥八郎・長宗繁一）

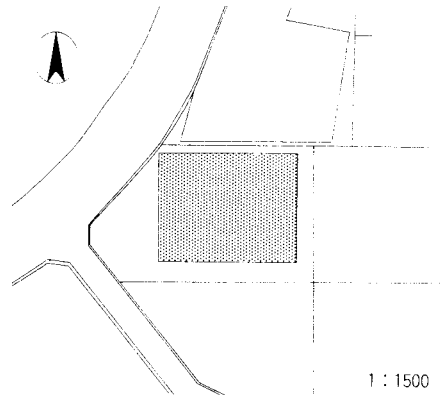


弥生土器出土状況（北から）

42 第 72 次 調 査 ④

図版 10 - 1 ・ 20

- 1 伏見区竹田田中殿町 20 ・ 浄菩提院 102 - 1
- 2 1981 年 10 月 19 日 ~ 12 月 28 日
- 3 520m²
- 4 N D 84 - 3 G 43 ・ 44 ・ 53 ・ 54 81 T B -
T B 72
- 5 ホテル高倉建設



経過 調査地周辺は鳥羽離宮内田中殿地区に推定されている。当調査地の北東 100 m では推定田中殿跡の建物群を検出（第 2 ・ 14 次調査）し、南西 200 m では推定金剛心院阿弥陀堂を検出（第 43 ・ 45 ・ 65 次調査）した。更にこれら調査地の下層では古墳時代の遺構を検出している。

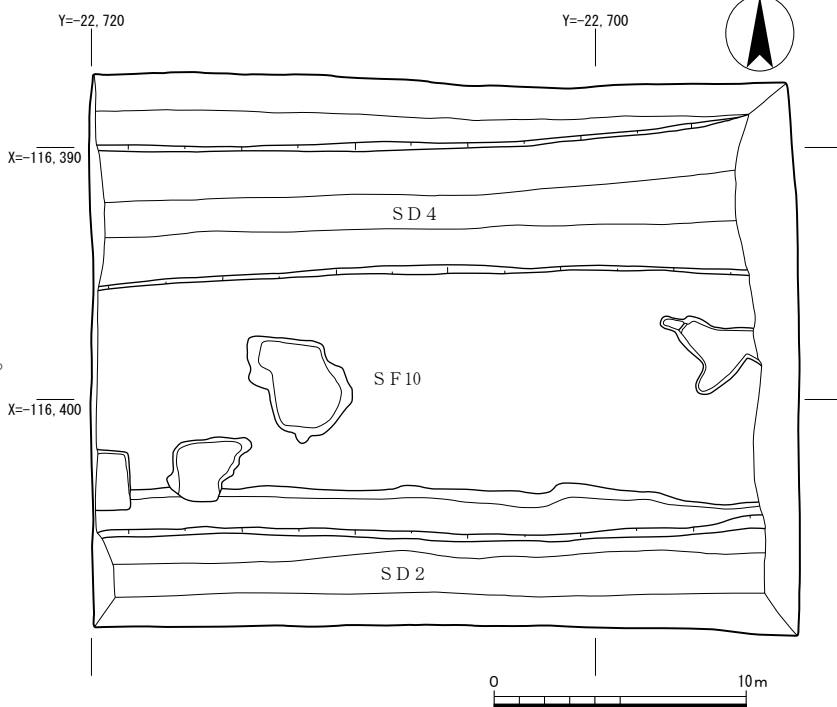
遺構 平安時代後期（鳥羽離宮期）の遺構面の下層で 3 面の遺構面を検出した。下より I 期 ~ IV 期とし、時期別に概略を述べる。I 期（弥生時代末 ~ 古墳時代前期）では、溝（幅 3.5 m、深さ 1.1 m）や土壇・柱穴を検出した。溝はやや弧状を呈し、埋土上層で完形の土器が多数出土した。II 期（古墳時代後期）では調査区南西部で竪穴住居址を検出し、調査区全面で土壇・柱穴を検出した。竪穴住居址は隅丸方形で東西幅 6.1 m、深さ 10cm である。周溝は南と東側にあり、4 本柱である。カマドは南壁中央部にあり、袖部・焚口部を検出した。多数ある柱穴は建物としてそのまとまりを把握できなかった。III 期（古墳時代後期 ~ 平安時代）では水田遺構を検出した。東西方向の畦畔を 1 条検出し、耕土層は灰色砂泥層である。耕土層下に南北方向の溝を 5 条検出した。耕土層中や溝埋土には遺物が少なく明確な時期は不明である。IV 期（平安時代後期）では調査区の南と北に東西方向の溝（S D 2 ・ 4）を検出し、中央部（S F 10）は平坦で上面に礫を敷いている。S F 10 は水田地割りから復原する路面敷と一致し、東西方向の道路遺構と考えられ、両側の溝はその側溝に推定できる。S F 10 は路面幅員 9.5 ~ 10.2 m で、路面は東から西へ緩やかに傾斜している。S D 2 は幅不明、深さ 1.3 m。S D 4 は幅 6 m、深さ 1.2 m で断面は逆台形を呈している。

遺物 出土した遺物には土器類・瓦類・石製品・木製品・土製品・金属製品・骨・種子などがある。時期別に土器の概略を述べると、I 期の土器は土師器のみで壺・甕・鉢・器台・

高杯などがある。これらの土器はほとんど溝から出土している。時期は庄内式併行期である。Ⅱ期の土器には土師器壺・甕・椀・高杯・甑、須恵器杯・壺・高杯・甕・甗・器台などがある。これらの土器は竪穴住居址や土壇の他、Ⅱ期の遺構を覆う包含層中からも多量に出土した。時期は5世紀末～6世紀前半である。Ⅳ期の土器には土師器皿、瓦器椀、陶器甕・壺、白磁椀などがあり、いずれもSD 2・4から出土した。時期は11世紀末～12世紀である。瓦類はⅣ期に属し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦があり、SD 2・4や近代攪乱層から出土している。木製品は木簡・人形・扇・櫛・下駄などがあり、SD 2・4から出土した。木簡は付札で积文は「百済寺別當御房^{御所}権寺主廣^上」である。石製品にはⅠ・Ⅱ期の紡錘車・勾玉がある。土製品には土錘（Ⅱ期）・埴輪（Ⅱ期）・土塔（Ⅳ期）が出土している。骨・種子はSD 2・4から出土した。

小結 調査の結果、古墳時代の遺構面2面と水田遺構および鳥羽離宮期の道路遺構を検出した。古墳時代の遺構には前期と後期のものがあり、前期遺構面では、集落の環濠とも考えられる大溝を検出した。後期の遺構は第39・43・45次調査で検出した竪穴住居址と同一時期である。鳥羽離宮期の道路遺構は幅10mで大規模な側溝を備えることから離宮内の幹線道路と考えられる。文献によると東西方向の主要道路には北大路と中大路があり、北大路は鳥羽作り道から北殿を通り東殿に至る道で、金剛心院の北側田中新御所の南を通る。今回検出したS

F 10を東西に延長すると、金剛心院阿弥陀堂に比定される第43・45・65次調査検出の建物北側に当り、第2・14次調査検出の推定田中殿跡の南側に当る。これらのことからSF 10を北大路に推定できる。今回道路の発見は離宮域内の地割り復原の手がかりを得たものとして重要である。
(上村和直・木下保明)

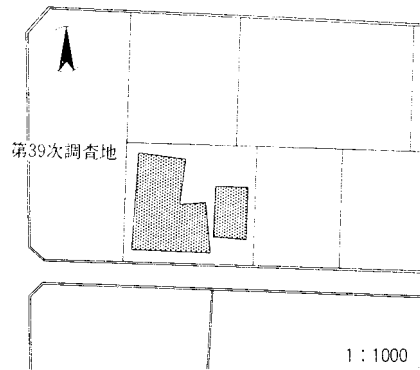


遺構配置図 IV期 (1:300)

43 第 74 次 調 査 ④

図版 10 - 2

- 1 伏見区竹田小屋ノ内町 22・56・59-1
- 2 1982年2月4日～4月10日
- 3 390㎡
- 4 ND 84-3 K 12 81 TB-TB 74
- 5 ホテル建設



経過 調査地は第39次調査地のすぐ東に位置する。第39次調査では、鳥羽離宮期の道路側溝らしき溝や平安時代前期の溝、古墳時代の竪穴住居址を検出しているが、近年、この付近の発掘調査では鳥羽離宮期の遺構が次々に明らかとなりつつあり、特に第43・45・65次の調査では南北45mにわたる雨落溝を伴う礎石建物や石垣遺構、溝等を検出するという成果を収めている。

遺構・遺物 基本層序は、耕土層・床土層・盛土層があり、その下に茶灰色泥土層・茶褐色泥土層・暗茶灰色泥土Ⅰ層・暗茶灰色泥土Ⅱ層・灰褐色泥土層・淡茶褐色泥土層・淡茶褐色砂泥土層・茶灰色砂泥土層が順に堆積し、地山の暗茶褐色礫層となる。茶灰色泥土層上面で鳥羽離宮期、暗茶灰色泥土Ⅰ層上面で平安時代前期、淡茶褐色泥土層上面で古墳時代の遺構を検出した。

鳥羽離宮期の遺構として溝7条、土壙2基を検出した。SD1は幅60cm、深さ30cmを測る南北溝であるが、溝底部は自然の傾斜に反して北で深くなる。溝内で軒瓦・丸瓦・平瓦が出土した。SK2は楕円形を呈する土壙で、壙内には鳥羽離宮期の瓦が詰まっていた。

平安時代前期の遺構として、溝・土壙・路面と、小溝を30条程検出した。SD3は幅70cm、深さ60cmでL



全 景 (古墳時代, 東から)

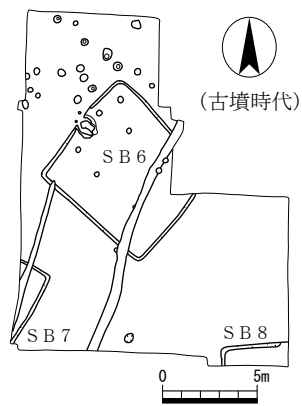
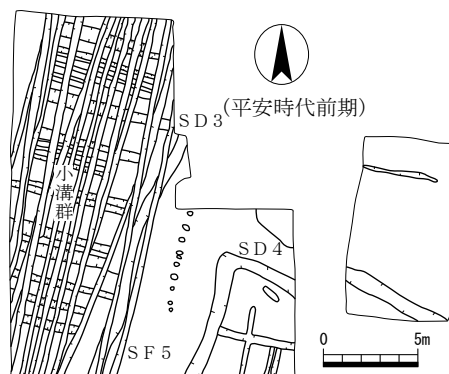
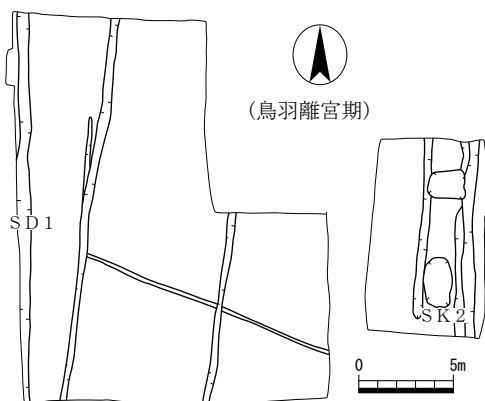
字形に折れ曲がる。SF 5はSD 3, 4間で検出した小石や土器片を用いて硬く敷き詰めた路面状の遺構で、幅約4.5 mを測る。中央に約70cm 間隔に石の抜き取り穴らしきピットが検出された。

古墳時代の遺構には堅穴住居址3棟、ピット群、集石状の遺構がある。SB 6は隅丸方形の堅穴住居址で、一辺6.4～7.2 m、深さ10cm を測る。北西壁中央やや北寄りにカマドが取り付け、四壁に沿って周溝がめぐる。支柱穴は4個あり、径30cm、深さ16～20cmで、各々2.5～3 mの間隔を有する。カマドの残り具合は良好で、中央には土師器甕を逆に据え支脚の用に供していた。このSB 6からは、6世紀中頃～後半の土師器・須恵器が出土した。SB 7は北東隅の一部を検出したのみであるが、SB 6と方向が同じである。SB 8は方向が異なり、ほぼ東西方向の北壁を検出した。

出土遺物は整理箱に約50箱ある。鳥羽離宮期のもものではSD 1・SK 2出土の多量の瓦があり、軒瓦も多く含まれていた。土器類では、古墳時代前期の庄内式・布留式に属する土師器、古墳時代後期から飛鳥時代・平安時代前期に属する土師器・須恵器等がある。また扁平片刃石斧・石剣・紡錘車・有孔円盤等の遺物も出土している。

小結 鳥羽離宮期の南側溝SD 1は第39次調査で検出した溝と対となり、南北道路の東側溝の可能性が生じた。平安時代前期の道路状遺構SF 5は自然地形を利用して作られており、平安京へ物資を運搬するための道路として機能していたのであろう。なお古墳時代後期の堅穴住居址を始め各時代の遺物が出土しており、鳥羽離宮期以前の人々の生活跡を知る上で、調査地周辺の調査は今後特に重要となろう。

(鈴木久男・木下保明)



遺構配置図 (1:400)

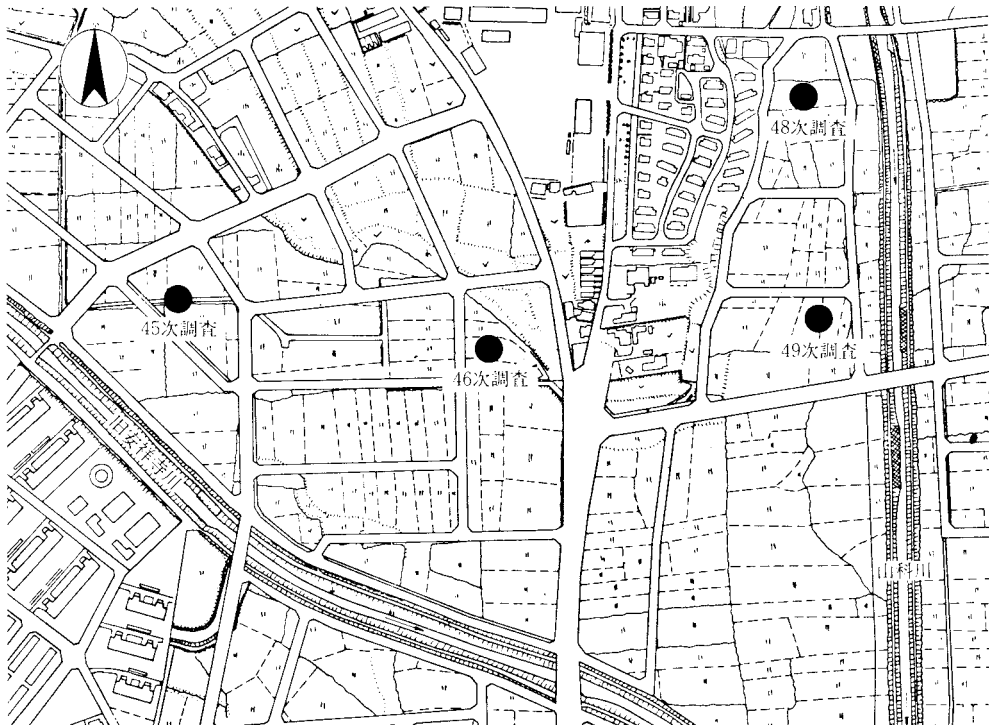
IV 中 臣 遺 跡

中臣遺跡は山科盆地の西南端付近に位置した地点にある。盆地中央部を山科川が北から南に流れ、西寄りに旧安祥寺川が流れる。山科川と旧安祥寺川とは盆地西南端で合流し、遺跡はこの合流点北側の両河川にはさまれるようにして形成された低位段丘および栗栖野丘陵と呼ばれる丘陵上に立地する。その面積は約70万㎡と推定されている。

これまで当遺跡は昭和46年以来継続して発掘調査が行われてきており、縄文時代から平安時代にかけて多くの遺構が検出され、大規模な複合遺跡であることが判明している。

本年度、発掘調査を実施した箇所は45次・46次・48次・49次調査の4ヶ所である。これら4ヶ所は全て栗栖野丘陵を取り巻くようにして形成された低位段丘上に位置している。4ヶ所から得られた主な調査成果は、縄文時代後期の埋甕2、古墳時代前期の竪穴住居址6・竪穴住居址状遺構1・溝1・土壌3、古墳時代後期の竪穴住居址2・掘立柱建物2・溝1、平安時代の掘立総柱建物1・溝2・土壌1などがある。遺物は縄文時代から室町時代までの、断続的ではあるが、土器類が遺物整理箱で16箱出土している。

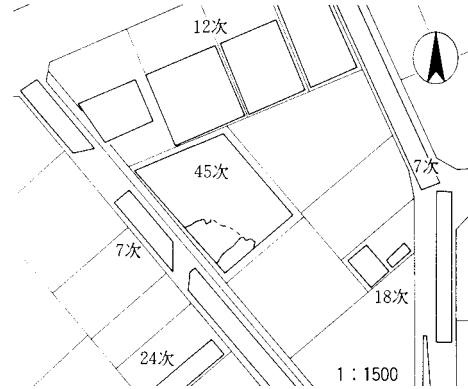
(平方幸雄)



中臣遺跡内調査地位置図 (1:5000)

44 第 45 次 調 査 ㊦

- 1 山科区勤修寺西金ヶ崎町 69
- 2 1981 年 3 月 2 日～3 月 23 日
- 3 457㎡
- 4 ND 85-2 F 31 RT-NK 45
- 5 駐車場整備工事



経過 調査区は栗栖野丘陵と旧安祥寺川にはさまれた低位段丘上に位置する。当該地周辺の宅地および市街化道路部分については昭和 51 年度以降、7 次・12 次・18 次と発掘調査を実施している。その結果、明確な遺構は検出していないが、古墳時代等の遺物包含層を検出している。今回の調査においても、遺物包含層などが予想でき、また調査地点が遺跡の中に占める空間的な位置より考えて、水田遺構等に関する何らかの遺構が予想された。

遺構・遺物 基本層序は耕土層・床土層が 60cm あり、その直下が地山となる。調査区南隅付近では床土層直下より暗茶灰色泥土層（S X 1）が堆積する。

遺構は平安時代の後期～鎌倉時代までに形成されたと考えられる低湿地状遺構（S X 1）、近・現代の暗渠排水溝などがある。

S X 1 は調査区の南西端付近から南に向って調査区外に広がる自然に形成された低湿地遺構である。堆積土は暗茶灰色泥土層で礫はほとんど含んでいない。検出した北肩部の長さは約 14 m である。深さは南に向って次第に深くなり、最深部で検出面より約 30cm ある。なお、最深部付近で若干の自然湧水が認められた。

遺物は主に S X 1 より、弥生土器、古墳時代～鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・瓦などが、遺物整理箱で 1 箱出土した。

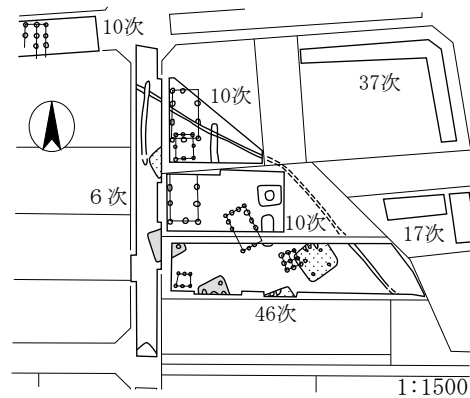
小結 調査区の北西および南東には 3～5 世紀と 6～7 世紀の竪穴住居址および掘立柱建物がグループを形成して展開する。今回の調査地点はこの両グループの中間付近に位置しているが、当該地周辺より、旧安祥寺川に至る地域では竪穴住居址等は検出していない。このことから北西住居址群と東南住居址群との間に広がる非住居地域とみても大きな間違いはないであろう。これまで当該地周辺の調査では用・排水路等の灌漑施設、畦畔など水田耕作に関連する施設は確認していないが、水田等を経営した生産の場と考えることもできる。

（平方幸雄・辻 純一）

45 第 46 次 調 査 ㊦

図版 11 - 1

- 1 山科区勤修寺西金ヶ崎町 55・56 A
- 2 1981 年 4 月 3 日～5 月 19 日
- 3 470m²
- 4 ND 85 - 2 F 43 RT - NK 46
- 5 駐車場整備工事



経過 調査区は栗栖野丘陵西南先端部に接した低位段丘部に位置する。当該地に東接した市街化道路（6次調査）、北接した宅地（10次調査）などで3～4世紀、7～10世紀の竪穴住居址・掘立柱建物・井戸等の遺構を多数検出しており、今回の調査でも当該地の遺構・遺物を検出することが予想された。

遺構・遺物 基本層序は現耕土層（約50cm）・耕土層・床層（約40cm）があり、その直下が地山となる。西隅より東へ5mの範囲に暗茶褐色砂泥層が堆積し、平安時代の遺物を包含する。遺構は全て地山面で検出し、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址2・土壇3・古墳時代後期の竪穴住居址2・掘立柱建物2・平安時代の掘立柱建物1・溝1・土壇1がある。その他に古墳時代後期～平安時代のピット多数がある。

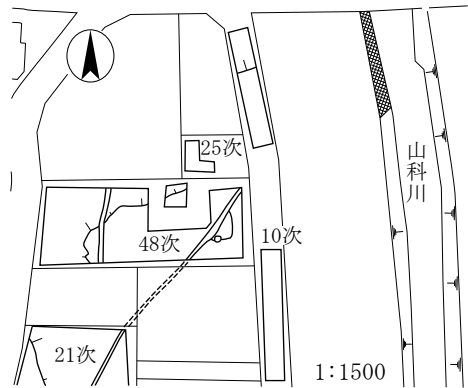
古墳時代前期の竪穴住居址は2戸とも平面形は方形を呈し、一辺が約5.5～6.1mほどの規模である。同後期の竪穴住居址2戸は平面形が方形を呈し、北西壁にカマドを付設している。古墳時代後期の掘立柱建物は3間×5間、1間×2間で、平安時代の建物は2間×2間の総柱建物である。遺物は主に各遺構から出土し、土器類のみが遺物整理箱で9箱出土した。畿内第V様式～庄内式併行の時期のものには壺・甕・鉢・甑・高杯などがある。6世紀後半～7世紀中頃のものには土師器甕・鉢・須恵器杯・灰釉碗・高杯・甗などがある。平安時代のものには土師器甕・鉢・須恵器杯・灰釉碗・緑釉碗などがある。

小結 今回検出した竪穴住居址および古墳時代後期の掘立柱建物は、当調査区より西および南方にかけて展開する3～5世紀・6世紀中頃～7世紀中頃の集落を構成する一群であると考えられる。平安時代の掘立柱建物・土壇等は、当該地に北接する10次調査区で検出した井戸および掘立柱建物などとセットになる遺構と考えられ、10次調査区検出のものを含めて、平安時代における中臣遺跡のあり方の一端を窺い知る遺構群として評価できよう。

（平方幸雄・磯部 勝）

46 第 48 次 調 査 ㊦

- 1 山科区榎辻番所ヶ口町 15 - 3・17 - 3
- 2 1981 年 5 月 20 日～6 月 11 日
- 3 470㎡
- 4 ND 85 - 2 F 25 RT - NK 48
- 5 家屋建築工事



経過 調査区は栗栖野丘陵裾部に低位段丘上に位置し、丘陵部とは比高差約 2 m ほどある。当該地周辺は昭和 51 年以降数次の調査を実施し、縄文時代後期～平安時代の遺構・遺物を検出している。今回の調査においても対象地内に当該時期の遺構等が予想された。

遺構・遺物 基本層序は積土層が 1～1.8 m、耕土層・床土層が約 40cm あり、直下が地山となる。調査区西および北半に縄文時代後期の遺物包含層である黒褐色砂泥混礫層がある。

遺構は黒褐色砂泥混礫層および地山面で検出し、主な遺構に古墳時代前期の竪穴住居址状遺構 1・溝 1・平安時代溝 1 などがある。遺物は縄文土器・土師器・須恵器・石鏃などが遺物整理箱で 2 箱出土した。

小結 栗栖野丘陵が比高差 2 m 程の崩面をなして、低位段丘部に移行する地点に縄文時代の遺物包含層があり、ここより出土した遺物は丘陵部から流下して、埋没したと考えられる。なお、当調査区に東接した市街化道路部分の調査（10 次調査）の際に、今回検出した遺物包含層の延長と考えられる南肩口部を検出している。

現在まで、山科川と栗栖野丘陵には含まれた低位段丘部の調査では縄文時代中期～後期の遺物包含層、後期・晩期の埋甕は検出しているが、まだ量的にも少ない。更に竪穴住居址は未発見の状態であり、当該期の集落、墓域等の展開を知るまでには至っていない。今後の大きな課題である。



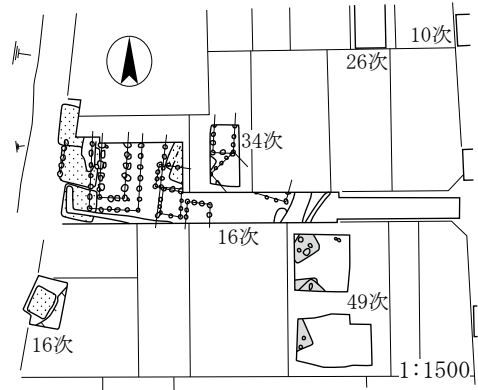
西半部全景(西南から)

(平方幸雄)

47 第 49 次 調 査 ㊦

図版 11 - 2

- 1 山科区榎辻番所ヶ口町 21 - 2, 3
- 2 1981 年 6 月 24 日 ~ 7 月 17 日
- 3 270m²
- 4 ND 85 - 2 F 35・45 RT - NK 49
- 5 家屋新築工事



経過 調査区は山科川と栗栖野丘陵にはさまれた低位段丘部に位置し、山科川まで約 50 m 西の地点にある。調査区に北接した市街化道路は昭和 53 年（16 次調査）に調査している。その調査の際に 6 ~ 7 世紀の竪穴住居址、掘立柱建物、溝等を多数検出している。今回の調査においても竪穴住居址の遺構が予想された。調査区は対象地を南北に分割し、北側を I 区、南側を II 区とした。

遺構・遺物 基本層序は積土層が約 1.8 m あり、耕土・床土層が 20 ~ 30cm で、床土層の直下が地山である。遺構は全て地山面で検出した。主な遺構は、縄文時代後期の埋甕 2、古墳時代前期の竪穴住居址 4、同後期の溝 1 がある。

縄文時代後期の埋甕は、I 区の北東寄りで 2 基を近接した状態で検出した。埋甕は 2 基とも深鉢形土器を使用し、1 基は底部穿孔を、他の 1 基は底部を打ち欠いて、転用したものである。竪穴住居址は 4 戸とも一部もしくは大部分が調査区外にある。その平面形は全て方形を呈し、壁溝を有するものである。I 区の南西端で検出した住居址 2 戸は重複しており、東南側の住居址は北西側の住居址の一部を掘り下げて床面としていた。なお新しい住居址は布留式併行である。

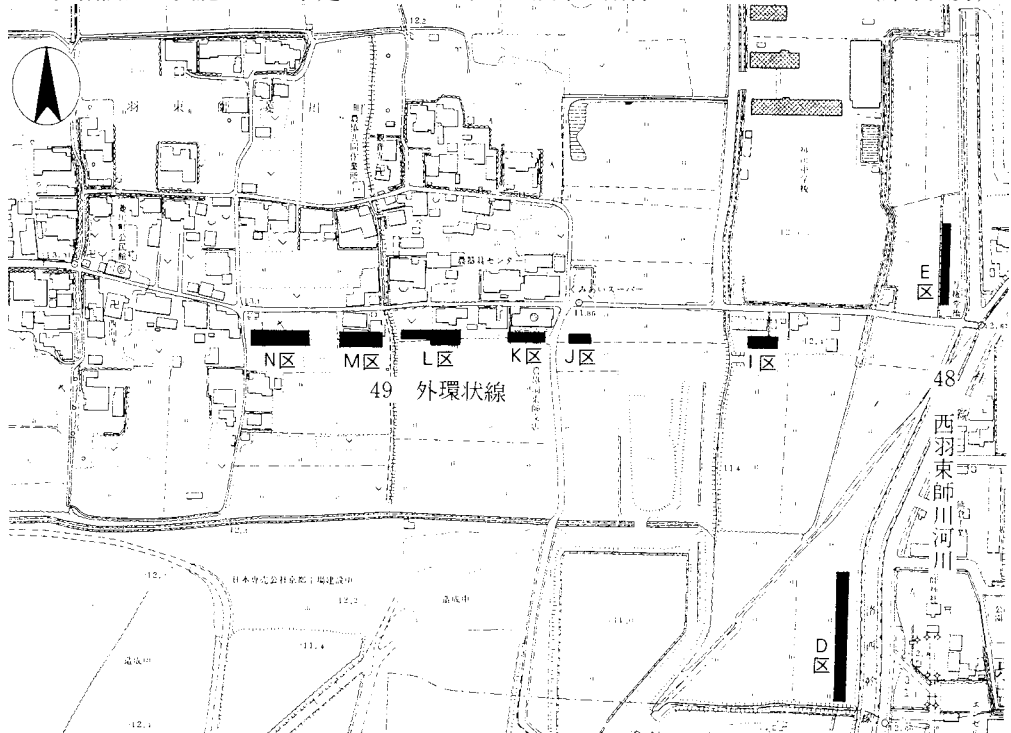
遺物は遺構のみから出土し、縄文土器深鉢、土師器（庄内式～布留式併行）壺・甕・高杯、6 世紀中頃の須恵器杯などが遺物整理箱で 4 箱出土した。

小結 今回の調査で検出した縄文時代後期の埋甕は底部穿孔等の状態から墓址と考えられ、当該時期における墓址としては中臣遺跡で初めて検出したものである。なお、晩期の埋甕は 23 次調査等で検出している。古墳時代前期の竪穴住居址は、庄内式に併行するものが 3 戸、布留式に併行するものが 1 戸である。これまで中臣遺跡では布留式併行の竪穴住居址の調査例（6 次調査など）が少ないため、当該期の様相については不明な点が多く、今後に残された大きな課題である。

（平方幸雄）

V 長岡京跡

昭和56年度長岡京域内で実施した発掘調査は、街路建設事業に伴う調査と西羽東師川河川改修に先立つ調査である。いずれも、昭和55年度より開始した継続調査である。昨年度および今年度実施した街路関係の調査では、長岡京併行期の掘立柱建物・井戸・柵・条坊に關係する溝（推定東三坊大路東側溝）などが検出されている。また、井戸や掘立柱建物などはほぼ一定の間隔をおいて東西方向に検出されており、長岡京内における宅地割りを考える上での貴重な資料が得られている。更にこの調査では、長岡京造営以前の遺構・遺物が各調査区で多数認められている。たとえばC・D・I・J区では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址や溝、古墳時代の流路などが良好な状態で検出されている。街路建設に隣接して実施している河川改修に伴う発掘調査でも長岡京併行期の遺構や弥生時代・古墳時代の遺構も多数認められている。ここ数年来、この付近で実施した発掘調査でも長岡京関係の遺構・遺物が良好な状況で検出されている。昭和57年度も、これら一連の発掘調査が実施される予定となっておりその成果が期待される。（鈴木久男）



長岡京跡内調査位置図 (1 : 5000)

48 左京四条四坊・五条四坊

- 1 伏見区羽束師菱川町
- 2 1981年10月26日～12月17日
- 3 500㎡
- 4 ND 93-4 B 45・F 15・25 81 NG-S D 2
- 5 西羽束師川改修工事

経過 今回の調査は西羽束師川の西岸を拡張する工事に伴うもので、昨年度に引き続いて実施した。昨年度はA区からC区までの調査を終了しており、今年度はD区およびE区についての調査を実施した。D区はA区とB区の間で、羽束師神社の西に位置しており、E区は府道志水西向日停車場線の北に位置している。

遺構・遺物 D区の基本層序は上から耕土層・床土層・黄灰色粘土層・黄褐色粘土層・暗黄灰色粘土層・淡灰色粘土層・黄緑色粘土層・黄灰色粘土層・緑灰色粘土層と続く。

検出した遺構は、鎌倉時代の溝5条、古墳時代の溝1条である。鎌倉時代の溝は、黄緑色粘土層の上面で検出し、いずれも幅約50cm、深さ30cmで南北方向に流れている。これらの溝からは、土師器・瓦器が少量出土した。古墳時代の溝は緑灰色粘土層の上面で検出した。これは幅約10m、深さ約2mで、D区の中央付近において北西方向から南西方向へ湾曲している。この溝からは、土師器の高杯・須恵器の杯・蓋等が出土した。

E区では、江戸時代の湿地状の堆積層を調査区の前面にわたって検出した。ここからは、土師器・須恵器・加工木片等が出土した。

小結 今回は調査区の幅の制限もあって、長岡京期の遺構は全く検出できなかった。また、昨年度調査で見つかった弥生時代末から古墳時代初めの住居址についても、今回は検出することができなかった。しかし、古墳時代の溝を検出したので、当地の旧地形の復原には重要な資料となろう。(吉崎 伸)



D区古墳時代溝 (北西から)

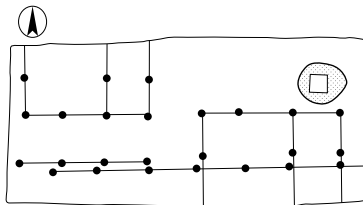
49 左京四条二坊・三坊・四坊

図版 12・13・20

- 1 伏見区羽東師古川町，菱川町
- 2 1981年7月11日～12月28日
- 3 2382㎡
- 4 ND 93 - 4 B 41・42・43・44・51・52・53 81 NG - PV 2
- 5 都市計画街路1・3・46外環状線道路改良工事

経過 昭和55年度より街路建設工事に伴って、長岡京左京四条二坊・三坊・四坊の推定地を東西方向に発掘調査を開始した。今年度は第2次調査年に当たる。昨年度実施した調査では、長岡京併行期の掘立柱建物・柵列・井戸・条坊に関係する溝などが多数検出された。また、下層からは古墳時代の竪穴住居址や流路なども確認されている。これらの遺構からは、各時代の土器・木製品の他に金属製品や銭貨などの遺物が出土している。中でも注目されるのは、土壌内から奈良時代の戸籍断簡が長岡京併行期の土器・木製品などと共に発見されたことである。今年度の調査は、昨年度実施した調査区に隣接して6ヶ所調査区を設定した。その結果、ほとんどの調査区で長岡京併行期の掘立柱建物・柵列・溝・土壙などの遺構が検出された。更に、下層からも弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址や溝、古墳時代から奈良時代にかけての水田遺構も確認することができた。

遺構・遺物 今回の調査で検出した遺構を、以下調査区毎にその概要を述べる。

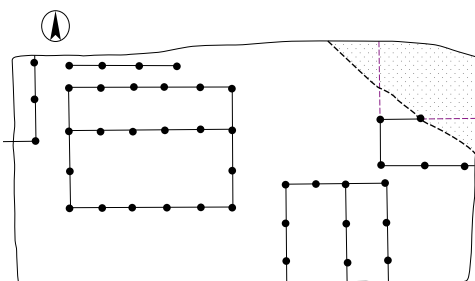


I区遺構配置図 (1:500)

I区 長岡京併行期の遺構は、掘立柱建物2棟、井戸1基、柵2列である。井戸は方形の木組みで、薄い板を数枚重ねあわせて木枠としている。下層からは、弥生時代末の竪穴住居址2棟、古墳時代の流路を確認した。竪穴住居址は円形ではなく多角形を示すものと考えられる。

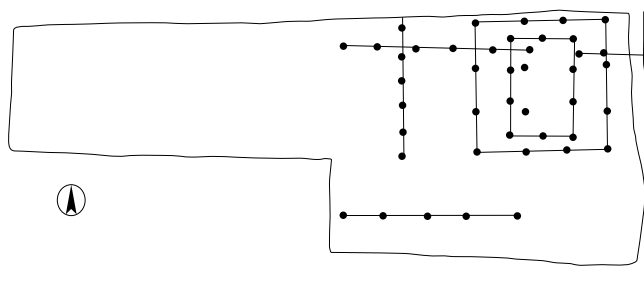
J区 調査区全体が平安時代の流路内に位置したため、長岡京関係の遺構は全く検出されなかった。下層からは、弥生時代末から古墳時代にかけての竪穴住居址1棟、断面がV字状を示す溝を確認した。竪穴住居址は隅丸方形で残存状況も良く、床面には完形の土器や植物で編んだ敷物などが認められた。また、2ヶ所検出した柱穴には、柱痕が遺存していた。柱穴底部には礎板などの施設は認められなかった。

K区 長岡京併行期の遺構は掘立柱建物4棟・柵1列・土塋・溝などである。調査区の北東で検出した建物は、J区で認められた流路によって柱穴が削り取られていた。土塋はいずれも1m以下の規模で、土器・木製品などが多数出土した。溝の中には肩口を板で護岸したものも検出した。これ



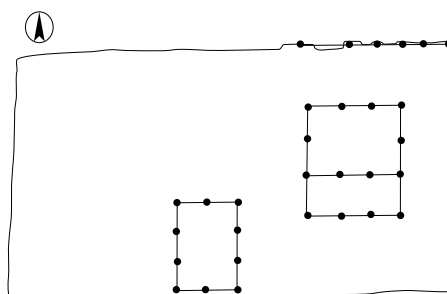
K区遺構配置図 (1:500)

らの下層で古墳時代の水田遺構を検出した。水田面では微砂が詰まった足跡や、低い台形を呈する畦を検出した。



L区遺構配置図 (1:500)

L区 長岡京併行期の掘立柱建物2棟以上・柵4列以上・東西および南北方向の溝を検出した。西側には近世の流路があり、遺構・遺物は全く認められなかった。下層ではK区と似た状況で水田遺構や溝を検出した。



M区遺構配置図 (1:500)

M区 長岡京併行期の掘立柱建物2棟・柵2列以上・土塋などを検出した。南廂を持つ建物は、柱穴内に板を数枚重ねた礎板が認められた。下層で古墳時代の水田遺構を検出した。水田面には多数の足跡と畦を検出することができた。

N区 調査区全体が流路内に位置したため、長岡京併行期の遺構は全く認められなかった。下層遺構も同様であったが、一部東側で水田遺構が遺存していた。

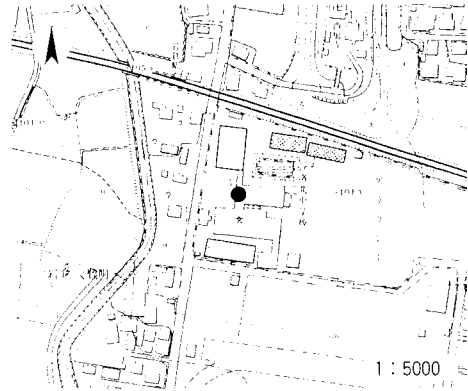
遺物は主にK・L区の土塋や溝から、長岡京併行期の土器・木簡・木製品・金属製品などが出土した。内容は、土師器・須恵器・黒色土器・漆器・銭貨・毛抜・鈴・琥珀など多種にわたる。下層からは弥生時代から古墳時代にかけての壺・甕や木器などが出土した。

小結 今年度の調査区は昨年度の調査区に隣接していたため、各遺構の位置関係や規模をかなり具体的に知ることができた。更に下層からも多種遺構が検出され、長岡京造営以前の実態が徐々に明らかになってきた。(鈴木久男・磯部 勝・辻 純一・吉崎 伸)

VI その他の市内遺跡

50 岩倉忠在地遺跡

- 1 左京区岩倉忠在地町 309
- 2 1981年5月21日～6月7日
- 3 150㎡
- 4 ND 45-1 J 54 81 RH-I T 3
- 5 市立洛北中学校校舎改築



経過 本校内では過去2度にわたって発掘調査が実施されており、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層や中世の井戸が検出されている。今回の調査はその西側に当る。

遺構・遺物 調査の結果、近辺の地山層となっている茶褐色砂泥層が一部認められた他は、大部分が流れ堆積の砂礫層であった。

遺構としては砂礫層の上面で、平安時代中期の溝が1条検出された。溝は東西方向に流れ、幅1～1.5m、深さ10～30cmを測る。埋土は褐色砂礫層であった。

調査区中央付近で認められた砂礫層は、川の氾濫跡と考えられる。肩部は幾度となく削平を受け不明瞭である。上層では平安時代の遺物が、下層では弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土した。

平安時代の遺物は、土師器（皿・甕）、須恵器（杯・壺・甕）、緑釉（椀・皿）等がある。弥生時代後期～古墳時代前期の土器には、壺・甕があるが量は少ない。

小結 今回検出した流れ堆積を示す砂礫層は、調査地の西方約40mを南流する現岩倉川の氾濫に寄るものと思われる。この氾濫によって削平を受けた弥生～古墳時代の遺物包含層を検出し、付近に集落遺跡の存在が想定できるので、今後とも継続した調査が必要となる。

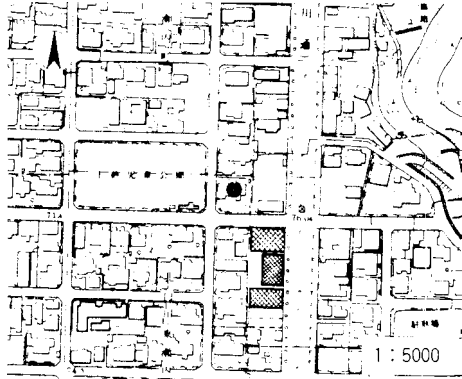


(前田義明)

全景（東から）

51 北白川廃寺 ㊦

- 1 左京区北白川東瀬ノ内町 43
- 2 1981年8月5日～8月22日
- 3 160㎡
- 4 ND 55-3 G 42・43 81 K S-I W
- 5 家屋岩崎邸新築工事



経過 調査地は北白川廃寺の北限付近に当り、また縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物の検出が予想される場所であった。試掘調査を実施した結果、地下遺構の存在が確認されたので、南北10m、東西15mのトレンチを設定し調査した。

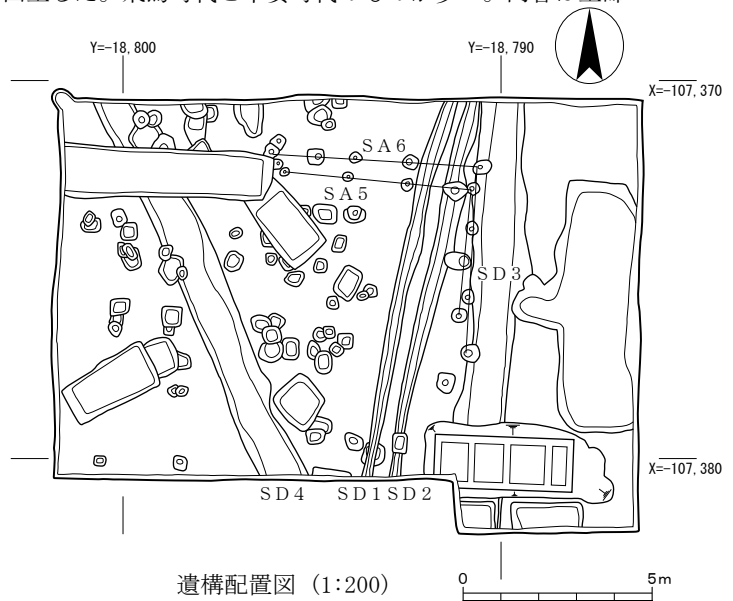
遺構・遺物 基本層序は上から現代盛土層、灰色砂層（中世の包含層）、黄褐色砂層（遺構面となる層）、茶灰色砂層（縄文～弥生時代の包含層）となり、以下、無遺物層である青灰色砂層、褐灰色砂層と続く。

検出した遺構は溝4条・柵2列・土壇・柱穴多数である。SD1・2は北で東に振れ、約1m間隔で平行して走る。SD3・4は溝幅がやや広い。SD4は北で西へ30°振れる。SA5・6は現状で柵列と考えた建物の可能性もある。

遺物はSD3を中心に3箱分出土した。飛鳥時代と平安時代のものが多い。内容は土師器・須恵器・灰釉・瓦器・陶器・軒丸瓦・平瓦・丸瓦等がある。また、縄文・弥生土器もある。

小結 今回の調査では、寺域の北限確認を主な目的として実施したが、溝や柱穴を検出するにとどまった。ただし、SD4の方位は、金堂基壇下層の掘立柱建物と同様であるので、今後一帯の計画的な調査、保存対策が急がれる。

(辻 純一)

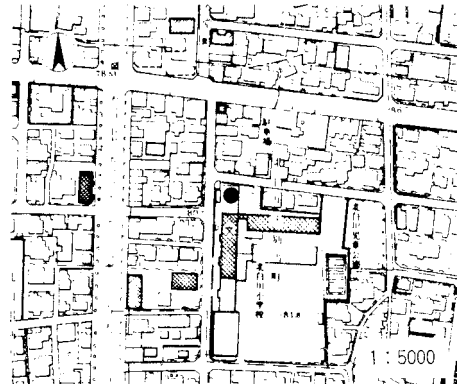


遺構配置図 (1:200)

52 小倉町別当町遺跡

図版 14 - 1

- 1 左京区北白川別当町 10
- 2 1982年3月1日～4月17日
- 3 150㎡
- 4 ND 55-3 K 24 81 K S - K B
- 5 市立北白川小学校校舎建設



経過 調査区は北白川扇状地を見おろす丘陵の緩斜面、先端部付近に立地し、標高は約 81 mを測る。当該地周辺は縄文時代の小倉町別当町遺跡に当り、また北方約 100 mの地点には奈良時代前期頃に建設された北白川廃寺がある。なお、1980年度に北白川廃寺の発掘調査を実施した際に、下層遺構として6～7世紀の掘立柱建物が発出されている。今回、調査を着手するに当り、縄文時代の遺構・遺物等の確認および北白川廃寺に関連する遺構等の追求を調査の主目的とした。調査は校舎改築部分を対象に東西 11 m×南北 14 mの範囲で調査区を設定し、3月1日より開始した。

遺構・遺物 基本層序は積土層・耕土層・暗茶褐色泥砂層・暗黄灰色微砂層・黒灰色粗砂層・黄色粗砂層（地山）である。黒灰色粗砂層中より少量の縄文土器（後期）が出土した。

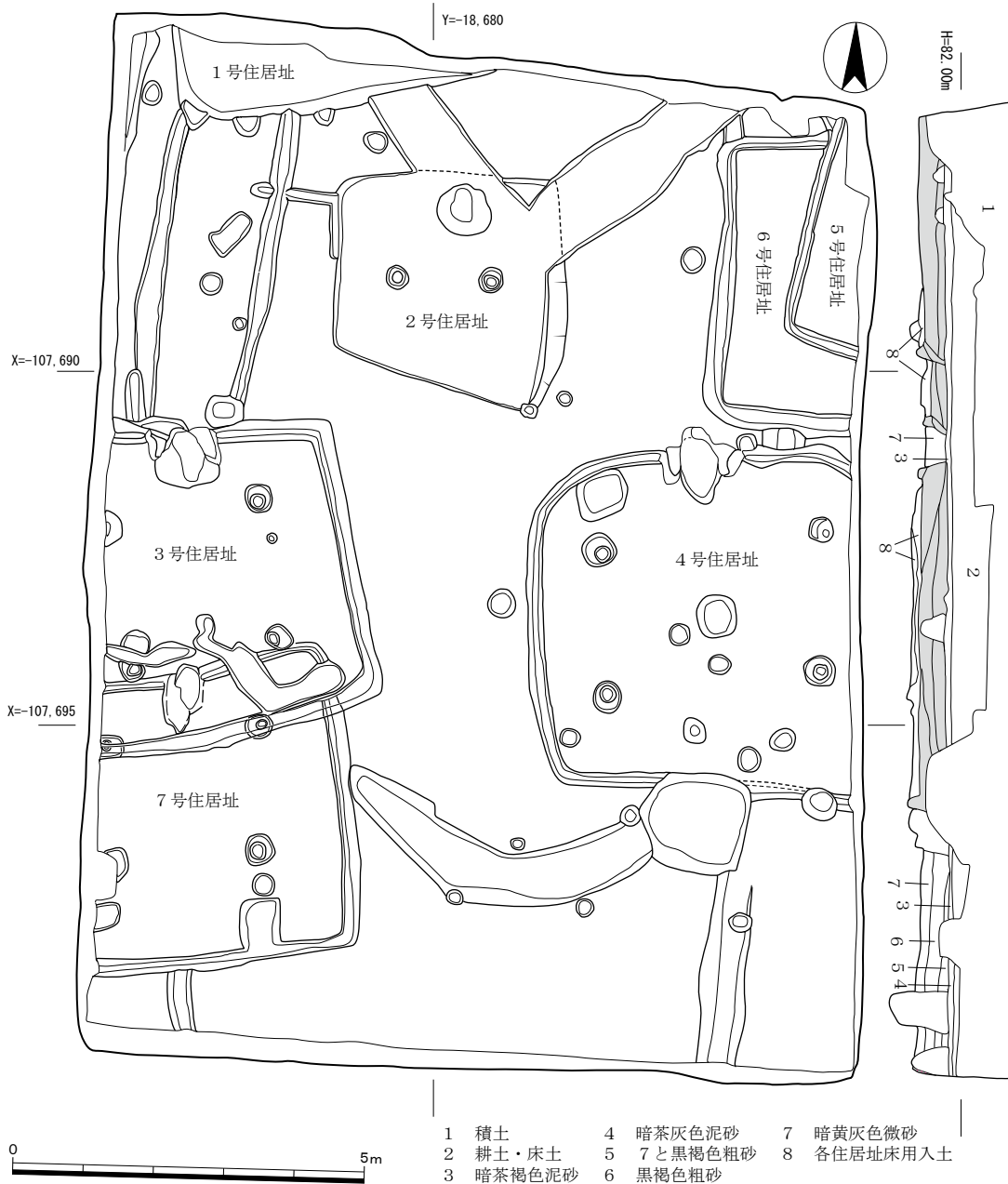
検出した遺構は、縄文時代晩期以降の河川 1、6世紀中頃～7世紀中頃の竪穴住居址 7・掘立柱建物 3、近世の溝・ピットなどがある。

河川は調査区の南端で検出し、幅 4 m、深さ 1.5 mある。竪穴住居址は調査区内で 2号住居址のみ完掘し、他は一部もしくは大部分が調査区外にある。竪穴住居址の平面形は全て方形と考えられるが、2号住居址のみが若干台形状を呈している。住居址の床面での規模は2号住居址のみ 2.8 m×2.45 mと小さく、他は一辺が 3.5～4.3 mで、4号住居址が最も大きい。支柱穴は2号住居址のみ 2カ所で、他は 4カ所ある。2・3・4・7号住居址のカマドは全て北壁に付設されている。なお、2号住居址のカマドは袖部等が攪乱で削平され、焚口部のみを検出した。竪穴住居址と掘立柱建物の時間的先後関係は切り合い等により、掘立柱建物の方がやや先行すると考えられる。

遺物は縄文土器、6世紀中頃～7世紀中頃の土師器・須恵器等が整理箱で 12箱出土した。

小結 縄文時代の遺物包含層（黒灰色粗砂層）は調査区全面にあり、当該地が小倉町別当町遺跡の一部であることを確認した。6～7世紀の集落については、その性格として峰

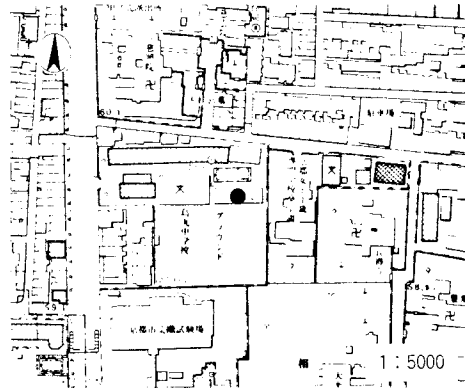
岡寺と常盤仲之町遺跡、北野廃寺と北野遺跡などのように、北白川廃寺を建立した勢力と関連する集団の集落と想定できないであろうか。いずれにせよ、集落の範囲・構成等不明な点が多く、周辺部の今後の調査が待望される。
 (平方幸雄・吉崎 伸)



遺構実測図(1:100)

53 相国寺旧境内

- 1 上京区烏丸通上立売上ル相国寺門前町
647-23
- 2 1981年4月21日～5月26日
- 3 215㎡
- 4 ND 54-4 E 55 81 RH-KC
- 5 市立烏丸中学校校舎改築



経過 調査地は、烏丸中学校校地の北東部に当り、現相国寺境内の北西に位置する。調査は、校舎改築の範囲と同規模の東西 20.5 m、南北 10.5 m の調査区を設けた。烏丸中学校の敷地は、相国寺旧境内の北西部を占め、寛政 11 年の古絵図によると雲興軒の敷地に当り、これに関連する遺構の存在が予想された。

遺構・遺物 基本層序は現校舎建設の際の盛土層、褐色混礫泥砂層、暗灰褐色混礫泥砂層、灰茶色混小礫砂泥層、淡灰色砂礫層、灰色砂礫層となる。灰茶色混小礫砂泥層上面には、一部焼土の堆積が薄く認められる。灰色砂礫層より下は砂と砂礫の互層の堆積がみられ磨滅した土器小片が少量出土する。室町時代の遺構は灰色砂礫層の上面で確認した。

石列状の遺構（S B 1）は、調査区東部で南北方向に 10 m 程検出した。西端の河原石は、長軸を東西方向にそろえて規則的に配置しているのに対し、東側の河原石は径は小さく不規則でまばらになる。このため S B 1 は雨落ち溝ではなく、建物基壇の外装と考えられる。方向は、真北より東へ約 4° 振れる。基壇部に明瞭な版築は認められない。S B 2 は、石列状遺構の東側にて検出した南北方向 4 間以上の遺構である。柱間寸法は約 2.05 m（6.8 尺）等間で、柱の掘形は、径 40cm 前後、深さ 50cm の楕円形を呈する。S B 2 の方位はほぼ真北を示し、S B 1 と異なり、別遺構と考えられる。柱穴の埋土には、焼土・炭化物が混じるものが多く、また重複した柱穴も認められるため、建て替えの可能性もある。

S K 3 は調査区の中央西側で確認した。平面は、南北約 3 m、東西 1.5 m の不整形な土壙で、深さは東側が 15cm、西側は 50cm 前後と西側は一段低くなっている。土壙の東側から東壁にかけて焼けた痕跡があり、埋土中から焼土・炭化物・ルツボ・鉄滓が出土することから野鍛冶に関連する遺構ではないかと考えられる。S K 4・5 は、S K 3 の南東、調査区の中央南側で確認した。一辺 3 m 以上を測り、深さは両方とも 40cm 程である。底

は平坦で底部近くから多量の拳大の礫の堆積が認められた。この他SK3周辺およびSB1付近にても多数の土壌状遺構を検出した。SK7～9よりまとまった土器、SK6より多量の瓦が出土する他は遺物の出土はない。これらはいずれも小規模で、楕円形を呈し浅く、焼土や炭化物を含んでいることは共通の特徴といえよう。なお調査区西部、近世南北溝の東側では灰色砂礫層の上面に、やや厚く灰黄色泥土層が周囲より一段高くて南北方向に続いていることから、築地状の遺構と考えられる。

遺物は、瓦・土器・陶磁器・鉄製品などがある。瓦は最も多く、丸瓦・平瓦の破片がそのうちのほとんどであるが、軒丸瓦・軒平瓦・塀が少量出土した。土器は土師器が最も多く、瓦器・須恵質の陶器なども出土している。特にSK7～9からは室町時代のものがまとまって出土している。

小結 以上、確認した遺構は、石列状遺構（SB1）・SB2・集石遺構・土壌などがあり、時期も室町時代に限定される。これらの遺構は、その重複関係より室町時代を更に細分でき、複雑に変遷して行ったことが窺える。特に、石列状遺構（SB1）は建物基壇外装施設と考えられ、主要建物の存在を明らかにできたことは注目すべきことである。

古絵図によると調査区付近は雲興軒という寺院が所在したところで、検出した遺構も雲興軒に関連するものと考えられる。雲興軒は文献によると永享年間に宝山乾珍が開祖し、応仁の乱、天文20年などの火災が重なり、その度毎に再建が行われたと思われる。今調査で検出した遺構群は同一平面で確認したもので、火災の時期と遺構の時期がどのように合致するかは、遺構の重複関係、各遺構からの出土土器等のより詳細な検討が必要である。

なお、今調査においては、室町時代以前の遺構には明確なものはなく、旧流路と思われる流れ堆積層の確認にとどまったが、旧流路の範囲およびその時期、そして、同志社校地内で確認されている室町時代以前の遺構との関連など今後の課題といえよう。



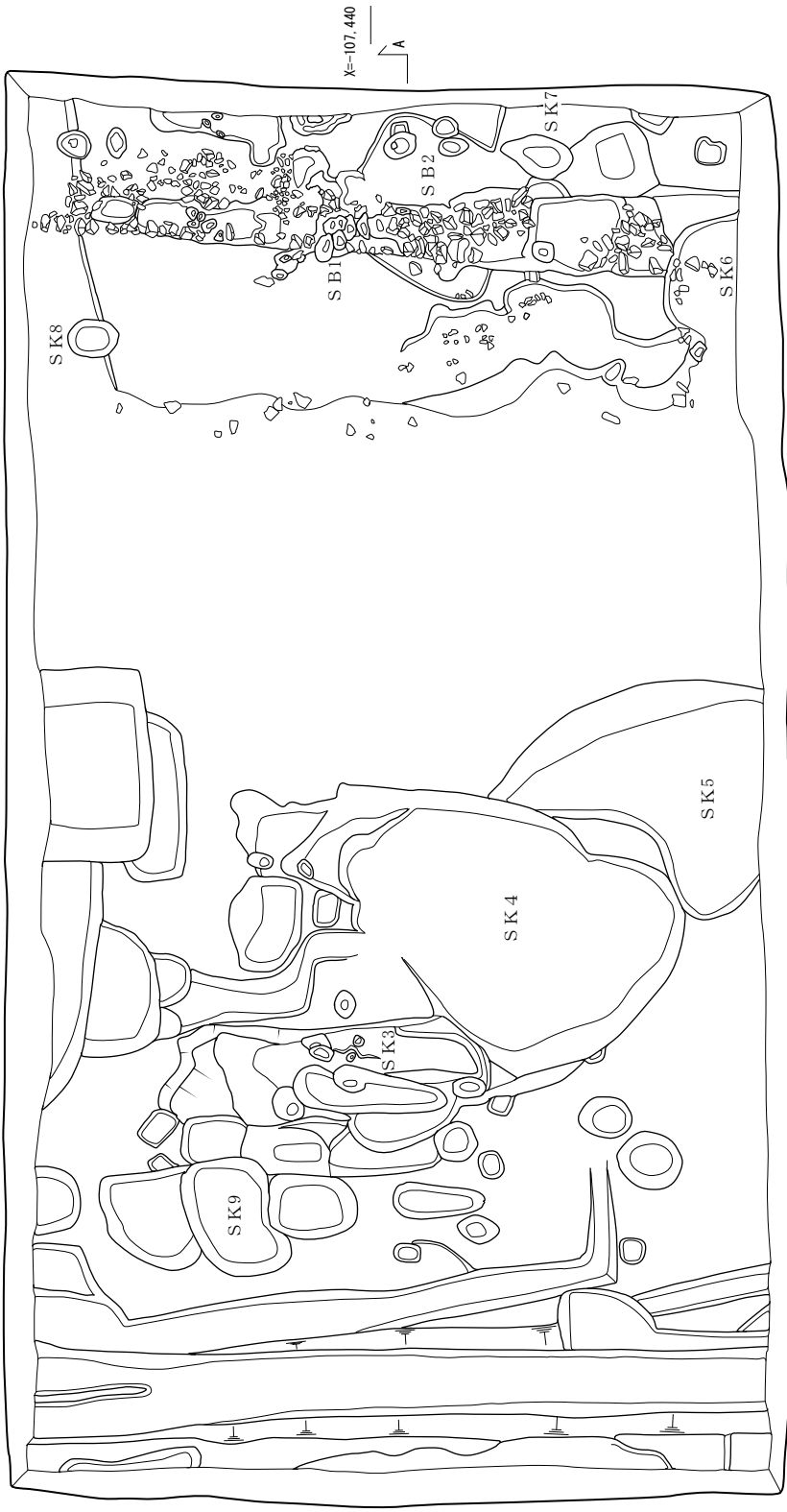
(堀内明博)

全景（東から）

Y=21,600

s56h 083-1

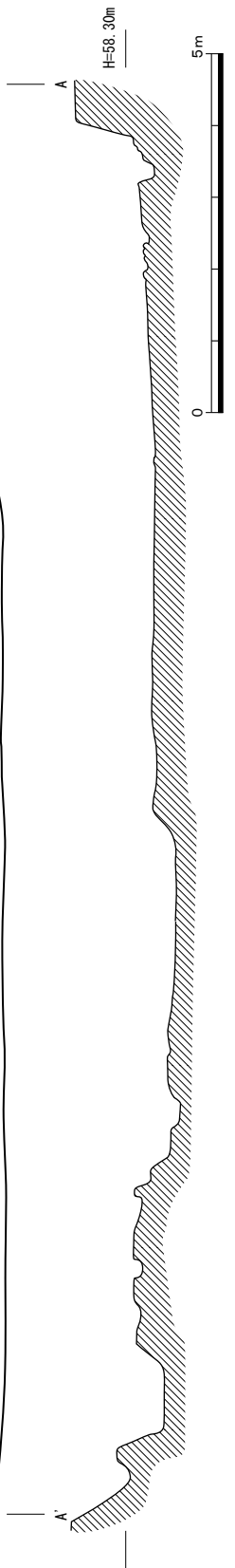
Y=21,580



X=-107,440

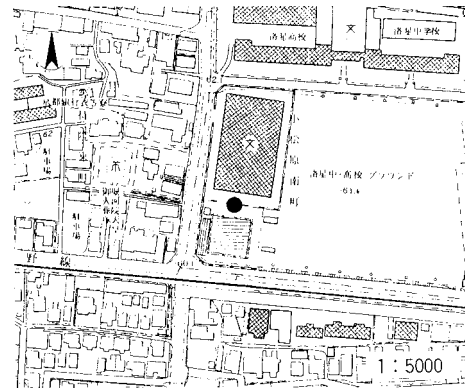


遺構実測図(1:100)



54 北野遺跡

- 1 北区小松原南町 43
- 2 1981年4月20日～5月11日
- 3 165㎡
- 4 ND 63-2C 25 81 RH-KN
- 5 ヴィアートル学園校舎増築工事



経過 調査地は推定北野廃寺の北西 300 m に位置している。北野廃寺は発掘調査・立会調査によって古墳時代前期から中世までの遺構・遺物が検出されている。また、調査地の西 70 m の所に堀河院天皇御火葬塚がある。

遺構・遺物 調査はL字型の校舎予定地に対し、東西の校舎部分に調査区を設定し、グラウンドの盛土層(1.5m)を機械によって排除した後開始した。調査の結果、室町時代の井戸・土壇・近代の流路が検出された。旧耕土層を除去すると、地山の茶褐色粘質土層・黄褐色砂礫層が広がり、遺構が検出される。井戸は直径が1.7m、深さ1.6mの円形の素掘りで、井戸枠は認められない。近世の土壇には、播鉢状を呈しそれを囲んで溝がまわるものがあり、植木の痕跡と思われる。

そして明治20年の地図に認められる南北方向の流路が調査区の東部で見つかった。東岸は調査区外に当り、流路の幅は不明である。遺物は室町時代のものがほとんどで、土師器・陶器・輸入陶磁器・瓦器・瓦が少量ずつ出土している。

小結 今回の調査では、室町時代の遺構が検出され、北野廃寺の発掘調査で見つかっている中世の集落が、調査地周辺まで広がっていることを示していると思われる。しかし、それ以前の遺構・遺物は確認していない。
(前田義明)

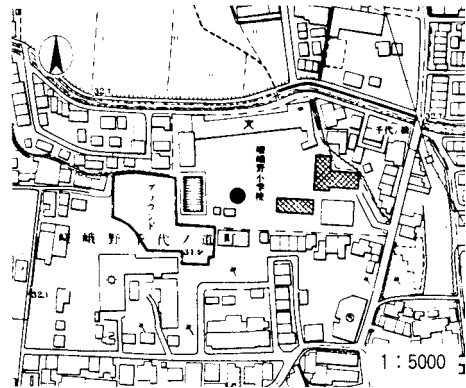


全 景 (東から)

55 嵯峨野小学校内遺跡

図版 14 - 2

- 1 右京区嵯峨野千代ノ道町 53
- 2 1982年1月28日～4月3日
- 3 569㎡
- 4 ND 63 - 3 B 51 81 U Z - S A
- 5 市立嵯峨野小学校校舎新築工事



経過 当該地は、秦氏にゆかりの深い太秦広隆寺の南西約1 kmの位置にあり、蛇塚、千代ノ道古墳や西野町遺跡（奈良～平安時代）に隣接しているが、明確には遺跡指定範囲に含まれていない。しかし、当研究所が1980年に当該地の約500 m北方にある周知の遺跡外の峰ヶ岡中学校で行った発掘調査で、古墳時代の竪穴住居址などが発見された例があるため、当該地も遺跡の有無を確認する試掘調査を行った。その結果、柱穴群および竪穴住居址と考えられる遺構を検出したことから、試掘調査に引き続き発掘調査を実施することとなった。発掘調査の調査区を、東西約32 m、南北約17 mの方形に設定したが、調査の必要上遺構の集中する東南部を拡張したため不揃いな形になっている。重機による盛土層の排除ののち、4時期3面にわたる遺構面で検出した遺構の平面、断面図の実測、写真撮影などを行い発掘調査を終了した。

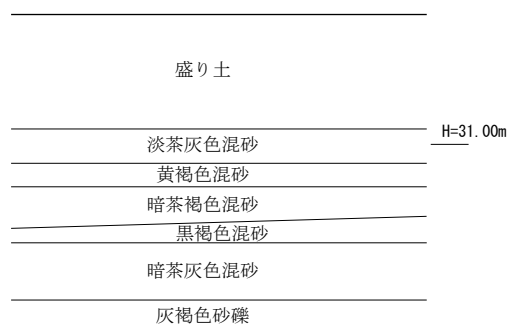
遺構・遺物 調査地の基本的な土層堆積状況は、盛土層および旧耕土層が現地表下約80cmまでみられる。旧耕土層の直下は、鎌倉～室町時代の遺物包含層の淡茶灰色泥砂層が約10cmの厚さで堆積する。同層上で検出した遺構は、江戸時代の溝・土塋、室町時代の土塋などである。この層を掘り下げると、厚さ約15cmの平安時代の遺物包含層である黄褐色泥砂層がみられる。同層上で、同様の規模を持つ2条の南北溝（長さ20cm以上、幅約30cm、深さ20～40cm）および土塋・柱穴などを検出した。いずれの遺構も平安時代の遺物が出土している。この層の下には厚さ10～30cmの遺物のまったく含まない暗茶褐色泥砂層がみられる。同層上で検出した遺構は、古墳時代の竪穴住居址・溝・土塋・柱穴等であった。暗茶褐色泥砂層以下は、黒褐色泥砂層・暗茶灰色泥砂層・灰褐色砂礫層と堆積するが、これらの土層上に成立する遺構は認められず、また何らの遺物も出土しなかった。

次に古墳時代の遺構について概略を記す。この時期の竪穴住居址は総計5棟を検出した。

そのうち全体の規模を確認できたのは1棟だけである。他の4棟は、西辺の壁溝のみの1棟を除き、残存状態から規模、形状などが推定できる。いずれも形状は方形から隅丸方形をなすが、大きさで2種（1辺4m前後と7.5～8m）に分かれる。1辺4m前後の小型の竪穴住居址は2棟あり、共に壁溝を持つ。1棟は柱穴4ヶ所、北辺中央に竈、北東隅に貯蔵穴を確認した。もう1棟は柱穴2ヶ所、西辺中央に竈らしき痕跡を確認した。また2棟の小型住居址を分割するように、北東から南西に流れる幅40cm、深さ20～40cmの溝を認めた。これらの遺構は出土遺物から古墳時代後期に属すると考えている。1辺7.5～8mの大型の竪穴住居址は2棟で、共に壁溝は認めたが、竈・貯蔵穴などの施設は検出できなかった。1棟には柱穴3ヶ所を認めたが、もう1棟には小さな柱穴が数多くみられたのみである。これら2棟の竪穴住居址の平面的な重複関係および出土した遺物から、小型の住居址と溝が大型の住居址より成立時期が新しいことを確認している。大型の住居址は出土遺物の残存状態が悪く、また整理作業も終了していないので、ここでは時期比定を保留したい。その他に、円形・方形の柱穴を大小各種100個以上検出したが、掘立柱の建物としてまとめることはできなかった。これらの柱穴のうちのいくつかは、竪穴住居址の埋没後に成立していることを確認した。

出土した遺物は、鎌倉～江戸時代には、土師器・須恵器・瓦器・六古窯系陶器・染付・輸入陶磁器・瓦がみられる。平安時代には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦がみられる。古墳時代には、土師器・須恵器がみられる。また大型の竪穴住居址から石鎌・石包丁などの石器を破損した状態で検出している。

小結 京都市北西部の双ヶ岡から嵯峨野にかけての一带は、各時期の遺跡の残存状況が良好であることが明らかになってきている。中でも古墳時代の遺跡は、当研究所が行った数回の発掘調査および立会調査において集落跡、古墳群などを検出しており、今回の成果を含めて平安京遷都以前の京都を知る良好な資料となっている。しかし、平安京に比べ遺跡指定範囲の限られている同地域は、遺跡範囲が広域にわたると予想されるにもかかわらず、発掘調査などを実施する機会が極めて少なく、また常に都市再開発などの工事により、未知の遺跡が破壊の危険にさらされていることを今後の問題としてあげておきたい。



(鈴木廣司)

土層断面模式図 (1:40)

56 六波羅政庁跡

- 1 東山区大和太路東入ル2丁目
- 2 1981年8月22日～9月6日
- 3 52.5㎡
- 4 ND 74 - 2 H 11 81 RT - RM
- 5 六波羅蜜寺境内御堂新築工事



経過 調査区は六波羅蜜寺境内の北東隅に位置する。本堂の解体修理の折に調査（1966年）が実施され、泥塔が7000点以上、その他瓦類多数が出土している。今回の調査区はその本堂の北東に近接している。

遺構・遺物 調査の結果、平安時代末期の土壇・ピットと、古墳時代前期・平安時代後期の遺物包含層が検出された。土壇は、大きさ3.3m×2.1m、深さ10cmの楕円形を呈し多量の土師器皿が出土した。ピットは3個みられ柱穴らしい形状を示しているが、調査面積が狭小なため建物の詳細は不明である。古墳時代前期の包含層は、南西部の一段下る部分に認められ黒色粘土を呈しているため、湿地か流路が想定される。平安時代後期の包含層は整地層と思われ、南西から北東へ傾斜している。

遺物は古式土師器・円筒埴輪・土師器・須恵器・緑釉陶器・輸入陶磁器・瓦器・瓦等があり、土師器皿が大半を占める。円筒埴輪の破片は、平安時代後期の包含層より出土した。

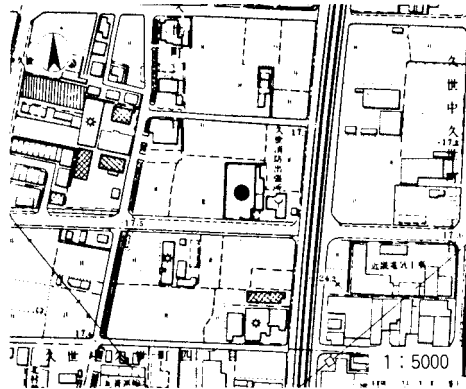
小結 今回の調査では土壇やピットと良好な遺物包含層が見つかったが、調査面積が狭小なため、六波羅政庁跡に関連する遺構は明確にはできなかった。古式土師器や円筒埴輪が出土したこと等を考慮すると、近辺に集落跡や古墳の存在も十分に考えられ、これからの付近一帯の発掘調査が期待される。（前田義明）



全 景（東から）

57 中久世遺跡 ㊦

- 1 南区久世中久世町2丁目131
- 2 1981年7月6日～8月6日
- 3 220㎡
- 4 ND 83-4A 32 81 MK-KR
- 5 マンション建築工事



経過 当調査地では（仮称）上田マンション建築の計画があったため、工事に先立って1981年5月26日に試掘調査を実施した。

当該地で調査区3ヶ所を設定した。その結果、弥生時代中期～長岡京時代にわたる、遺物包含層および土壌を検出。調査区全面にわたっており、遺存状態は良好であった。また当遺構内で実施していた公共下水道に伴う立会調査によっても河川遺構を発見しており、その延長部であることが想定されたため、発掘調査の必要性が考慮された。

遺構・遺物 今回の調査で検出した遺物は、弥生時代から平安時代にかけて流れていた河川、弥生時代～古墳時代の土壌、平安時代初期以降の柱穴群等である。

河川 調査区面積の約6割が河川で占められていた。緑灰色砂泥層（床土）を排土した面で黄褐色泥砂（地山）と暗褐色砂泥（河川内堆積土）のラインが北東方向から南西方向に向って検出された。西肩部は調査区内に位置するが、東肩部は東未調査区に位置すると考えられ、河幅は不明である。河川は断面の観察の結果から5～6次にわたって流れを変え、当初はほぼ北東方向から南東方向に湾曲しながら流れていたものが、次第に西に振れ、北東方向から南西方向に流れるようになり、河川の幅も広がった。河川の時期は堆積土層内出土遺物によって、弥生時代中期・後期、古墳時代中期・後期・末期、奈良時代後期～平安時代初期、平安時代前期に時期区分できた。

土壌 弥生時代中期の土壌4基と古墳時代後期の土壌32基を検出した。弥生時代の土壌は調査区北部で検出したが、各土壌とも切り合っている。完形土器が数個出土したが、遺存状態は極めて悪いものが多い。古墳時代後期の土壌は河川の西肩部分で集中して検出されたが、上面を奈良時代後期～平安時代初期の流れによって削り取られている。

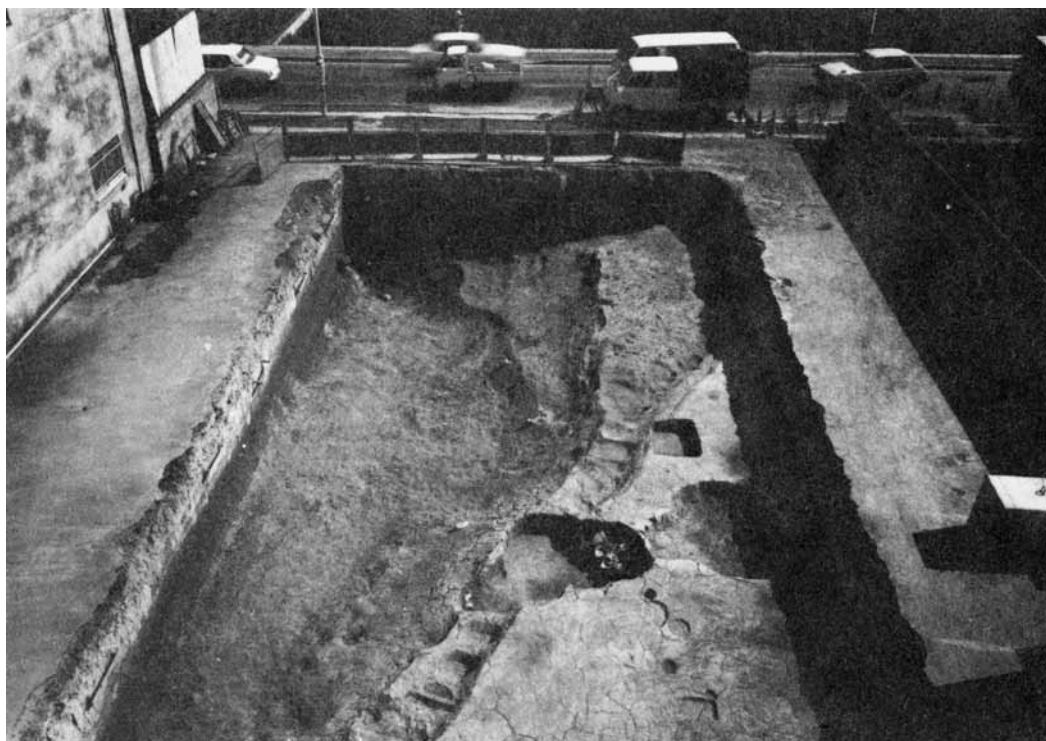
遺物 出土総量の大半を占めるのが土器類であり、石器類も多い。その他に瓦・土製品・

木製品など各種の遺物も出土している。これらの遺物を時代別にみると弥生時代中期のものが圧倒的に多く、古墳時代後期、奈良時代後期から平安時代前期のものも多く、古墳時代中期の遺物も出土している。その他弥生時代終末期から古墳時代前期のものも若干あるが詳細を知るには至らない。

小結 遺構・遺物の概略を述べてきたが、その成果をいくつかまとめて結びとしたい。

まず第一に、調査地で検出された河川は北東から南西にかけての方向を持つ流路であることを確認したが、これは全体では蛇行しながら北西から南東に向っており、桂川に向かって流れていたものであることが調査によって判明した。河幅は約 30 m 程であろうと推定される。

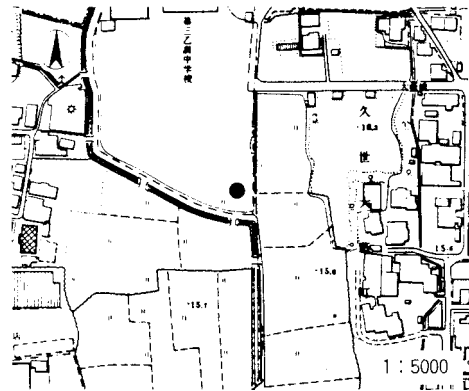
次に、包含する遺物は質・量ともに豊富であり、弥生時代中期から平安時代前期までほぼ層序毎に出土が認められた。又それらの遺物の摩滅度が少ないところからも、調査地の近辺には集落跡の存在も十分に考えられよう。 (久世康博)



全 景 (北から)

58 大藪遺跡

- 1 南区久世殿城町 481
- 2 1981年8月11日～8月19日
- 3 180㎡
- 4 ND 83 - 4 F 32 81 MK - OD 2
- 5 第三乙訓中学校屋外プール建設工事



経過 第三乙訓中学校内に屋外プールが建設されることになった。当該地は大藪遺跡の北西部に位置し、中久世遺跡と隣接する地点であるため工事に先だって発掘調査を実施することになった。調査期間等について学校側と協議の結果、まず試掘を行い、遺跡の有無、広がりを確認し、遺構の残存状況の結果をみて前面発掘を行うこととした。調査は8月11日より3ヶ所（延べ180㎡）に試掘トレンチを設定し、重機により積土層および耕土層を除去し遺構検出を始めた。調査の進行に従って、写真撮影、平・断面実測・平板実測等で記録をし、8月19日に全調査を終了した。

遺構・遺物 基本層序は、学校建設時における整地層（約120cm）、以下、耕土層、床土層（約40cm）・淡黄灰色砂泥層（約5cm）・暗青灰色泥土層（約25cm）・暗灰色泥砂層（約20cm）・黒灰色泥土層（約40cm）・青灰色砂泥層（約25cm）・青灰色砂礫層の堆積を示す。淡黄灰色砂泥層は出土遺物（土師器・須恵器・瓦）から、長岡京時代の遺物包含層である。以下の各堆積土層からは弥生～古墳時代の遺物と共に多くの自然木片等が出土しており、長岡京以前の流路、あるいは沼地状の遺構と推定できる。青灰色砂礫層からは遺物の出土は認められなかった。今回の調査で検出した遺構は、学校建設前の水田に伴う暗渠（近代）と弥生～古墳時代の流路状遺構だけであり、他の遺構は確認できなかった。出土遺物は小遺物袋で3袋にとどまった。これらは淡黄灰色砂泥層より出土した須恵器・土師器・平瓦が大半を占め、弥生～古墳時代の流路からの出土遺物は少量であった。

小結 今回の調査では弥生～古墳時代の流路しか検出できなかったが、過去、大藪遺跡内における発掘調査（当研究所3回、六勝寺研究会2回、長岡京跡発掘調査研究所2回）では、弥生～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、今後共周辺地においては発掘調査を行うことが必要である。（磯部 勝）

Ⅶ ま と め

昭和56年度に当研究所では、平安京跡34件・白河街区跡4件・鳥羽離宮跡5件・中臣遺跡4件・長岡京跡2件・その他の市内遺跡9件の合計58ヶ所で発掘調査を実施した。これらの調査で得られた成果は多岐にわたる。すでに、白河・鳥羽・中臣・長岡の各遺跡については、各報告の冒頭部分で調査成果を簡単にまとめているので、ここでは平安京跡関係の調査によって得られた成果を中心に一応のまとめを記す。

平安京跡関係の調査は34件ある。うち4件は宮内を対象に実施した調査であったが、いずれも中・近世の攪乱が著しく、宮関係の遺構は検出することはできなかった。

平安京左京を対象とする調査は15件である。平安京の左京は古く「洛陽城」と称し、京都一千年の都の舞台であった結果、各時代の遺構は複雑に重複することが最近の調査で明らかになってきた。本年度においても、左京二条二坊（9＝報告番号）・二条四坊（10）・三条二坊（12）・四条二坊（13）・五条三坊（14・15）等の調査でこうした遺跡の状態を確認した。これらの遺跡では、平安時代から現代に至る間の遺構が連綿と形成されており、平安京跡の調査というより、むしろ中・近世の京都を調査するという内容となる。しかも、現地表下約2m程でようやく無遺物層に達するので、単位面積にかかる労働投下率は著しく高い。このような中で、左京三条二坊高陽院跡（8）では極めて残りの良い庭園遺構を検出し、地点によっては平安時代の遺構が良好に遺存する例を明らかにした。高陽院は代表的な寝殿造建築を有し、史料にも頻出する。また、その姿は絵巻物にもみることができる。今回その中の庭園部分を一部検出したことは、単に庭園史の研究分野に資料を提示するにとどまらず、広く一般にいにしえの優雅な貴族生活を彷彿させる格好の資料となるであろう。

平安京右京で実施した調査も左京同様15件ある。右京は左京に比べ早く衰退する。この結果、左京程遺構の切り合いがなく、むしろ平安時代の建物遺構が良好に遺存することが近年の調査で明らかになってきた。本年度においても、右京一条三坊（22）・二条三坊（26）・三条二坊（27）・三条三坊（29）・五条三坊（30）・六条三坊（31）等の調査でこうした状態を確認した。たとえば右京三条二坊（27）では、建物・柵・溝・井戸がまとまりある配置を示し、柵や溝は町内の宅地割りを予想させる位置で検出されている。

さて、本年度も平安京の条坊に関係する遺構（大・小路）を相次いで検出した。このうち、路面そのものや、あるいは両側溝を検出し、道路であることが確認できる例としては、

左京二条四坊（10）の富小路，六条三坊（17）の六条大路，右京三条二坊（28）の押小路，八条二坊（33・34）の七条大路等がある。また，側溝を一部確認したものとしては，左京二条三坊（9）の二条大路（北），猪隈小路（東），三条一坊（11）の朱雀大路（東），三条二坊（12）の姉小路（北），六条二坊（16）の六条坊門小路（南），右京北辺三坊（21）の恵止利小路（東），二条三坊（26）の春日小路（北），三条三坊（29）の道祖大路（西）等がある。これら道路の検出によって得られる成果は，平安京の条坊復原にとって基礎資料とも言うべき貴重なものである。当研究所では，近年こうして得られた成果や立会・試掘調査の成果をまとめてコンピュータに収録させ，遺構・遺物の検索と併行して正確な条坊復原案を作成しつつあるが，その途中で得られた成果と照らし合わせてみても，平安京の条坊割り付けが極めて高い精度で施行されていることが明らかとなっている。一方，路面や側溝の変遷および宅地・建物との関連については，左京姉小路（12）・六条大路（17）・右京七条大路（33・34）あるいは左京四条二坊（13）の調査成果が重要である。これらによれば，時代が下るに従い宅地部分が拡張し，逆に道路が狭くなることが一様に指摘されており，都市として一千余年生き続けた平安京の一断面を示すものとして興味深い。

ところで，最近の発掘調査の増加によって，平安京内においても弥生・古墳といった時代の遺跡が調査される例が多くなった。本年度においても，左京二条二坊（7）で弥生中期の遺物包含層，二条二坊（9）で縄文晩期土器，二条四坊（10）で古墳～飛鳥時代の流路，三条二坊（12）で弥生中期の溝，五条三坊（14・15）で古墳時代の周溝状遺構や流路を検出している。また京外においても北白川の小倉町別当町遺跡（52）や太秦の嵯峨野小学校内遺跡（55）では，古墳時代の竪穴住居址を検出している。同様に今年度においては白河法勝寺跡・鳥羽離宮跡・長岡京跡の各下層遺跡からも弥生・古墳時代の遺構・遺物が多量に出土した。これらの資料は，平安京遷都以前の山城地方を研究する上で欠かせぬものとなる。

最後に本年度の発掘調査によって出土した遺物は，整理箱で約4900箱ある。時期的には縄文時代から古代・中世・近世の全ての時代にわたっている。目下整理途中にあり，ここでは十分報告できなかつたが，溝・井戸・土壙等からの一括出土品には，将来整理作業が進めば編年研究の分野に重要な資料として提示できるものも多い。なお，この中で右京二条二坊（24）出土の『天曆七』墨書土器は，従来からの土器編年観に実年代を与えた点で，左京二条二坊高陽院跡（8）出土の地業瓦は，平安時代中期から後期にかけての瓦の様相を明らかにした点で特筆されよう。いずれにせよ，出土遺物は膨大な量に及ぶので，後日整理作業を経て報告を期したい。

（丸川義広）

Ⅷ 昭和 56 年度の活動報告

1 普及啓発事業概要

1 京都市文化財保護条例制定・京都市埋蔵文化財研究所設立 5 周年記念事業

- (1) 昭和 56 年 11 月 20 日（金） — 講演と映画の夕べ —

映画「大枝山古墳群」解説 調査部長 田辺昭三

講演「埋蔵文化財保護の現状と課題」朝日新聞社編集委員 玉利 勲

- (2) 昭和 56 年 11 月 16 日（月）～ 11 月 22 日（日）

写真展「京都の古墳」 於：京都市社会教育総合センター 1 階ロビー

- (3) 昭和 56 年 11 月 17 日（火）～ 12 月 16 日（水）

写真展「5 年間の発掘成果集」 於：京都市埋蔵文化財調査センター 3 階

2 発掘技術者専門研修の派遣

埋蔵文化財発掘技術者専門研修 主催 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

- (1) 昭和 56 年 11 月 9 日（月）～ 11 月 21 日（土） 13 日間

「環境考古課程」 調査部 研究職員 岡田文男

- (2) 昭和 57 年 2 月 8 日（月）～ 2 月 10 日（水） 3 日間

「第 1 回特殊調査技術課程」 調査部 研究職員 岡田文男

- (3) 昭和 57 年 2 月 24 日（水）～ 3 月 3 日（水） 8 日間

「陶磁器調査課程」 調査部 研究職員 吉崎 伸

3 現地展示会の開催

- (1) 昭和 56 年 11 月 29 日（日） 於：長岡京跡発掘調査現場事務所

「長岡京時代の遺構と遺物」 担当 調査部 研究職員 鈴木久男

参加者 約 300 名

4 研究発表会等への派遣

- (1) 昭和 56 年 5 月 10 日（日） 於：立正大学

「日本考古学協会総会」

研究発表会 調査部 研究職員 吉村正親・木下保明

図書交換会 総務部 事務職員 本田憲三・金島恵一

- (2) （昭和 56 年 8 月 31 日（日） 於：京都大学楽友会館

「第 5 回調査成果交流会」

参加団体 京都市埋蔵文化財研究センター、同志社大学地学術調査委員会、
 平安博物館、京都府教育庁指導部文化財保護課、向日市教育委員会、
 長岡京市教育委員会、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、
 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所、
 京都市埋蔵文化財調査センター

(3) 昭和56年度遺跡保存方法検討調査への派遣（鳥取県教育委員会）

調査部長 田辺昭三

調査部 主任 永田信一・大矢義明

(ただし、文化庁の依頼による昭和56年度砂丘遺跡保存方法検討のための調査)

2 京都市考古資料館運営概要

1 常設展々示替え 昭和56年11月17日（火）

北野廃寺コーナー、新発見コーナー、時代別コーナー（江戸時代）等を中心に展示替え

2 第2回京都市考古資料館小中学生夏季教室の開催

昭和56年8月19日（水）・20日（木）・21日（金） 3日間 於：京都市考古資料館

第1日目 発掘調査の目的、年代決定法および京都市域の発掘調査現状等についての
 学習。資料館見学

第2日目 法勝寺跡発掘調査現場において、実際に発掘調査を体験。

第3日目 出土遺物の水洗い、マーキング、土器復元等整理作業の実習。

参加者 113名（小学生61名、中学生52名）

3 昭和56年度月別観覧者数一覧表

月	曜日数	一 般		団 体		合 計	一 日 平 均
		12歳以上	12歳未満	12歳以上	12歳未満		
4	26	464人	208人	77人	160人	909人	34.96人
5	27	620	188	300	274	1,382	51.19
6	25	513	183	200	20	916	36.64
7	27	657	223	81	67	1,028	38.07
8	26	958	518	247	379	2,102	80.85
9	26	773	265	264	30	1,332	51.23
10	27	825	201	205	181	1,412	52.30
11	26	1,121	257	144	0	1,522	58.54
12	24	951	322	164	89	1,526	63.58
1	24	868	292	21	180	1,361	56.71
2	24	819	199	280	90	1,388	57.83
3	26	1,141	264	142	201	1,748	67.23
合計	308	9,710	3,120	2,125	1,671	16,626	53.98
平均		31.53	10.13	6.90	5.43	53.98	

3 人事異動

1 理事の委嘱

理事 盛田宗次郎（昭和56年6月29日の理事会により就任）

理事 島田 崇志（昭和56年6月29日の理事会により就任）

2 役員の変更

副理事長 仲田 直（昭和56年6月29日の理事会により就任）

専務理事 盛田宗次郎（昭和56年6月29日の理事会により就任）

理 事 福山 敏男（昭和56年6月29日副理事長を辞任）

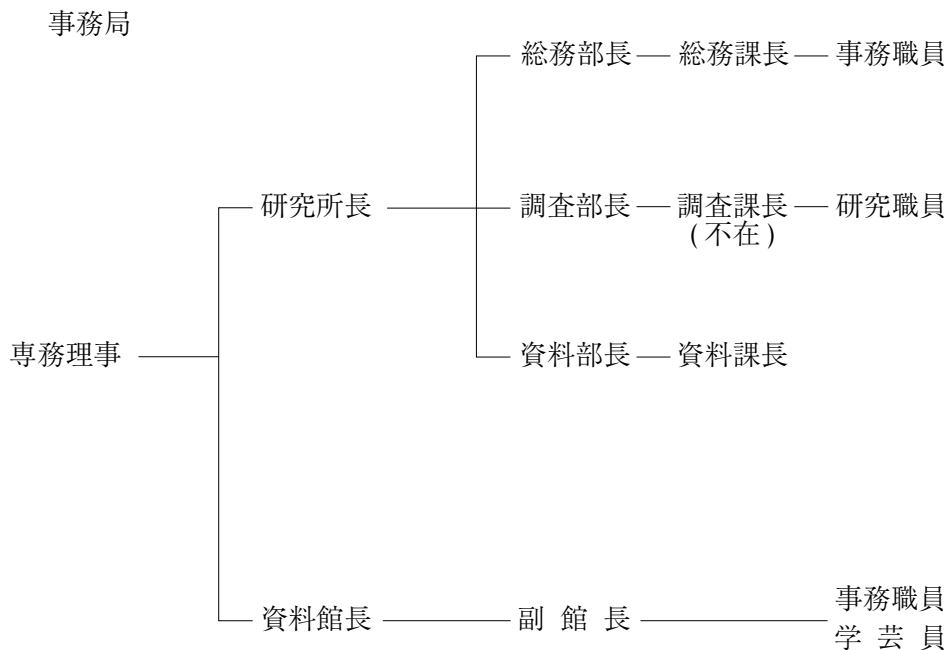
3 事務局職員の異動

転出 総務課長 西崎健次（市文化財保護課主査）
（昭和56年4月1日付市建設局用地課へ）

転入 総務課長 勝西温二（市文化財保護課主査）
（昭和56年4月1日付市衛生局東山保険所から）

採用 総務部 常勤嘱託員 小松圭子（昭和56年5月1日付）
資料館 常勤嘱託員 今井恵子（昭和56年5月1日付）
（村木節也）

4 組織および役職員



役 職 員

1. 役 員

役員名	職 名	氏 名
理 事 長	京都大学名誉教授	村田 治郎
副理事長	京都市文化観光局長	仲田 直
専務理事	京都市文化観光局次長	盛田宗次郎
理 事	財 団 法 人 京 都 府 埋 蔵 文 化 財 調 査研究センター理事長	福山 敏男
〃	京都市埋蔵文化財研究所資 料部長	木村捷三郎
〃	京都市埋蔵文化財研究所長	杉山 信三
〃	近畿大学教授	
〃	奈良国立文化財研究所埋蔵 文化財センター長	田中 琢
〃	京都市埋蔵文化財研究所調 査部長	田辺 昭三
〃	平安博物館々々長	角田 文衛
〃	京都大学教授	西川 幸治
〃	京都市文化観光局文化財保 護課長	島田 崇志
監 事	京都市会計室長	井上 嘉久
〃	財団法人京都市文化観光資 源保護財団専務理事	竹村 實

2. 事務局職員

所 属	氏 名	職 名	担 当
	盛田宗次郎	専務理事 (京都市文化観光局次 長)	
総 務 部 ・ 総 務 課	杉山 信三	研究所長 (理事・非常勤)	業 務 庶 務 (厚生会) 運 転 業 務 庶 務
	小林 博	総務部長 (京都市より出向)	
	勝西 温二	総務課長 (京都市より出向)	
	福西 喬	主 事	
	菅田 悦子	事務職員	
	上村 京子	〃	
	村木 節也	〃	
	鎌田 雅啓	〃	
	本田 憲三	〃	
	金島 恵一	〃	
小松 佳子	〃		
調 査 部 ・ 調 査 課	田辺 昭三	調査部長 (理事)	
	永田 信一	主 任	
	大矢 義明	〃	
	吉川 義彦	〃	

所 属	氏 名	職 名	担 当
調 査 部 ・ 調 査 課	本 弥八郎	主任	
	吉村 正親	研究職員	調査
	長宗 繁一	〃	〃
	平田 泰	〃	〃
	牛島 茂	〃	写真
	木下 保明	〃	調査
	鈴木 廣司	〃	〃
	菅田 薫	〃	〃
	堀内 明博	〃	〃
	鈴木 久男	〃	〃
	百瀬 正恒	〃	〃
	加納 敬二	〃	〃
	平尾 政幸	〃	〃
	磯部 勝	〃	〃
	梅川 光隆	〃	〃
	家崎 孝治	〃	〃
	辻 裕司	〃	〃
	前田 義明	〃	〃
	中村 敦	〃	〃
	久世 康博	〃	〃
平方 幸雄	〃	〃	
上村 和直	〃	〃	
丸川 義広	〃	〃	
辻 純一	〃	〃	
岡田 文男	〃	保存 処理	
吉崎 伸	〃	調査	
資 料 部 ・ 資 料 課	木村捷三郎	資料部長 (理事・非常勤)	
	江谷 寛	資料課長 (非常勤)	
京 都 市 考 古 資 料 館	黒川 武男	館長	
	山下 利弘	副館長 (京都市埋蔵文化財 調査センター所長兼任)	
	牧 康司	主事	
	峰 巍	学芸員	学芸
	今井 恵子	事務職員	庶務